

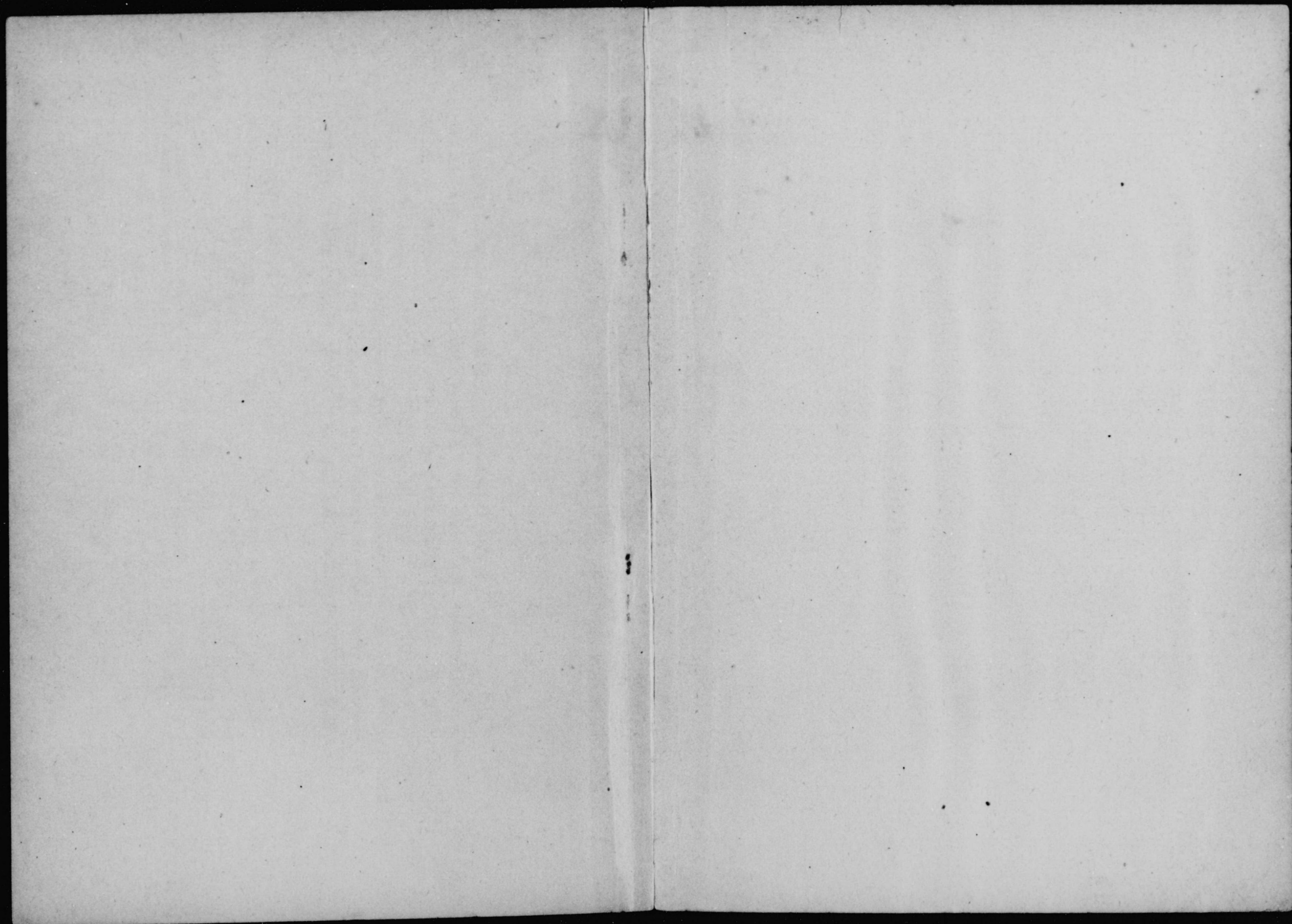
14.24

533

組合調査資料第八十號

優良農事實行組合に関する調査(一)

産業組合中央會



例言

我が國は現下食糧問題のために舉國總力を發揮してその解決に當つてゐる。

戰時食糧の増産は勞働力、生産資材關係より極めて困難なる状態にある、併し乍ら高度國防國家の基礎を確立するためにはかゝる逆條件を克服して食糧の確保をなすべきことは戰時農村に課せられた絶對的な至上命令である。

それには食糧増産の完遂が必至な事柄である、然らば増産達成の方途如何、そは農業生産に對する從來の應急的なやり方を改め小農經營の協同化を圖るにあり、而してその途は農事實行組合の擴充にある。勞働力の組織化、生産資材不足の合理的消費及技術指導の徹底を期するにもその基礎をなすものは農事實行組合の強化にあるのである。

本調査は右の如き情勢下に於て實行組合の機能、活動方針、活動形態の検討をなし食糧増産の資に供せんためのものである。

尙ほ現地調査及取纏めには本會の左記職員が當つた。

- 北海道篠津第一農事實行組合 近藤 定 義
- 同 桔梗中央農事實行組合 中村 吉次郎
- 山形縣金澤農事實行組合 菅 伸太郎
- 同 陣場新田農事實行組合 奥 津 庸
- 群馬縣分郷八崎農事實行組合 笠原 綱夫
- 千葉縣葦和田農事實行組合
- 同 根前農事實行組合
- 同 新瀧縣長表農事實行組合
- 同 椿澤農事實行組合
- 長野縣越戸第一農事實行組合
- 同 寺家農事實行組合

- 岐阜縣中山農事實行組合 栃折 好一
- 奈良縣三ヶ谷農事實行組合 佐々木 良介
- 同 長引農事實行組合 慶林 坊良次
- 鳥取縣小畑農事實行組合 瀧 原 二郎
- 島根縣久保坂農事實行組合
- 同 渡田農事實行組合
- 岡山縣神湯農事實行組合 中谷 重治
- 同 中野農事實行組合
- 山口縣上中村報徳農事實行組合 福島 秀夫
- 同 郷農事實行組合

發行所寄贈本



1424
533

愛媛縣長崎谷農事實行組合 岡部 幸郎
 同 長穗農事實行組合
 佐賀縣鶴原農事實行組合 松尾 均
 同 椿原農事實行組合
 同 宮崎縣寺迫農事實行組合 鈴木留四
 同 下中農事實行組合
 鹿兒島縣丸峰農事實行組合 小林峰二
 同 農會、農事實行組合等を煩はした、茲に特記して
 終りに實地調査に際しては當該支會、郡部會、町村産業組合、農會、農事實行組合等を煩はした、茲に特記して
 感謝の意を表する。

昭和十六年四月

産業組合中央會

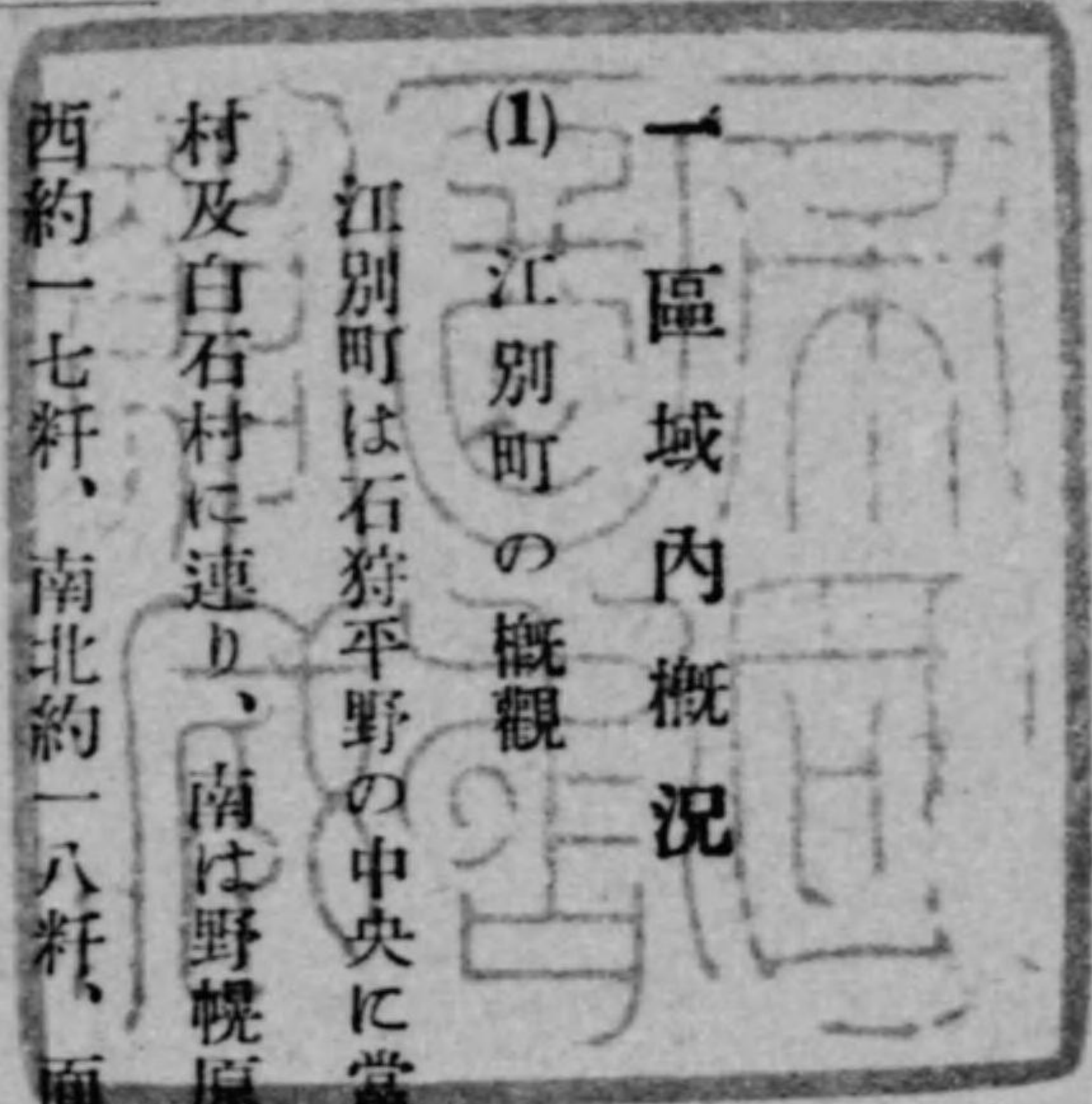
優良農事實行組合に関する調査目次

北海道篠津第一農事實行組合……………	一	鳥取縣小畑農事實行組合……………	二六
同 桔梗中央農事實行組合……………	三	島根縣久保坂農事實行組合……………	三一
山形縣金澤農事實行組合……………	六	同 渡田農事實行組合……………	三八
同 陣場新田農事實行組合……………	八	岡山縣神湯農事實行組合……………	三七
群馬縣分郷八崎農事實行組合……………	九	同 中野農事實行組合……………	三六
千葉縣蕪和田農事實行組合……………	一七	山口縣上中村報德農事實行組合……………	三四
同 根前農事實行組合……………	一四	同 郷農事實行組合……………	三六
新潟縣長表農事實行組合……………	一六	愛媛縣長崎谷農事實行組合……………	四六
同 椿澤農事實行組合……………	一八	同 長穗農事實行組合……………	四七
長野縣越戸第一農事實行組合……………	二四	同 佐賀縣鶴原農事實行組合……………	四三
同 寺家農事實行組合……………	二九	同 椿原農事實行組合……………	四三
岐阜縣中山農事實行組合……………	三三	宮崎縣寺迫農事實行組合……………	四八
奈良縣三ヶ谷農事實行組合……………	四九	同 下中農事實行組合……………	五〇
同 長引農事實行組合……………	五三	鹿兒島縣丸峰農事實行組合……………	五五

優良農事實行組合に關する調査

篠津第一農事實行組合

〔所在地〕 北海道札幌郡江別町字篠津五九番地



一 區域内概況 (1) 江別町の概観

江別町は石狩平野の中央に當り札幌市を距る東方約二十軒に位し、東は空知郡幌向村に隣し、西は篠路村、札幌村及白石村に連り、南は野幌原始林を擁して廣島村に界し、北は新篠津村及當別村に接する。地勢概ね平坦で、東西約一七軒、南北約一八軒、面積は約一九〇方軒あり、石狩川が、江別川、新夕張川、豊平川、篠津川等を合して東西に貫流して居る。此等河川の流域は地味肥沃で耕耘に適し、各河川を隔る平地は多く泥炭地であるが、客土改良に依つて農耕が行はれて居る。鐵道函館本線本町を貫通し、野幌、江別の兩驛あり、又私設夕張鐵道は野幌驛に於て省線と連絡してゐる。石狩川及江別川の舟運と相俟つて交通は便利である。

本町は舊幕の頃は石狩川漁獵者の要路で、鮭の漁場に始まり、松前藩の番屋があつた。明治四年開拓使の保護に

依つて仙臺湧谷領より農家二十戸の移住入地を見たのが本町農業の創始である。明治九年頃よりは内地の單獨移住民が渡來し漸次農家の増加を見た。大正五年一月村を改めて町とした。現在十三字よりなる。總戸數は三、三〇七戸、内農業一、一五五戸、水産一五戸、工業一、〇〇七戸、商業三七〇戸、其他七六〇戸で、農、工と商其他の業態別戸數は三鼎相伯仲してゐる。本町の發展は王子製紙工場の設置に負ふ處が多く、最要の産物は紙で、農産には麥類、米、豆類、牛乳等が主なるものである。而して産業組合は三あり、農事實行組合は五十七を數へる。

(2) 農事實行組合の區域

篠津第一農事實行組合の區域は江別町字篠津部落に屬し、元篠津兵村追給地及共有財産地であつた。大正六年本道に始めて農事實行組合の設立を見た當時は、行政區域篠津兵村部落を一組合區域として組合員一二〇名により組織せられたが、地域の廣汎と人員の過多により其の機能を充分發揮することが出来なかつたので、昭和四年二月分れて人員二十名を以て本組合を設立せるものである。省線江別驛西北方三十町札稚地方費道に沿ひ、人家は散在してゐる。

篠津部落には現在十個の農事實行組合がある。而して行政の上では字篠津部落を公區とし、公區を十個の公組に分つて居る。公組と農事實行組合の區域は同一であり、又農事實行組合長は公組長を兼ね、篠津農事實行組合聯合會長は公區長を兼ねてゐる。即ち農事實行組合と行政區域との關係は一本になつて居り、篠津第一農事實行組合の區域は行政的には篠津第一公組と稱へる。

(3) 戸數及耕地

區域内總戸數は二十七戸で、その内農業者二十二戸あり、他は工場勤務者、馬喰、日傭等である。尤も農業者以外の者も三反乃至五反位は大抵耕作して居る。專業農家二十二戸が農事實行組合を組織する。本區域は明治三十一年頃同部落民川手幸次郎氏が始めて入地開墾に従事し、其後年を経て追々入地者を増し現在に至つたもので、組合員の出身地を尋ねれば、北海道生れ十名、石川縣、福井縣各三名、宮城縣、福島縣、群馬縣、新潟縣、富山縣、愛知縣各一名である。

區域の南に石狩川、北に篠津川流れ沖積土地と泥炭地と相半する平坦な畑作地帯である。耕地面積は畑二〇六町九反で、水田は無く、農家一戸當耕地面積は平均九町四反である。耕地を自作地小作地別に見ると、自作地七五町一反五畝、小作地一三二町八反五畝である。耕地は總て部落區域内に在り出作は無く、他部落民の耕地は當部落に若干ある。農家を自作、自作小作、小作別に見ると、自作五戸、自作小作六戸、小作一戸で、地主を本業とするものは無い。

農家を經營面積別に分類すると次の如くである。

三	町	未	滿	一	戸
五	町	一	六	町	三
六	町	一	七	町	一
七	町	一	八	町	二
八	町	一	九	町	三
九	町	一	〇	町	三
					戸

一〇町——一町	四戸
一一町——一二町	二戸
一二町——一三町	一戸
一四町——以上	二戸
計	二二戸

次に農家を耕地所有面積別に分類すれば次の如くである。

一 町 未 滿	一 戸
二 町——三 町	二 戸
三 町——四 町	一 戸
四 町——五 町	一 戸
五 町——六 町	一 戸
六 町——七 町	一 戸
七 町——八 町	二 戸
八 町——九 町	一 戸
九 町——以上	二 戸
計	一一戸

尙家畜數馬四一、牛九二、羊六、鶏三六二羽である。

(4) 生産狀況

耕種収入を大別すれば、大麥八五俵、小麥二〇九俵、燕麥三、三〇二俵、玉蜀黍一一〇俵、蕎麥一六八俵、馬鈴

薯三九五俵、大豆一二四俵、小豆七二俵、中長一三俵、菜種一五一俵、亞麻クキ八、六四四斤、同種子八俵、甜菜種子一五、三八四斤、豌豆三八俵で、以上自家用を除く現金収入合計三六、八五九圓八〇錢である。
畜産収入は牛乳約一、〇〇〇石、仔馬七、牝牛一五、鶏卵一〇、六〇〇個、其他、以上自家用を除く現金収入一七、〇一二圓。

其他収入四、八二八圓。

以上現金収入合計五八、六九九圓八〇錢である。(數字は昭和十四年度分) 生産に於ける進展狀況を見れば次の如くである。

現金収入	昭和四年組合設立當時	昭和九年經濟更生五ヶ年計畫完結の目標	昭和十三年度經濟更生計畫完結の時
耕種収入	一、六三五一円	二二、五三七円	二九、三八四円
畜産収入	一〇、五二三	一一、七五三	一三、七六九
其他収入	四、〇五六	一、七一〇	六、二七二
計	三〇、九三〇	三六、〇〇〇	四九、四二五

二 沿革

大正六年北海道に始めて農事實行組合が設立された當時に行政區域である篠津兵村部落を區域として、公區長を組合長とし公組長を支部長とする機構を以て、組合員一二〇名に依り組織せられたが、地域の廣汎と人員の過多と

は事務の繁忙と相俟つて其の機能を發揮し得ず殆ど有名無實であつた。茲に於て道廳の奨めもあり、農會の意見と組合員の希望とに依り、昭和四年二月分れて人員二十名を以て本組合を設立した。昭和八年二月八日法人登記を了し江別産業組合に加入し今日に至つた。

本區域の住民は元來團體移住で無く、前記の如く各々その出身地を異にし、然も各地を流浪の末當地に停まつた者多く、一致團結とか協力の精神等は夢にも望まれなかつた。此等の人々を説きつけ、種々の困難を押し切つて漸く組合を作つた次第であるが、各地を流浪せる人々の集り故經濟的に皆殆ど無一文で、その日暮しが多く、秋の收穫の代金から肥料代や夏迄の生活費を除くと何も残らないといふ如きものが大部分であつた。従つて人々の氣持も荒み賭博が公然と行はれ、二割以上の高利の金を借りてさへ賭博を行ふ者あり、負債も可なりの額に達した。この状態は昭和五年頃迄続いた。然も之に加ふるに昭和五、六年の凶作、七年の水害に見舞はれ農村恐慌と相俟つて昭和七、八年頃に於ては經濟的に底を衝いた。茲に於て昭和九年の春に經濟更生五箇年計畫を樹て、一致協力して更生を圖らんことを誓ひ、銳意努力數年、棚橋組合長を中心として全戸能く結束して、大家族主義を實踐し、二十二戸の農家が名實共に部落一家を如實に顯現するに至つて居る。

三 機關及機構

(1) 役員

組合長の外に理事三名、監事二名あり、職員としては部長六名、係若干名、班長三名である。尙顧問、相談役を置き部落の行政關係役員を推戴してゐる。役職員は總て無報酬である。組合長が役場、農會、産業組合等より貰つ

た手當さへ適當に皆で處分し組合長一人のものとしなない。役員が自己の家業を或程度犠牲にして迄組合の爲に活動することに對し、一般組合員は勤勞奉仕的活動によつて報ひようとして居る。例へば役員の家にも病人でもあればすぐ駆けつけて世話して呉れる。畑が手遅れとすぐ手傳ひに来て呉れる。辭つても辭り切れない程だといふ。組合長は去る紀元二千六百年奉祝式典に參列の光榮を得たが、その費料も組合員が銘々出し合つて呉れた。町會議員選舉に際しては組合員が醸金して組合長に出馬を奨励したが、やうやく辭つたといふ。兎に角役員は組合に奉仕する事が直接に郷土の爲になり住みよい土地になるのだからといふ氣持であつて何の不平も無く、又其處に住居する安心と住心地良さによつて充分酬いられて居るわけである。

(2) 機構

初め組合に庶務、農事、畜産、社會、經濟、家族の六部を置き、庶務部に會計係、記録係、調査統計係、農事部に經營係、堆肥係、簿記係、綠肥係、肥料係、採種圃係、農具係、病害防除係、客土係、軍需作物係、酸性土壤係、畜産部に大家畜係、小家畜係、社會部に奉仕係、經濟部に經濟係、家族部に男子青年係、女子青年係、主婦係を置いて、夫々分擔して組合の運営に當つたが、色々の係を置いても煩はしくなり巧く行かぬので、昭和十五年度中頃改組し總務部、生産部、經濟部、社會部、青年部、婦人部の六部とし、係の數を最少限度に止めた。

總務部に會計係、統計調査係、物働係を置く。尙組合員全體を三班に分ち、各班に班長を置く。生産部は部長一人だけである。作付の割當、肥料其他の生産資材の割當配給、土地改良、地力の増進、共同出荷等生産方面に關することが主なる仕事である。經濟部は貯金、日用品の割當配給等經濟方面の仕事を行ひ、部長一人が擔當する。社

會部も部長一人のみで、その主たる仕事は、國民貯金の督勵、社會事業、共濟事業、出征遺家族の援護、道路の修繕等である。青年部は部長一人の下に班毎に係三名あり、夫々班を擔當する。婦人部も部長の下に三名の係あり夫々の班を擔當して居る。

四 事業活動の概要

本組合の事業は生産、流通、金融、社會、等各部門に亘り廣汎な活動が活潑に行はれて居る。今此等の事業活動を順次に概観すれば次の如くである。

(1) 生産に關する活動

生産に關する事業活動としては、土地改良、地力の維持増進、品種の改良、共同收益地の經營、農具の共同利用共同作業等を擧げることが出来る。

(イ) 土地改良

當組合の所在する石狩平野は太古沼澤地であつたといふ。随つて石狩、篠津の兩川流域のみは沖積土であるが、他は全部泥炭地で、區域内耕地の半分弱約百町歩に亘つてゐる。然も開墾後二十五年乃至三十年を経過して居る爲甚しく地力減耗し耕地としては殆ど無價値に等しい不毛の地がある。之が改良には客土に依る外なく組合は昭和六年に客土十ヶ年計畫を樹立し、組合の直營共同事業として之を實施して居る。先づ客土用土取場用地八反二畝九歩を買収した。當時組合に資力無き爲、最初組合長個人で買ひ、組合長が組合に貸した形で、土一立坪三十五錢宛の使用料を納入せしめて之が償還に當て、六年間かかり昭和十三年に皆済となり現在は純組合財産である。年度施業

面積の割當は耕作反別に依つて按分して施業し、工事は主として冬期間に於て行はれるが、全組合員作業に出役する義務を有して居る。日當は現金を以て支拂ひ、金額は毎年總會に於て土地々々に應じ決定する。大體一人馬一頭出で、馬糞に一合(十分の一立坪)の土を運んで一回六十五錢乃至七十五錢、平均七十錢位である。一日に一人で八、九回から十回運べるから七圓程度の日當となる。

尙厚さ一寸の客土として一反歩に五立坪の土を要するので、反當運賃三十二圓乃至三十七圓平均三十五圓、土代一圓七十五錢(一立坪三十五錢)となる。この他に監督料、道廳係員の檢定料等を加へ反當施業費は三十五圓乃至四十圓を要する。而して施業資金の調達に組合の共同借入に依つて居り、組合に於て施業を受くる組合員に代つて經費の支拂をなし、従つて組合員に對し轉貸の形となる譯である。(轉貸利率年五分)所でこの償還方法如何と云ふに、道廳より五割即ち反當二十圓の補助金があり、之が秋頃に交付されるので、先づ之を内金として拂ひ、殘金は生産物の收入により二箇年賦を以て支拂ふことになつてゐる。但し客土を行ふことにより燕麥二俵小豆一俵は必ず増産するので毎年一ヶ年で支拂済で二ヶ年に涉つたことは未だ一度も無い。かくて施業済の面積は現在八十五町に達し、未施業地十二、三町を残すのみとなつた。尙昨年度の施業面積は三町四反で、昭和十六年度には八町の豫定である。

右の外に酸性土壤矯正の爲、炭酸石灰を購入共同作業に依り施用しつゝあり、又重粘土質の耕地が六、七十町歩あるので心土改良を實施する爲、心土犁一臺を組合に備付け共同使用して居る。尙排水溝の新設改修共に共同作業に依つて行ひ完備して居る。

(ロ) 自給肥料の増産

地力の維持増進を圖る爲自給肥料の増産を奨励して居る。元は利を以て誘ふ方法により堆肥の増産を奨めたこともあるが巧く行かぬので方法を變へ左の如き方法により指導奨励して居る。

毎月二十日を堆肥デーとし、第一班午前六時、第二班同六時半、第三班同七時に各班毎に所定の場所に設けてある『更生の鐘』の下に班毎に全家族集合、農會技術員立會の下に一定の行事を行ふ。即ち、皇居遙拜、皇軍に感謝黙禱を行ひ、組合長堆肥生産を通じて翼賛奉公の訓示を爲し、聖壽の萬歳を三唱して解散し、夫々家に歸へつて施業を開始する。尙當日午後より農會技術員、組合長、堆肥係が各戸を巡視して督勵する。かくて組合設立當時は收量八萬貫餘(一戸當り約四千貫)に過ぎなかつたが、年々増加し、昭和十三年度に於ては六十萬三千貫(一戸當三萬貫弱)を産するに至つた。

堆肥場は煉瓦作り及床粘土たゞき草圍い等全戸完成し、尿溜は煉瓦作りで各戸に完備することを目標として毎年度計畫を共同作業により實施して居り、今迄に七ヶ完成した。

綠肥として赤クロバ、ベツチ、大豆、菜種等の作付を奨励し、現在三十五町歩餘を作付して居る。

(ハ) 品種の改良

採種圃五反歩を借地して共同作業に依り經營し、收獲した燕麥、小豆、菜種、小麥、蕎麥等の原種を組合員に無償で配付して居る。共同作業には全組合員出役して奉仕する。

(ニ) 共同收益地の經營

共同收益地として畑四反を共同耕作し、燕麥、小豆、菜種等を作り、收益を組合の經費に充てゝ居る。出役は全部奉仕である。反當二十圓平均の收入がある。

燃料不足の不安を除く爲本年一月泥炭地を五町歩購入し(一、二〇〇圓)共同作業で泥炭を採取して居る。一ヶ年間に一噸焚くとして一五圓宛の使用料を徴收し、三十名が使用するとして三年で借財の償還をするつもりだといふ。

(ホ) 農機具の共同利用

組合備付の農機具には、石油發動機一臺、脱穀機二臺、吹上カッター一臺、デスクハーロー一臺、カルチパツカー一臺、新墾深墾犁五臺、心土犁一臺、培土器一臺、唐箕一臺、噴霧器六臺、播種器二臺等がある。之等の農機具は實行組合で購入するには仲々意見が纏まらないので、大農具は大抵組合長が自費で購入して、組合に貸與した形で使用者より一定の使用料を徴收し、之に依つて元金利子を償還することにして居る。この場合組合長も使用料を拂ふ。償還が済めば組合の所有となるわけである。

石油發動機、脱穀機及吹上カッターには係員一名を付け、移動農具班を作つて各班單位に順次廻り、共同作業によつて夫々脱穀調整及サイロー切込を行つて居る。移動農具の使用料は一時間一圓五〇錢である。

区域内には組合有の石油發動機(三、五馬力)の外に個人有の發動機として三馬力一臺と二馬力三臺あるので、三馬力一臺は破損又は急を要する時の豫備機とし、二馬力三臺は使用せず休養機とし、但し十五圓宛の手當を交付して居る。昭和十五年度には豫備機を五日間動員した。

共同作業は班單位で行ひ、人数は十五、六人から二十人位を以てし、賃金の計算はなく勞力手間替式である。次

第に訓練が出来てからは手間替の共同作業も容易に行はれて居り又順序等に關しても頗る圓滑に行はれて居る。

移動農具班による共同作業實施成績は次の如くである。(昭和十五年度)
作業實行成績

品名	反別	俵數	品名	反別	俵數
燕麥	八町五反	三、二〇〇俵	小麥	四町五反	九〇俵
甜菜	二町九反	一一五石	大麥	一町七反	二〇
亞麻	二・五	一〇、〇〇〇斤	大豆	一町二反	二五
小豆	三・五	六五俵	小手	一・五	三五

サイロー切込み

サイロー基數	礎	數	デントコーン反別
四		一八五 <small>礎</small>	六・七 <small>反</small>

尙石油は三五罐三升受入れた中消費量は二七罐三升であつた。

デスクハーロー及カルチパツカーの使用料は一反歩五錢であつて、外に修繕費を徴することもあり、その額は農具係に一任して居る。其他の農具には使用料をとらない。

之等の農具を保管する爲の農具庫が一棟ある。坪數は八坪である。之には又配給になつた肥料を一時入れて置く

ことがある。

(ハ) 防風林植樹

紀元二千六百年記念事業として、中二間長さ三、五二五間即ち二町三反五畝に亘り耕地防風林植樹を計畫し、ヤチタモを一萬五千本昨年秋買入れ目下假植中である。植培は共同作業によつて居る。

(ト) 共同作業

共同作業は從來から各種の方面に行はれて來たが、事變後は勞力畜力の不足及各種資源の不足を補ふ爲に一層盛に行はれて居る。

客土、心土改良、排水溝設備、尿溜建築作業、採種圃經營、共同收益地に於ける共同耕作並泥炭採取、脱穀調整飼料の切斷、防風林植樹等に於て共同作業を行つて居ることは既に述べた。此等の外に甜菜其他の作物の病虫害防除、畜舎やサイローの建築作業、共同購入した堆肥材料の運搬、道路修繕、除雪作業等にも亦共同作業を行つて居る。耕作方面に於ける組織的な共同作業は未だ行つて居ない。殊に刈入等は皆同時であるから實際上出來ないわけである。多少の手傳をする程度である。サイローの建設は約一千圓の費用を要する處、共同作業によつて煉瓦や砂利や砂の運搬、屋根葺等を行へば五百圓乃至五百五十圓位で出來るといふ。組合で共同で建設し之を組合員に貸與の形にして三、四年間に償還せしめるといふ方法によつて五基を建てる計畫である。

尙管内の端から端迄一里近くもあるので共同作業場は却へつて不便故設けてない。

共同作業は算盤勘定によつては巧く出來ず、組合の組立が本當に協同體とならなければ駄目で、之が爲には精神

昭和十五年度に於ける販賣実績は次の如し。(農事實行組合員合計)

大 麥	八五俵	小 豆	七二一俵
小 麥	二〇九俵	中 長	一三俵
燕 麥	三、三〇二俵	菜 種	一五一俵
玉 蜀 黍	一一〇俵	亞 麻 種 子	八、六四四斤
蕎 麥	一六八俵	亞 麻 種 子	八俵
馬 鈴 薯	三九五俵	甜 菜 種 子	一五、三八四斤
大 豆	一二四俵	豌 豆	三八俵

産業組合は従來實行組合より組合員連帯の出荷誓約書を提出せしめて居たが、最近は全部産業組合に統制されるに至つたので出荷誓約書を取らない。

(ロ) 共同購入

肥料の合理的使用と需要を充たす爲、農事實行組合の共同購入に依つて適正な分配を期してゐる。現金購入が原則である。而して従來は産業組合のみでは當にならぬ故北海道拓殖銀行より肥料資金の融通を受けて商人よりも相當購入して居た。(昭和十五年度は拓銀より五千圓借入した。)然し今後は産業組合を絶対利用する計畫である。肥料の運搬は組合員の共同作業によつてなし、組合有の倉庫(農具庫)に入れ置き、後組合員に分配される。分配方法は、肥料の全量を二等分し、半分は耕地面積に應じ、他の半分は前年度の実績によつて分配するものである。昭和十五年度の肥料配給數量は次の如くである。

肥料配給數量 (昭和十五年度)

過 燐 酸 石 灰	六九六噸
豆 板 粕	一三五噸
魚 粕	四六噸
米 糠	三二噸
硫 安	一一三噸
石 灰 窒 素	二噸
加 里	三四噸
智 利 硝 石	二噸
鷄 糞	三八五噸
以上購入代金	五、一九七圓餘

右の外に堆肥材料の糞等をも共同購入してゐる。統制物資は役場より行政的に來るものと、役場の統制により産業組合を経由して來るものと二本あるが、何れも實行組合單位に割當を受けるので、實行組合では之を組合員に適當に分配する。但し役場より行政的に來る物は組合員以外の公組員にも分ける。統制品以外の經濟用品は別に共同で購入せず個人々々で購ふが、最近は物資不足に伴ひ何でも在るものを共同で購入することが度々である。

産業組合と購買貯金及購買品に付き當座貸越の契約を爲す場合には農事實行組合の連帯保證を付することを要し、購買貸越金の利子は日歩二錢である。

(3) 金融に關する活動

(イ) 貯金

實行組合の決議に依つて行ふ貯金は實行組合で取纏めるが、夫れ以外の貯金は組合員各自の任意預入である。組合で共同で行ふ貯金としては備荒貯金、報徳貯金及國民貯金がある。

備荒貯金は産業組合に於て取扱ふ貯金で備荒の目的を以て毎年十一月三十日迄に農事實行組合の査定した一定額を貯金せしめるもので、凶作又は天災地變の生じた場合農事實行組合長の申込により理事會の決議を経るに非ざれば拂戻すことを得ない。本農事實行組合に於ては設立當初より開始し、積立額毎月一圓宛である。昭和六年の凶作に際し全積立額一、二八〇圓を拂戻し、同七年より再度積立を始めたが、昭和十四年度末に於て一、二六〇圓、昭和十五年度末一、五〇〇圓餘に達して居る。

報徳貯金は牛乳販賣代金の百分の二、牛乳共同運搬賃一升に付三厘、初穂(燕麥二俵及小豆一俵)、出生祝一〇圓及節米(毎月三回節米日を設定)額毎月五十錢以上を積立てるもので、昭和十三年四月より實施し、貯金額は昭和十四年度末三七五圓現在約六千圓あり、尙經濟更生五箇年計畫完結年たる昭和十三年より更に十ヶ年後たる昭和二十三年度末迄に二萬圓達成を目標として居る。

國民貯金は昭和十三年度より開始し、各戸一五〇圓宛を目標とし居り、昭和十四年度末に二千圓を達成した。此等貯金の内二千圓は營農資金として組合員に融通し、他は全部産業組合へ預入して居る。而して組合員の結束力を強める爲と、資金動員の便宜上から實行組合名を以て團體預入し、個人々々の口座は設けてない。實行組合發

行の通帳があり、經濟部長が金を預り、又利息の計算等を爲す。

(ロ) 貸付及借入

農事實行組合が組合員に資金を貸付ける仕事は組合長自身が之を行ふ。この貸付資金の調達は實行組合の共同積立金(貯金)の融通、産業組合よりの借入、拓銀よりの借入等に依つてゐる。右の外農事實行組合の共同施設等の直營事業資金は産業組合や個人等より團體借入して居る。

組合の共同積立金を融通する場合の貸付利率は産業組合の特別貸付の程度即ち年七分位である。産業組合が農事實行組合に對して爲す貸付金の用途並に種類は、(一)共同施設に要する資金、(二)農事實行組合の組合員が不慮の災害に依り生活並に産業の維持困難となつた時産業組合から資金を借入れ之を轉貸するに必要な資金又は政府の低利資金、(三)個人として産業組合に加入して居ない農事實行組合員が生活上並に産業上絶對必要な轉貸すべき資金又は政府低利資金、(四)産業の發展上特に借入し轉貸を必要と認むる資金であつて農事實行組合の總會に於て總組合員の四分の三以上の同意を得たものに限られてゐる。而して、本實行組合に於ては、個人が直接産業組合より借りることは無く、専ら農事實行組合の轉貸に依つてゐる。拓銀よりの借入は金利の關係であつて、主として肥料資金である。

参考迄に昭和十五年度營農計畫に於ける各種所要資金(自家資金を除き共同責任に依る調達資金)を示せば次の如くである。(實績は未だ集計が無いので調査出来なかつた。)

各種所要資金 (借入資金)

資金の種類別	金額	備考	資金の種類別	金額	備考
家計費	一、五〇〇圓	組合積立金より借入の見込	肥料資金	五、〇〇〇圓	拓銀より借入の見込
土地改良費	七三〇圓	産業組合より借入の見込	種子代		
家畜購入	三五〇圓	組合積立金より借入の見込	其他		
營業費	一、〇〇〇圓	産業組合より借入の豫定	合計	八、五八〇圓	

産業組合は組合員の信用程度を毎年一月農事實行組合毎に評定提出せしめ信用程度表を作成してゐる。之が爲に『實行組合信用査定共勵規定』がある。この規定により農事實行組合は組合員の信用を、普通信用、起業信用、債務整理信用の別に應じ夫々所定の審査方法により査定する。而して従來は『農事實行組合員信用調書』を作成せしめて居たが農事實行組合に於て各戸の農業經營と關聯して調査した『農家臺帳』の整備後は本調書不要とし、共勵規定に基き、農家臺帳の人的信用點數、組合利用率、總收入支出額、純資金額等を參酌して信用評定額を決定することとなつて居る。以上は農事實行組合に所屬する産業組合員の信用評定方法であるが、農事實行組合に所屬しない産業組合員の信用評定は、人的信用及物的信用に分ち所定の數項目に亘り其の最寄信用評定委員の意見を徴し農家臺帳に依り産業組合長が定める。法人たる組合員即ち農事實行組合の信用程度は産業組合に對する經濟事績並に産業組合事業執行細則所定の査定基準に従つて理事會に於て決定する。尙農事實行組合長は産業組合總會の決議により信用評定委員に囑託されてゐる。

(4) 社會的並精神的方面に關する活動

(イ) 共濟施設

家計費や營業資金の中自家資金で賄ひ得ない各種所要資金は實行組合で共同で調達し農家に生活の保證を與へてゐることは前述した。この外に申合により各種の共濟事業を實施して居る。

災害受難例へば火災等の場合には家屋一棟を贈與し又組合員共同責任に於て低利の更生資金(利率年五分程度)を貸與してゐる、昭和十二年八月小倉氏火災に逢ひたる時、組合資金及見舞金等を以て三間に五間一五坪木造柵葺の家屋一棟、外家財道具類數十點を贈與した實例がある。

急病其他病難の場合には積立金を支出するの外資金の貸出を行ひ、その金高には制限がなく而も無利息で隨時償還せしめて居る。

家畜斃死の場合には共濟金として馬には二百圓、牛には百圓を交付する。この爲に馬一頭に付年額五圓、牛一頭に付年額一圓五十錢の割で積立を行つて居る。而して右標準は組合員の所有馬牛に付き三十ヶ年の統計によつて算定したものである。

冠婚葬祭に關し相互共濟を行つて居る。不幸に際しては一人當り五十錢宛の弔慰金を集金、又香奠は各々分に應じて最高二圓五十錢(三名あり)最低一圓五十錢(三名あり)他の大部分の人は二圓宛とし、全部で五十圓程度を集めて送りこの費用により五、六十圓で葬式を濟ませるから不幸の家に難儀がかゝらないし葬儀は當該班員が一切の世話をする。尙昨年からは組合員の葬儀は總て農事實行組合葬として居る。婚禮は各々分に應じて行ひ、祝儀として二

圓贈る。そして組合長が世話に當る。

(ロ) 諸 會 合

町常會が毎月一日、農會の常會が三日、區(字)の部落常會が四日に開かれ、最終常會としての農事實行組合の常會は毎月五日に開かれる。町常會には區長と町會議員が集り、部落(區)常會には農事實行組合の幹部(部長以上)が集り會場は小學校である。農會の常會には農事實行組合長が集る。農事實行組合の常會には全組合員が集り、會場は組合長の家である。目下の處實行組合有の集會場は無いが、經濟更生五ヶ年計畫の完結年たる昭和十三年より更に十ヶ年後たる昭和二十三年に組合有の集會場を建てる計畫だといふ。この常會を利用して毎月一回及其他随時に講習講話會、農談會等を開催し、農會技術員等の臨席を仰ぎ農事に關する指導を受ける。婦人部では料理の講習を時々行ひ、又禮儀作法、非常時局認識の爲の會合等をも計畫して居る。

毎年一回三月末か又は四月三日の神武天皇祭の休日に年中行事として『共勵會』を開催し、相互の進展向上に努めてゐる。會場は組合員の中で一番大きな家で、組合員及其の家族が全員集り、尙農會長、産業組合長、農會技術員、農業検査所主任、部落區長、小學校長等の出席を仰ぐ。行事としては先づ午前中に死歿組合員及家畜の慰靈祭を行ひ、次に午後に至り敬老會を行ひ七十歳以上の老人に記念品(一人一圓程度)を贈る。それより優良實行者の表彰を爲し、個人、青年部、模範主婦等各種綜合優秀實行者に對し賞品(二圓程度)を授與する。更に地力維持増進並に一般成績に就き共勵會授與式を行ひ、農會技術員の審査に依つて、地力關係(堆肥成績)には個人別の賞、一般成績は六、七項目によつて審査し班毎に授賞し又個人への授賞も行ふ。班への賞金は五圓位、個人への賞金は一圓位

である。最後に家族慰安會として浪曲、漫談等の隱藝や映畫の映寫等を行ひ、各自持寄つた食事を食べ、何もかも忘れて一日愉快に過すのである。諸會合に於ける時間勵行は嚴守され、出席率と共に成績は良好である。尙諸會合の度に一人當五錢、十錢位宛善種金を積んでゐる。

(ハ) 精神的共同訓練、其他に關する活動

全戸簿記を記帳し、生活經營の改善に努めて居り、又(一)家族及労働人員、(二)耕地、(三)家畜、(四)土地改良(五)地力維持増進、(六)營繕、(七)作付、(八)購入肥料、(九)各種要資金等の各事項に亘つて各戸より一ヶ年間の營農計畫を提出せしめ、夫れに農會の技術を加へて集計し農事實行組合の營農計畫を毎年樹立してゐる。

組合員教育の爲自轉車で一日掛りで先進地の視察を行つて居り、之に對し組合から補助金を交付してゐる。(年三十圓程度)

農具置場及農具保存の手入を共同で行ひ、又冬期間に道路の除雪を共同作業により交替で奉仕し、春秋數度の道路修繕には全員一齊に出て共同作業奉仕を爲す。

昭和十年四月以來『更生の鐘』と稱し、古電柱に三尺のレールを下げたものを各班毎に具へ、「君恩、父祖、社會、其他大自然界の恩に報謝し、時局重大の時自他共に翼賛の念を新にする目的」の下に組合員交替で打鐘を行つて居る。打鐘は夏季は午前三時に、冬期は午前五時に行はれ組合員は共に感謝を捧げるのである。

元來此處の農家は團體移住でなく各地を流浪せる者がばらばらに集まれるものであるから協同的精神を缺き一致協力は夢にも望まれぬ状態だつた。それが昭和七、八年に疲弊のどん底に陥り、經濟的に底をついたが、この疲弊

の極が寧ろ今日の協力の機縁になつたことは否定出來ない。昭和九年の春に經濟更生計畫を樹立して立上つて以來精神的指導教化に依り協力結束を來させるには五、六年を要した。本組合では日本古來の家族制度を基本とし、組合員相互兄弟主義に依つて組合を一つの大きな家庭化し、小さい乍らも生活の安定と住み良い部落の建設を目標とし次の如き『組合綱領』を制定してゐる。

- (一) 組合員は誠實其者を以つて組合道と定む
- (二) 組合員の信用評定は組合道の實行成績を以つてし物資の有無に依ることなし
- (三) 組合員は一切平等にして席次は年齢順に依る
- (四) 組合員は組合務に絶対に奉仕し組合を通じて配分せらるゝ利益の外一切の代價を受くることなし
- (五) 組合は組合員共同の力を以つて其私生活を保證す組合道に叛かざる限り如何なる災厄に逢着するも共済を以つて生活の恐怖を受けしめず
- (六) 組合は共済及營農の資金に充つる爲め積立金及共同責任に依り借り入れ金を爲す義務を有す

五 事變後の動向

(1) 生産に關して

土地に關しては事變後の動向として大した變化は無く、耕地は寧ろ幾分増加した。元來各地を轉々移動した人々が多い故、之等に土着性を持たせることが重要なので、政府の低利資金の融通を受け自作農の創設を成るべく増したいとの希望を組合當局者は有してゐる。尙土地代は最高一反一〇〇圓、最低一反一〇圓位で事變前に比し二割程

度の昂騰である。

組合長が町の農地委員になつてゐる關係上昨年秋の小作料の統制を行ひ一齊に三、四割の引下を爲した。従來は反當最低二圓五〇錢最高一〇圓で區々であり大體四、五圓から六、七圓位が多かつた。之を反當最低二圓五〇錢最高六圓とし二圓五〇錢、三圓、三圓五〇錢、四圓、四圓五〇錢、五圓、五圓五〇錢、六圓の八階級に分つた。作物は道廳↓農會↓農事實行組合↓農家と上からの命令によつて作付反別を割當られ、個人的利潤追求は次第に封ぜられてゐる。殊に軍需作物たる燕麥、玉蜀黍、亞麻、及重要作物たる大麥、馬鈴薯、採種ビート等は農事實行組合單位に割當られたのを更に實行組合に於て各農家に割當て、之等を優先的に作る様命令されてゐる。農事實行組合で作成した昭和十六年度の軍需作物其他農作物の作付割當表を參考迄に掲げる。

昭和十六年度軍需其他農作物作付割當表

作物名	割當反別	作物名	割當反別
◎燕麥	九一七反	蔬 菜	二〇反
○大麥	二七反	○採種ビート	五五反
ビール麥	二反	ステツタ	一五反
◎玉蜀黍	七三反	デントコーン	一九四反
小豆	二〇〇反	青刈飼料	二八反

大豆	三四反	共 計	九二反
亞麻	七五反		
馬鈴薯	五二反		一、七八六反
其他			

(◎印軍需作物、○印重要作物)

金肥の不足は堆肥の増産、綠肥作物の栽培、鶏糞の共同購入等に依つて補ひ、農機具の不足には共同利用により又労働力不足には共同作業に依つてゐる。然し乍ら此等の事柄は事變前經濟更生計畫樹立の當時(昭和九年)より充分行つて來て居るので、事變になつてから急にあわてゝ行ふ必要は無く、從來行つて來た事が事變後大いに役立つて居るといふ迄である。労働力に關しては從來は大低一戸に一人二人の人手に餘裕があつたので、出征者を出しても勞力に不自由する家庭は殆ど無い。(出征者現在七人)

(2) 經濟に關して

販賣物は事變後統制強化され、拔賣、闇取引等はゆるさなくなつて來てゐる。殊に軍需品關係作物及重要作物は町及農會より實行組合に對し責任數量の割當が爲され、實行組合に於ては更に夫れを各農家に割當て、責任數量の確保に努めてゐる。供出は全部産業組合を通じて行はれる。軍需作物としては燕麥、玉蜀黍、亞麻、重要作物としては大麥、馬鈴薯、採種ビート等がある。

購賣品の中統制物資は役場よりの行政的に來る物と産業組合を通じて配給されるものと二本ある譯であるが、後者も役場で統制されて居り、總て實行組合單位に割當てられ、之を實行組合に於て適當に各農家に分配する。尤も

役場より行政的に來る配給品は實行組合未加入の者にも分配する。

肥料は農家の希望品目と希望數量とは手に入らないが、堆肥や鶏糞に依り補つて居るのでさほど不足は感じて居ない。堆肥材料として糞を共同購入共同運搬し、更に毎月の堆肥デー設置によつて極力獎勵して増産を圖つて居り鶏糞も商人より共同購入してゐる。昭和十五年度には小樽より鶏糞一、三〇〇圓程共同購入した。家畜飼料の中馬の飼料は自給出来るので左程困らぬが、牛の飼料不足に困窮して居る。牛の飼料としては燕麥、豆板粕、粃、ビートパルプ等を使用するが、この中燕麥は軍の供出に當てゝ居り、豆板粕の入荷が無い爲最も不自由を感じて居る。動力用石油は實行組合から更に個人に分配することをしない。

米、砂糖、味噌、醤油、マッチ、石炭、木炭は町で決定した一定の規正量があり、實行組合長が区内各戸の家族數其他の調査取纏めをなし、物資配給通帳によつて配給して居る。

米の消費規正量(一ヶ月分)は次の如し。

年齢	種類	一般	輕労働者	重労働者
一歳—五歳		三疋		
六歳—一〇歳		七疋		
一一歳—六〇歳		一〇疋	一三疋	一六疋
六一歳以上		八疋	一一疋	一三疋

一ヶ月分砂糖は一人當半斤宛、醬油は一人當五合、味噌は一人當一五〇匁、マッチは家族八名以上大箱半分其他の細い區分があり、石炭は冬中一戸三噸、木炭は臨時に配給された物を適宜に分配する。大體月二、三貫程度である。

貯金は事變後特に奨励し、一方消費の節減に努めしめてゐる。産業組合に於て事變後昭和十三年に國民貯金を新に開始するや、本實行組合に於ても直ちに實施し、昭和十四年末に二千圓に達し、昭和十五年度に於ては各戸一五〇圓を目標として奨励して來た。

(3) 社會的方面に關して

消費規正に關しては經濟的方面の處で述べた。生活刷新は事變前組合設立の當初より實施して來て居るので何も急にあわてゝ行はないが、町全體の申合で實施されて居る。江別町の「戰時國民生活實踐強化運動具體案」に依れば、戰時國民生活實踐事項として、生活費二割五分切下實行、國民貯蓄二割増加實行、物資消費節減、新調見合、交際費の低減、廢品集積等を掲げ、その促進方法として各種團體の綜合的努力を促して居る。冠婚葬祭に關しては本實行組合だけで節約の申合を爲し、婚禮には宴會は二時間以内、祝儀は二圓と限定し、葬式には白衣は喪主のみ飲食は極めて質素とする様申合せして居る。

出征軍人は一時は十二人あつたが、目下は七人である。農事實行組合に於て遺家族の手傳ひ、勤勞奉仕を爲して居るが、遺家族では奉仕を受けず自家だけで成さうとの意志が旺である。移動農具班の脱穀調整、飼料切込等は無料で奉仕して居る。留守宅を巡廻慰問し、又年一回の共勵會に於ては遺家族に慰問品(二圓程度)を贈つて居る。

事變後は農會長や産業組合長が常會等に出席して、農家の時局認識を深めるべく努力し、自由主義思想を脱して協同的精神を昂めるべく指導してゐる。

六 經 費

經費の財源は組合費、助成金、補助金、事業収入、財産収入等に依つて居る。組合費の賦課率は一樣に一人一圓であるが、必要が無いので豫算に計上するだけで未だ曾て一度も徴收したことが無い。助成金としては役場よりの組合助成金(昭和十五年度二一圓)、勤勞奉仕助成金(昭和十五年度一三圓)、農會よりの優良實行組合助成金(毎年二〇圓)、産業組合助成金(一五圓位)亞麻會社の助成金(一五圓位)等あり。補助金としては農林省よりのサイロー補助(一基當一〇圓)森永よりのサイロー補助(一基當二〇圓)道廳よりの客土補助(反當二〇圓)農會よりの農具、農藥、石灰補助金(併せて五〇圓位)、役場よりの堆肥場尿溜補助(一〇〇圓位)等がある。事業収入としては共同耕作地よりの収入、客土十合宛寄附による共同勞役収入、肥料取扱手数料(折銀より資金借入に依る金利の差金)及移動農具の使用料等である。財産収入は組合所有土取場の客土土賣却代金(一立坪三十五錢の割)による収入である。

而して經費は主として事業費、事務費、會議費等に仕向けられつゝある。事業費には農具購入費、共勵會賞金、原種生産費、敬老會記念品代、表彰費、講習講話會費、移動農具班經費、事業獎勵費(サイロー、客土、農具、農藥品、石灰、堆肥場、尿溜等の補助)等があり、事務費は備品費、消耗品費、旅費、交際接待費、慰勞及慰安會費等で、會議費は諸會議一切の費用である。外に産業組合出資分賦金石狩更生會負擔金及雜支出として帳簿其他購入費、慰靈祭費、先進地視察費、冠婚葬祭、入退營に對する贈與金等を支出して居る。

毎事業年度初めに收支豫算を編成するが、之は大體の目安に過ぎず、豫算に依らずに適宜支出して居る。参考迄に昭和十五年度の豫算を次に載せる。

昭和十五年度歳入歳出豫算書

歳入		歳出	
一、組合費	二二四	一、事務費	一〇〇圓
二、助成金	七〇	二、會議費	二〇
三、補助金	二、五〇〇	三、事業費	三、〇四三
四、事業収入	六九〇	四、負擔金	一一
五、財産収入	一四〇	五、雜支出	八〇
六、雜収入	五〇	六、豫備金	三六二
七、過年度収入	—	計	三、六一六
八、繰越金	一四四		
計	三、六一六		

農事實行組合の財産として次の如きものがある。

土地には八反二畝九歩の共有地がある。(時價約八〇〇圓) 客土の土取場及び燕麥、小豆、菜種等を共同耕作する土地である。農具として石油發動機一臺、脱穀機二臺、吹上カッター一臺、デスクハーロー一臺、カルチパツカー

一臺、新墾深墾犁五臺、心土犁一臺、培土器一臺、唐箕一臺、噴霧器六臺、播種器二臺(以上時價一、三〇〇圓位)あり。又農具庫(八坪)一棟(時價二五〇圓位)がある。右の外現金、預金及貸付金が若干宛ある。

七 他團體との關係

(1) 産業組合との關係

江別町には江別産業組合、野幌産業組合及野幌兵村産業組合の三つの産業組合がある。而して本農事實行組合の加入して居る江別信購販利組合は江別町の行政區域十三部落の内九部落を區域とし所屬農事實行組合三十五あり、尙その設立は古く明治三十五年一月である。篠津第一農事實行組合の江別産業組合に對する出資口數一口、出資金四〇圓である。(實行組合員の産業組合出資口數合計七七口、出資金合計二、八三〇圓九三錢) 農事實行組合未加入の五戸の中二戸は産業組合に加入して居る。

産業組合と農事實行組合との關係は完全なる親子關係に在り、産業組合が部落組織に力を入れ出したのは昭和十二年頃からである。信用、販賣、購買各部門に亘つて兩者が密接な關係にあることは前に詳細に述べた通りである。農事實行組合長及職員は産業組合の理事會に出席して意見を開陳することを得ることになつてゐるが、但し決議の數に加はることを得ない。尙産業組合では二ヶ月に一回位農事組合長會議を開催して指導聯絡及統制に當つて居る。農事實行組合長は産業組合と組合員との連絡、調査、信用評定、共勵指導等に當る爲産業組合から囑託され居る。そして産業組合から農事實行組合長に對し所屬組合員一人につき八十錢位の割で一ヶ年の謝禮金の交付がある。産業組合が農事實行組合をその細胞組織として活用したことに對する効果としては、産業組合利用率の向

上、集荷の統制及共同訓練と綜合指導上の便宜等を擧げることが出來やう。

(2) 農會との關係

農事實行組合設立の當初（昭和四年）より力を入れて之を育てたのは町農會であつて、兩者は完全な親子關係にある。諸登記は農會の手で無料で行つて呉れる。農會と産業組合とどちらに對する關係が深いかといふに、それは農會の方で、産業組合との關係は理事者が未だはつきり農事實行組合を理解せぬ點あり目下過渡期にあると云へるが農會の指導は最も眞剣である。農會は毎月三日に農事實行組合長を集めて農會常會を開催し（産業組合及役場より出席）指導聯絡及統制に當つて居る。又一方農事實行組合の常會、共勵會、堆肥デー等には農會長又は農會技術員が出席して指導に當つて居る。農會より農事實行組合に對し優良組合としての助成金を毎年二十圓交付して居り、この他に農具、農藥品等に對する補助金あり、小麦とか亞麻等の増産獎勵金を交付することもめる。又農事實行組合長手當として年七圓程支給して居る。

(3) 其他團體との關係

役場と農事實行組合との關係は、農事實行組合としてのそれよりも寧ろ行政的な公組としての關係が深い。役場より年二〇圓位の組合助成金や、勤勞奉仕助成金、堆肥場及糞尿溜建設補助金等あり、又組合長手當年五圓位を交付してゐる。

行政的な公組と農事實行組合とは區域を同じくし、公組長と農事實行組合長とは兼任である。又農會長が報徳講習を授講し來り報徳精神を鼓吹して、公組單位に報徳社を結成せしめて居るので、事實上公組、農事實行組合及報徳社の三者は同一のものである。但し農事實行組合の未加入者が五戸あるので、成員の上から言つて完全に一致して居るわけではない。この點職能團體と地域團體との矛盾を暴露するものと云はねばならない。但し農事實行組合未加入者も公組の組員として組合常會には出席して居る。尙本年三月より農事實行組合の常會を『部落常會』と改稱する筈である。

八 褒賞事項

本組合は既に述べた處によつて看らるゝ通りその事業成績極めて優良と稱し得よう。耕地の大半を占める泥炭地等地の利には恵まれて居るとは言へず、人も各地よりの寄集りで有機的な繋りがあるわけではない。然し乍ら組合長を中心として漸次人の和を得今日見らるゝ如き大なる成果を擧げつゝある。

本組合は昭和九年三月北海道廳より事績表彰として金五十圓及表彰小旗を授與された外、設立以來札幌四郡農會、江別町農會等より事績優良として授賞二十九回の多きに達した。昭和十一年以來感ずる所あり、此の種共勵會に出品しないことにした。

桔梗中央農事實行組合

〔所在地〕 北海道龜田郡龜田村字桔梗

一 區域内概況

(1) 區 域

龜田村は龜田郡の西南端にあり、東は湯川町、西は上磯町、西北部は七飯村、南は函館市と接続し、北は渡島山脈により茅部郡と區分されて居る。明治三十五年四月二級町村制を施行して龜田村と稱し、大正八年四月一級町村制を施行、昭和六年三月字番地の改正を行ひ六大字を廢し十八字を設け現今に至つた。

而して字桔梗は村の西端に在り、函館本線桔梗驛の所在地で函館市より一里十餘町に位置して居る。東本願寺派の開墾地で、明治二年石川縣人四十四名により開村され、現在戸數二七六戸、部落の中に八箇の農事實行組合あり、本調査の對象たる桔梗中央農事實行組合はその名稱の示す通り桔梗部落の略中央に位し、比較的密集して聚落する三十三戸の農家を一ブロックとして包含して居る。桔梗中央農事實行組合は後述する通り設立當初(昭和四年)に於ては、出荷組合的性格より出發したものであり、従つて同志の相寄り相集れる申合組合であつて、一定の區域を限定せず組合員は散在して居た。然して昭和七年の改正産業組合法に依り之を法人化するに際し、區域を一定地區に限定する必要に迫られ、遂に昭和八年二月に從來の申合組合を一旦解散し、改めて限定區域農家のみによる農



事實行組合を組織し現在に至つて居る。因みに本年一月内務省訓令による部落會が結成されたが農事實行組合の區域と同一である。

(2) 戸數及耕地

區域内總戸數は四十戸で、その内農業三十三戸、商業二戸、公務自由業二戸、其他三戸である。商業は何れも雜貨商であり、公務自由業は會社員と鐵道従業員、其他は三戸共日傭で、内一戸は夏期炭焼を業とする。右の内農業者たる三十三戸が農事實行組合の組合員である。組合員家族の全人口は二〇七人であつて、その内譯は次の如くである。

従業者 非従業者 計	男 子		女 子		計
	男	子	女	子	
従業者	四八人		五〇人		九八人
非従業者	五八人		五一人		一〇九人
計	一〇六人		一〇一人		二〇七人

桔梗部落は石川縣よりの移住者が大部分を占め、他地方よりの移住者としては秋田縣人四戸、北海道人二戸である。

農家(農事實行組合員)の耕地面積は田三二町八反、畑七八町六反、計一一一町四反で、農家一戸當耕地面積は田一町弱、畑二町四反弱、計三町四反程度である。而して耕地を自小作別に見ると次の如くである。

田	自作地	小作地	計
計	一五町六反 三三町五反 四九町一反	一七町二反 四五町一反 六二町三反	三二町八反 七八町六反 一一町四反

組合員三十三戸は皆農業者であるが、内一戸の兼業農家あるのみで、他は全部專業農家である。地主を本業とする者は無い。自作、自作、小作別構成は次の如くである。

自作	自作	小作	計
八戸	一二戸	一三戸	三三戸
二四・二%	三六・四%	三九・四%	

次に農家を經營面積別に分類すれば次の如くである。

五反未滿	一町一反	二町一反	三町一反	四町一反	五町一反	計
二戸	一戸	二戸	六戸	一戸	五戸	一五戸

五町一反	六町一反	計
四戸	二戸	六戸
三三戸	三三戸	六六戸

二町乃至五町の經營面積を有する農家が全體の七割を占めて居る。五反未滿二戸の中一戸は兼業農家であり、一戸は出征軍人遺家族である。

(3) 生産物概況

主要農産物は馬鈴薯と大根であり、他に米、小麥、燕麥、玉蜀黍、蔬菜等を産する。馬鈴薯は種子用馬鈴薯で、府縣及滿洲方面へ移輸出されるものである。

大根は馬鈴薯と共に龜田村の特産物で、その栽培の濫觴は今より約百二十年前であるが、今や村内一般に之を栽培せざる農家は無く、其の生産物は函館、小樽、札幌は勿論遠く網走に移出し、本土は東京附近迄輸送される。赤蕪菁も亦名産地として著名であり、生食用漬物用として珍重せられ、函館は勿論、札幌地方へ供給せられ、又本土各地にも輸送される。

主要生産物の作付反別、生産數量及販賣數量を示せば次の如くである。(組合員全戸合計)
主要生産物概況 (昭和十五年度)

種	目	作付反別	生産數量	販賣數量	同上價額
米		三〇二反	九一八俵	一九〇俵	二、八一三圓

小	燕	玉	稗	大	馬	大	白	甘	其
麥	麥	黍	豆	薯	根	菜	藍	他	
三七反	六八	七三	六〇	二六	四三五	一六六	四二	一六	
八二俵	三〇六俵	一七六俵	五二俵	一〇、八七五俵	四九八、〇〇〇本	三三、六〇〇貫	五、六〇〇貫		
四五俵	七〇俵	七五俵	八六俵	一一俵	一〇、〇四五俵	四八九、〇〇〇本	三二、八〇〇貫	五、一二〇貫	
二二六圓	四九〇	七八七	六二八	一二九	四〇、一八〇	六、八四六	四、五九〇	七六八	

養畜關係としては、牛の飼育は全く無く、馬は四七頭あり、一戸當り一頭四分の割である。他に鶏一七八羽、家兎五六頭あり。

二 沿革

(1) 設立の動機

特産物たる大根は以前總て商人を通じて出荷して居た。然し商人は平年作には一般農家の大根を先に買ひ縁故關係者を後に残し、豊作の時には縁故關係者のもののみを先にし他を後へ残すといふ如き常套手段を用ひるので、農

家は反感を持つて居た。偶々昭和四年秋大根は大豊作であつたが、商人は例により買取らなかつたので農家は悲憤を極めた。同じく販賣に窮した上田松太郎氏は山岸榮吉氏等と共に奥地へ輸送販賣を試みた處賛成者十一人に及び、共同販賣の相談を爲し快諾を得た。依て直に共同販賣に着手し、販路の開拓、運賃諸経費の持寄り等幾多の辛酸を嘗めつゝ、蘭越、昆布、狩太、比羅夫、俱知安、小樽等の各地へ輸送せし處、豫想外の好結果を収めた。(商人の買取ては一本三厘強の處、共同出荷では一本五厘強に當つた)。之が本農事實行組合結成の動機である。偶々經濟的同團體の必要を痛感せる者多數あつたので、村農會小林技術員に相談した處農事實行組合の組織を慫慂せられ、茲に同志十七人が相集り組合を組織し、上田松太郎氏を組合長として、専ら經濟方面に活躍せん事を申合せ、同年十二月桔梗中央農事實行組合は孤々の聲を揚げた。

(2) 設立後の事業及経過

翌昭和五年四月、農家に糞尿溜の必要を痛感し、糞尿溜設置を申合せし、函館市川口商店とセメント一〇〇樽の賣買契約をなし、型板を作製して共同利用とし、尿溜の設置に努めた結果、同年中に十三ヶ所の設置を見た。是は桔梗に於ける混凝土糞尿溜の嚆矢であつた。

昭和五年八月加入希望者を加入せしめ組合員は二十一名となつた。

昭和五年十月馬鈴薯の共同販賣を開始し、組合員生産の馬鈴薯一、六〇〇俵を函館市瀬賀商店へ販賣した。

昭和六年七月馬鈴薯の疫病豫防に着手、共同作業によりポルドー合劑を撤布した處、組合員其他一般農家は其效

果の偉大なのに驚いた。

同年九月桔梗産業組合に於て大根統制販賣の議が起つたので、時代の要求を認め、共存同榮の主旨に従つて、進んで協力すべく、販路を擧げて産業組合に提供した。そして生産物は産業組合を通じて販賣することとして出荷誓約をなし、又購買品一切を同組合より配給を受けることを申合せた。

昭和七年の改正産業組合法に依り法人化するに當り、區域を一定地區に限定する必要により、昭和八年二月十二日一旦解散した。同月十八日區域内農家二十四名が相寄り、名稱、規約、役員等を定め、庶務、社會、技術、經濟の各部を設け、部長、係員各々其の部署に就き、設立届を提出し、同二十二日法人登記の手續を了した。そして三月五日に桔梗産業組合へ法人加入した。

同年七月に道廳より補助金を受け發動機、脱穀機及穀剝機を設備し、共同利用により勞力の節減を圖つた。昭和九年十月産業組合で馬鈴薯の統制販賣を開始するに當り、同事業一切を産業組合に移管し、名實共に産業組合の細胞組織として活動するに至つた。

由來本部落は石川縣よりの移住者が大部分を占め、而も宗教も皆大谷派の淨土眞宗を奉じ信仰心篤く、精神的融和、一致協力の氣風は自ら助長されてゐた。然し乍ら昭和八年の改組に當り區域が變更されてからは、些か一致を缺く様なこともあつた。即ち農家は道路に沿ふて比較的密集して點々と連るのであるが、途中二丁許り切れて居る箇所があり、區域内の農家は地域的に二つのブロックに分れて存在する關係上相互に「寺の方の人」、「停車場方面」と呼び、感情的にも一致せず、何か他村人に對する様な氣持で居た。因に前者は二十三戸（内組合員十九戸）、後者は十七戸（内組合員十四戸）である。

實行組合の事業を通じ又集會に依り次第に融和するに至つたが、兩者を融合させるに就ては組合長も並々ならぬ苦心をした。先づ區域内に 明治天皇御駐蹕の地があるので、此處を聖地として絶えず敬ひ、通行に際しての敬禮は勿論時々遙拜式を行ひ、この榮譽ある土地の住民として恥かしからざる様に仕向けることによつて、精神的融和を圖る上に於て大いに寄與することが出来た。

次には宗教的信仰により組合員の融和を圖つた。即ち部落創設當時より部落民信仰の中心であつた寶皇寺（區域内に在る東本願寺派のお寺）の住職を中心として、同心講なる部落常會を昭和十一年より實施し、年數十回開催し、相互教化を行ふと共に實行組合の凡ての連絡打合をも爲し、組合員の結合を促す上に於て大なる効果を擧げた。又昭和十一年より五反歩の共同作業地を經營して居るが、共同作業に於て顔を見合はせつゝ働くことに依り互に融和する様仕向け、之又効果は顯著であつた。婦人部の活動を促すことによつても亦融和を圖ることが出来た。斯くて何時とはなしに漸次組合員の心は一致する様になり、今では對立的感情も餘り無くなつたといふ。

三 機關及機構

(1) 役員

理事六名、監事二名あり。選舉により決定する。任期は理事三年、監事二年である。役員は總て無報酬であるが一昨年より組合員の決議により年三十圓の慰勞金を組合長に贈つてその勞を犒つて居る。組合長は自己の家業を時には擲つて迄組合の爲に活動してゐるので、組合員は充分感謝の氣持を持つて居り、二、三の者よりは組合長の家業の手傳へしようとの申出が絶えずあるが、意地もある故家業の方はどうか間に合はして申出を受けないで居る

このことであつた。

(2) 機構

庶務、社會、技術、經濟の四部を設け、部長は理事が之に當る。部の下に係を置き係長一名、係員若干名を置き夫々事務を分掌する。

庶務部に統計調査係、總務係、會計係を置く。統計調査係は組合員の經營、經濟等に關する統計調査を爲し、總務係は組合の各種帳簿に關する事、貯金や貸付の事務等を行ひ、又會計係は經理及出納の事務を行ふ。

社會部には家計儀禮係、修養娛樂係、互助備荒係を置く。家計儀禮係は冠婚葬祭に於ける儀禮の改善、生活改善に關する事を掌る。その相談相手となり、又場合によつてはきりもりの責任を負ふ。修養娛樂係は主として諸集會に於ける餘興の道具の仕度とか、娛樂の世話等爲す。互助備荒係は備荒貯金の集金を爲し、又組合員より手不足等の場合の手傳の相談を受け之を組合長に傳へる役である。

技術係には防除係、農具係、地力係、採種圃係がある。防除係は病虫害防除に關すること噴霧器の共同利用、管理、其の他の事を行ひ、農具係は共同利用農具の取扱者である。地力係は堆肥増産の爲の共同作業其他の事を行ふ。採種圃係は共同採種圃の一切の世話をする係である。

經濟部は産業組合との關係の經濟方面の事業を行ふ部であつて、販賣係と購買係とに分れる。販賣係は販賣物の取纏、産業組合の出荷の手傳等を爲し、購買係は肥料其他購買品の配給に關する事を行ふ。

右の四部制の外に獨立して、婦人部と青年部とがある。婦人部は組合員主婦の集りである。その目的は、實行組合で行ふ各種の事柄を主婦より認識して貰つて主人を補佐し、又間接に主人を教育する爲である。國債消化の割當に際しても婦人部の活用によつて著しく好成績を挙げた等はその良き一例である。組合ではこの婦人部の活動を助ける爲、年々五反歩の共同採種圃より生ずる収益を舉げて婦人部助成金として交付して居る。この助成は年三百圓以上あり、今では婦人部の基金は千圓以上にもなつて居る。婦人部はこれによつて作業服の共同購入其他各種の事業を行つて居る。この婦人部の活動を通じて組合員の團結は著しく強化されたといふ。

青年部は男女青年の修養、連絡の爲の集りで、年一回休日等を利用して集合する。

組合に班といふ名稱による正式の區分はないが、四つの組があり、通報傳達等の場合に利用される。これは以前農家簿記の研究をした場合に四ヶ所に分けて研究会を開いた時より生じたものである。因に部落會の方の隣保班には十五名、五名、十名、十名の四つの班がある。

以上述べた各部の部長、係長、係員の選定は理事の合議により指名するものである。一定の任期はなく、本人の申出により隨時變更する。一人一役主義が目標であるが、役割が重複する場合もある。

四 事業活動の概要

(1) 目的

本組合の目的はその規約第一條に依れば「組合員共同の福利を増進し農村の健實なる發達を圖るを以て目的」としてゐる。

既述の通り昭和四年の設立當初に於ては、仲買商人の壓迫に對抗して、自分達の手で生産物の共同出荷を爲す目

的で組合を作つたものであるが、其後漸次共同購入、貯金、貸出等經濟方面の活動及農具共同利用、共同作業、病虫害防除、土地改良、共同採種圃經營、自給肥料増産、等農事關係の廣汎なる活動へと進み、又共濟事業、生活改善、教化修養等社會的精神的方面の活動部面をも行つて來たもので、従つてその目的とする處も農事、技術、經濟社會、精神等各分野に亘つて向上發展を期する様な廣汎なものとなつた。殊に事變下に於ては、事變遂行上農村に課せられた大目的たる農業生産擴充、農家生活安定の線に沿つて、増産對策、作付の割當、勞力の調整、作物の供出、必需資材の割當配給等に力を竭し、又貯蓄の奨勵、國債消化、消費規正等にも努め、事變下重要國策擔當の最下部組織として、種々惡條件の下にも拘らず團結の力、相扶の情誼によつて、銳意努力しつゝあることは、眞に目覺しく又心強く感ぜられる。

(2) 生産に關する活動

生産に關する活動としては、品種改良、共同作業、農機具共同利用、自給肥料増産、病虫害防除、土地改良等が主なる事業である。

(イ) 品種改良 (共同採種圃の經營)

品種改良の爲に昭和十一年より五反歩の共同採種圃を經營してゐる。土地は組合の所有ではなく、借地(小作料三〇圓)である。主として馬鈴薯を栽培し、時には大根の裏作をすることもある。農會より配布された種薯を此處で栽培し、その收穫を組合員の希望により配布する。頒布値段は大體産業組合の販賣値段が標準である。作業は總て組合員の共同作業に依る。作付には組合員總出、除草には何人、收穫には何人といふ工合に仕事の種類難易に應

じ適當に勞力を配分して共同作業を行ふ。出役は總て奉仕であつて、勞賃の支給は無い。次に金肥は組合で購入するが、自給肥料は各組合員が持寄る。即ち組合員の半數宛一ヶ年交替で堆肥三百貫と人糞尿四石宛を持寄ることになつてゐる。一ヶ年の収益は小作料、肥料代等を差引き大體平均三百二、三十圓程度上る。尙大根の裏作等を爲す場合は五、六十圓の収益がある。この採種圃よりの収益は擧げて婦人部の助成費に當てゝゐる。

(ロ) 共同作業

共同作業としては、前記の共同採種圃經營を始めとして、後に述べる農機具共同利用に依る脱穀調整、堆肥積込、病虫害防除、土地改良等の場合に行はれる。又出征軍人遺家族で手不足の家庭に對して共同作業により奉仕することがある。然し一般組合員の家庭では左程勞力の不足は無いので、耕作方面での組織的共同作業は未だ行つて居ない。

此等共同作業は其の作業の種類に應じて色々の方法で行ふが、皆手間替乃至は奉仕により、勞賃の計算は無い。

(ハ) 農機具共同利用

組合有の農機具は現在五十三點の多きに達して居る。その主なるものは石油發動機一臺、脱穀機一臺、穀剝機一臺、深耕プラウ三臺、噴霧器二九臺、混凝土型板二組、混凝土用附隨農具若干等である。

發動機、脱穀機、穀剝機は昭和八年七月に道廳よりの補助と産業組合からの融通により購入した。移動式で操作運轉方法の講習を受けた農具係が居り、十數名宛の手間替の共同作業によつて、組合員の申込順に共同利用せしめつゝある。昭和十年二月一日より次の様な『精穀用具使用規程』及『農具使用規程』を實施してゐる。

精穀用具使用規程

- 第一條 本組合ニ左ノ精穀用具ヲ設備シ其ノ利用規程ヲ左ノ通り定ム
- 第二條 本組合ニ設備スル精穀用具次ノ如シ
 - 一、ヤンマー式發動機 一臺
 - 一、岩田式剝穀機 一臺
 - 一、藤瀬式脫穀機 一臺
- 第三條 組合員ニシテ機械器具ヲ利用セントスルモノハ直接係員ニ申出ヅルモノトス
- 第四條 同一日時ニ利用者二人以上申込ノ場合ハ申込順序及作業狀況ヲ參酌シテ係員之ヲ定ム
- 第五條 機械器具ヲ利用セントスルモノハ係員立會スルニ非レバ利用スル事ヲ得ズ
- 第六條 利用者ハ燃料其他消耗品一切ヲ負擔スルモノトス
- 第七條 利用者ハ左ニ定ムル所ノ係員ノ實費ヲ支拂フモノトス
 - (1) 毎年四月十一日ヨリ十一月二十日マデ 一日金二圓五十錢
 - (2) 毎年十一月二十一日ヨリ翌年四月十日マデ 一日金一圓五十錢
- 第八條 利用時間ハ午前七時ヨリ午後六時マデトス 但シ時間外使用ノ場合ハ每一時間毎ニ金三十錢ヲ徴收ス
- 第九條 前各條以外ノ事項ハ組合長之ヲ定ム

農具使用規定

- 第一條 本組合ニ左ノ農具ヲ備付ケ共同使用ヲ爲サントス
 - 一、噴霧器
 - 一、深耕プラウ
 - 一、製糞機
 - 一、肥料溜用混泥土型板
 - 一、堆肥場用混泥土型板
- 第二條 組合員ニシテ農具ヲ使用セントスルモノハ最寄管理者ヘ期日及日數員數等ヲ申出デ借受ケ手續キヲナスベシ
- 第三條 同一農具ナリ一時ニ多數利用申込アリタル場合ハ申込順及圃場ノ狀況並ニ作業ノ狀態等ヲ參酌シテ管理人其ノ日割ヲ定ム
- 第四條 製糞機ノ使用日割ハ區域内或一方ヨリ始マリ逐次使用スルヲ得ルモノトス
- 第五條 農具管理者及使用者間ニ於テ農具受渡シノ場合ハ故障其ノ他事故ノ有無ヲ確ムルモノトス
- 第六條 農具ノ使用期間ハ混泥土型板ハ七日間其他ノ農具ハ二日間ヲ超ユルコトヲ得ズ
- 第七條 使用者ハ作業終了後直ニ當該管理者ヘ返納スルモノトス
- 第八條 農具ハ丁寧ニ取扱ヒ若シ破損セシメタル場合ハ相當辨償ノ責ヲ負フモノトス
- 第九條 農具使用ニ要スル消耗品及運搬賃等ハ一切使用者ノ負擔トス
- 第十條 本規定ヲ遵守セザルモノハ次回使用ヲ拒否スル事アルベシ
- 第十一條 前各條以外ノ事項ハ組合長之ヲ定ム

尙之等農具は皆移動出来るものゝみであるから組合の共同作業場の必要はなく、又産業組合に精穀利用工場があるので今後も作らぬ方針だといふ。農具庫も未だ作るだけの餘裕がない。大農具は農具係が預つて保管し、混泥土型板は人家の軒下に、噴霧器は班毎に四ヶ所に分けて個人の家に預けて置く。但し使用期には各戸を順次廻るので一ヶ所に長く保管されることは少い。

(三) 自給肥料増産

自給肥料の増産を圖る爲、兎角各農家が億劫にして怠り勝ちな堆肥の積込、切替を共同作業によつて督勵し又能率を擧げて居る。共同作業は大體年二回二月と九月とに行ひ、全組合員が三班又は四班位に分れ、班毎に一戸々々順次に廻つて積込又は切替をする。作業は手間替によつてゐる。全戸終了するには大抵三、四日位かゝる。

次に堆肥場建設互助に關する申合があり、それによると組合員が堆肥場を一ヶ所作る時に全組合員より一圓宛醸出して援助することになつて居る。之に基いて今迄に作つた堆肥場は二十二個である。尙堆肥場建設に際し必要な混凝土型板を組合に備へ付け之を利用せしめて居る事は既述の通りである。

糞尿溜の設置も獎勵して居り、既述の通り混凝土型板の共同利用により便宜を計つて居る。現在迄に設置數五十個を算へる。

(ホ) 病虫害防除

小人数の共同作業に依つて農作物の病虫害防除を行つて居る。之は昭和六年より實施した。組合所有の噴霧器二十九臺あり、之を四ヶ所に備付け組合員に利用せしめて居る。

(ヘ) 土地改良

水田に五、六町の泥炭地があるので、手間替の共同作業によつて、客土や暗渠排水等を行つて居る。

(3) 流通過程に關する活動

(イ) 共同販賣

實行組合を通じて出荷する販賣品の主なるものは、馬鈴薯、大根、小麥、燕麥、玄米で總て産業組合へ無條件の委託販賣である。但し大根は鐵道輸送するものゝみを取扱ひ、函館市中へ出すものは、赤蕪菁、甘藍、白菜其他の小蔬菜類と共に個人で市場へ出荷する。産業組合取扱の販賣物は現在全部農事實行組合に依て統制されて居り、拔賣は全く無く、又實行組合を通さず個人で産業組合へ出すものは無い。従來は産業組合に對し出荷誓約書を提出して居たのであるが、最近は統制の強化と組合員の理解とによりその必要も無くなり、四、五年前から行はなくなつた。

販賣物の搬出には係員が主として之に當るのであるが、唯大根のみは混雜を防ぐ便宜上組合員が各自搬出することになつてゐる。出荷の場所は産業組合の倉庫、驛等である。

産業組合に共同出荷した物の販賣代金は産業組合に於て各人別に肥料代其他の掛賣代金や貸付金を清算して支拂するものであるが、この場合代金を組合員に直接交付せず全部を各人の貯金口座に受入れることになつて居る。而してこの販賣代金による相殺は馬鈴薯の販賣代金だけで充分である。それ程馬鈴薯の産出は多い。尙昨年馬鈴薯の出荷に當つて一俵一錢の歩合金を組合員より徴收し、之を實行組合の經費の一部に充てゝ居る。

販賣実績に關しては、前に生産物概況に記した通りである。

(ロ) 共同購入

肥飼料、農具、農藥等の産業用品を始め、經濟用品を農事實行組合で共同購入して居る。肥料は役場から各實行組合毎に割當てられたものを産業組合より配給を受ける。この場合参考迄に個人別の仕分した實行組合の一纏めの

申込を提出する。配給の方法は、購買係が産業組合倉庫、驛、又は場合により工場（函館に在り）で受取り之を組合員へ配達する場合と、各組合員が銘々で受取りに行く場合があるが、最近係員による配達が多い。肥料で個人買されるのは函館市内よりの馬糞位のもので、他は全部實行組合によつて統制されて居る。飼料は最近配給が無いが、來れば實行組合で各戸に割當配給する。農具も組合で取纏めて共同購入する。農薬は大體肥料と同様である。經濟用品の中で米、木炭、石油を始め統制品は總て實行組合單位に割當られるものを、更に組合員に割當配給する。統制品以外の雜貨類は共同購入に依らず個人買が多い。簡単な品は小學兒童が登校の序に買つて歸へる。尙農事實行組合には店舗はない。現金買が原則であるが、肥料等には掛買もある。

共同購入した物品で主なる物の實績を摘録すれば次の如くである。（昭和十五年度）

肥料	二、七五二圓
農薬品	四四三圓九八
石炭及石油	一、四一四圓五〇

(4) 金融に關する活動

(イ) 貯金及預金

貯金の共勵は實行組合の重要業務の一つである。殊に事變後は政府の貯蓄獎勵運動に即應し積極的に獎勵して居る。生産物の販賣代金は組合員に直接現金を交付せず全額を産業組合貯金として各人の口座に入れて居ることは前に

述べた。この外隨時に個人で任意に貯金するものもある。

昭和十一年より強制天引貯金として備荒貯金を行つて居る。これは一戸一年十圓宛馬鈴薯販賣代金より天引するものである。之の備荒貯蓄が目標の二千五百圓に達したら、その利息を病氣、罹災者、出征遺家族等に無利子で融通して共濟資金に充てやうと計畫して居るとのことである。

この他に強制的に月掛貯金を行つて居る。掛金は十錢である。全組合員が交替で集金して廻り（三ヶ月交替、一年交替の二種あり）、又は集會の時に集める。この貯金のみは實行組合名で産業組合へ團體預入して居る。

組合員貯金を貯金の種類別に見ると次の如くである。

組合員貯金（昭和十五年度末）

備据定當	金 額	人 員
計	荒 置 期 座	
	二五、七八〇圓	十八人
	三、〇五三圓	七人
	二、〇九二圓	三十一人
	一、六三六圓	三十一人
	三二、五六一圓	

以上は總て産業組合貯金で、銀行預金、郵便貯金等は不明である。産業組合貯金は一戸當り平均九百八十餘圓に

達する。

(ロ) 貸付及借入

産業組合の方針として個人貸付は可成く之を差控へ主として農事實行組合の轉貸に依る特産品たる馬鈴薯の出荷を條件としての貸付が大部分である。個人貸付の場合即ち個人が直接産業組合から借りる場合には實行組合長の承諾を要することになつて居る。但しこれは土地購入等の大口の買物以外には餘り無い。

轉貸の場合組合員は實行組合長の手元にある貸付金帳簿に認印を押捺して借りる。轉貸の利率は産業組合と同じく(日歩一錢七厘)利鞘は取らない。貸付金の用途は肥料資金、家畜購入、馬車、農具、飯米購入及び舊債償還等が主である。回収は些か危険の様であるが販賣品たる馬鈴薯の共同出荷販賣金から相殺回収し、生産物を全部押へて居るので確實である。約束不履行者には部落特有の相互制裁が加へられ、殊に最近の様に配給品の制限下にあつては割當品を配給せぬことによつて制裁を加へることが出来るので、一層確實であるといふ。兎に角之に依て産業組合の手数は著しく省けて居る。昭和十六年二月現在に於ける貸付金は産業資金三〇三二〇圓、經濟資金二〇八五〇圓、計一、一七〇圓である。

右の外共同作業とか共同設備等を行ふ爲に必要な農事實行組合の直營事業資金を産業組合より團體借入することがある。

次に信用評定の方法は、實行組合の總會に於て組合員が投票を用ひて相互の信用程度を金額で決する。この場合の計算標準は主として前年度の産業組合に於ける販賣実績に依り、總會の席上各人の販賣実績表を壁面に掲示して之を基礎資料となさしめ、之に各人の家計、勤怠、協同精神等を幾分考慮して投票せしめるわけであるが、投票は無記名投票である。即ち各人は自己の分をも含めた全員の信用を投票用紙に記入する。そしてこの投票を全部加へて組合員數で割り平均金額を出して、之を以て信用評定とするのである。産業組合では此の標準をその儘採用することになつて居る。尙實行組合長は産業組合の信用評定委員である。

(5) 社會的並精神的方面に關する活動

農事實行組合は部落に於ける社會生活を主宰して、生活改善、相互共済、精神的向上、部落融和等社會的並精神的方面に關する活動が、技術及經濟方面の活動と並んで重要な任務となつて居る。生活改善に關しては後に銚後活動の處で述べることとして、共済事業、諸會合、精神活動に付述べることにする。

(イ) 共 濟 事 業

備荒貯蓄が目標額(二、五〇〇圓)に達したなら、その利息を病氣、災難其他の場合の共済費に役立てやうと計畫して居ることは前述した。

役馬の斃死した場合一五〇圓以内の見舞金を贈る家畜共済制度を昭和十二年より實施して居る。規定は左の如くである。(規定の出來たのは昭和十四年三月一日より)

農耕馬飼育者共済積立規定

第一條 本組合員ノ所有若クハ管理飼養スル農耕馬ノ斃死其他不慮ノ災害ニ遭遇シ永久使用ニ堪ヘザルタメ其代馬ヲ購入セ

ントスル時其ノ購入資金ノ一部ヲ助成スルヲ目的トス

第二條 農耕馬飼育者タル組合員ハ毎年十二月三十一日迄ニ馬一頭ニ對シ金五圓宛共濟納付金ヲ豫出積立ツルモノトス

前項納付積立金ハ特別積立金トシ組合長管理ス

第三條 農耕馬トハ明三歳以上ニシテ農耕ニ從事シ農業經營上缺ク可カラザル馬ヲ云フ

第四條 本規定ニ定ムル農耕馬ハ所有馬ニアリテハ六ヶ月以上管理ニアリテハ一年以上ヲ飼養シタルヲ要ス

第五條 前條ニ定ムル飼養期間ニ滿タザル場合ト雖モ組合員ノ總意ヲ得テ助成スルコトアルベシ

第六條 共濟助成金ハ馬一頭ニ對シ金一百五十圓ヲ限度トシ理事會ニ於テ決定ノ上交付ス

第七條 前條ニ定ムルノ外農耕馬ヲ所有セザル組合員ト雖モ組合長ニ申出デ同情金ヲ豫出スルコトヲ得

第八條 本規定ヲ惡用シ虚偽ノ行爲アリト認ムル時ハ組合規約第三十條ニ依リ除名ス

(ロ) 諸 會 合

農事實行組合有の一定の集會場は無く、諸集會は組合員の家を順次廻り持ちで開催することになつてゐる。組合有の集會場は無い方が良いといふ理由として次の様な點を擧げて居た。第一には廻り持ちであると距離に遠近がなくなる。第二には集會場だと掃除とか後始末とか管理上面倒である。第三には廻り持ち開催の方は組合員家族に對する教育上良い。即ち開催當番に當つた家の家族は嫌應なしに會合の内容を見るから、自然その必要性を認識する様にもなり、一種の實物教育になるといふ。その他各家庭の親睦を増す上からもこの方が効果があるであらう。

農事實行組合の例會は部落會の常會と殆ど一緒に開催される。又前に述べた同心講がそのまま例會になることもある。例會として獨自に開催されることもある。開催日は別に決つて居ないが、大抵は夜間が利用される。而して同心講は信仰を中心とした集りであるが、同時に部落會であり又實行組合の例會であり、各種の連絡打合や、相互

教化や、又慰樂懇親が行はれるものであつて、且最も頻繁に開かれる會合である。

同心講は年に數十回開催される。農閑期は十日に一回以上時には連続して開かれる事もあり、農繁期には少しく減するが、兎に角お寺の坊さんの都合と會場の都合がつけば随時開かれる。會合の順序としては、先づ佛壇に向つて全員讀經をし、終つて僧侶の講話があり、次に又女子の讀經の稽古があり、それから各種の通達やら割當品の配給等を爲し、座談又は餘興等を行つて會を終る。本來は實行組合の組合員の集りであつたが、別に範圍を制限せず誰にも開放して居るので、未加入者も來るし、又他部落の者も來る。宗旨の違ふ人も二、三あるが、感心に缺かさず出席するといふ。

時間は確實に勵行されてゐる。參會順に番號札を取る様な仕組になつて居り、出席の順番がとられ、出缺簿に成績が載る。この場合次の集會を開く番の人が札を集める役をする。この出席の成績は配給品を分配する等の時に抽籤の順番に影響する。そして缺席者は缺格となる。この様な一種の罰則によつて、出席率は非常によく、又時間もよく勵行されて居る。

(ハ) 精神的並教育的活動

昭和八年二月の改組の時に組合訓を作り、以後集會の時之を朗讀して居る。

組 合 訓

一、御駐蹕ノ地我等ノ誇ナリ

行クモ歸リモ御辭儀ヲシマセウ

二、今日ノ力ハ祖先ノ賜ト知レ

神佛ヲ敬ヒマセウ

三、孤木倒レ密林繁ル

オ五ニ力ヲ合セマセウ

四、我等ノ家族ハ二百人

團結シマセウ

五、和二勝ル力ナシ

和合シマセウ

六、積ムハ郷土ノ護リト知レ

節約シマセウ

七、子孫ニ遺ス理想郷

勵ミマセウ

次に經濟活動と關聯するものであるが、一面教育的活動でもあるものに、各戸計畫の樹立と農家簿記の記帳とがある。

桔梗産業組合に於て組合員全員の各戸經濟調査を實施すると同時に、實行組合では全員に農業經營計畫を樹立せしめ、作付並に收支の計畫をなさしめて居る。作付計畫は、最近は農會よりの作付命令を實行組合長が各組合員に割當てたものを基準にして、各自が耕地全面に亘つて計畫を樹てるものである。

一方農家簿記を全戸に毎年記帳せしめて居る。之には以前二名の簿記係が居つて常時記帳指導し、又班毎に研究

會を開く等の方法により獎勵したので四年程前からは全戸に行互り、且農業設計勞務日誌と共に、農家の記帳としては極めて優秀な成績を擧げて居る。而してこの簿記に依る實績と收支計畫とを比較對照し相互研究の上、翌年度の生活經營の改善と計畫樹立の基礎として居り、又組合員全員の記帳決算の成績を平均し、他村の優良實行組合や、道廳道農會で發表した農家經濟調査の實績と比較検討して、生活經營の改善に努めて居る。

五 事變後の動向

(1) 生産に關して

土地に關しては、元來耕地の不足を感じる程度であつたのであるが、事變後は幾分増加して來て居る。一戸當經營面積昭和十三年には二町七反餘であつたが、昭和十五年には三町四反程度となつた。而して新墾のゆとりは殆どなく、之は少しでも土地購入や小作地の増加を圖らんとする農家の熱意の現はれに外ならない。休閒地は無く、出征遺家族の耕地についても皆が應援して反別を減する様なことはない。水田の一部に在る泥炭地を共同作業によつて土地改良して居ることも、少しでも増産を計らうとする熱意の一端である。尙参考迄に土地價格は事變前より二割位の高騰を示して居る。(畑は現在最高反三百圓、最低二百圓位、水田の賣買は殆ど無い)。小作料は事變前と殆ど變りがない。(平均畑反當五圓、水田反當四斗五升位)

作物に關しては、農會で供出作物の作付反別を農事實行組合單位に割當てたのを更に實行組合長が各戸に割當てる。此處で割當られる供出作物は米、小麥、燕麥、玉蜀黍である。馬鈴薯は農會の割當が來るが、各戸には割當しない。事變後の變化としては馬鈴薯の作付反別が十二、三町歩減少し、供出作物が増加した。尙水稻増産の一方法

として温床苗代が増加した。生産物増産の爲に病虫害防除が積極的に爲されてゐる。即ち、種薯及種籾の消毒は道廳の規定に従ひ實施すること、稻熱病は早期發見に努め泥負蟲と共に自發的に防除すること、稻熱病に對しては右の外防除督勵委員の指揮に従ふこと、馬鈴薯にはポルドー合劑二回以上撒布すること、等を申合せ防除を怠つた者は場合により過怠金を徴することとなつて居る。

金肥の配給は窮屈なので、施肥方法の研究を爲し、作物、土質等により施肥規準を決定、工夫して使つて居る。一方自給肥料の増産は極力之を奨勵し、共同作業によつて督勵し又能率を擧げてゐる。かくて堆肥の施肥量は漸次増加して來た。反當施肥量事變前二〇〇貫内外、昭和十三年二六〇貫、昭和十五年三〇〇貫餘と進み、尙昭和十六年には三五〇貫を目標としてゐる。飼料は最近殆ど配給されないで、自家生産の燕麥、玉蜀黍、米糠等に依存し之等の増産に努めると共に使ひ方を研究工夫して居る。

勞働力の不足は現在餘り顯著でない。現在應召入營者七名、戦死四名、歸還十名であつて應召入營者の中、大部分は農業に關係の無かつた者で現在勞力援助を要する家族は二、三あるのみである。尤も事變勃發當初は戸主級の者の應召も可なりあつた爲女孀となり可なり要勞力援護家族があつて不自由もあつたが、最近は戸主級の出征が少いので樂になつて居る。

出征遺家族で女手なるが故に勞力援護を要する者には實行組合で共同で手助けして居る。先づ肥料として函館市より二馬車乃至一馬車の人糞尿を運搬して呉れる。これは組合の申合せによるもので、その家の肥料所要量や運搬當番の割當等組合長の決定により實施する。次に農事の手助けは全般に亘るが、主として女手で出來難い作業（例

へば馬の使用や出荷等）の援助をしてやるのである。之には出征遺家族以外の組合員を出征遺家族人員別に作業を按配し分擔して持辨當で奉仕する。

出征遺家族以外の一般家庭では格別勞力の不足は無い。但し金肥の代りに自給肥料の増産を圖るとか、遺家族の援護とか、各種の方面に仕事の量が増して來て居るので結局事變前よりは骨が折れる。全般的に見て勞働力不足と迄は行かずとも、勞働が強化されて來て居ることは弊ふべくもない。之が對策としては、先づ事變終了迄朝三十分の早出をし、且勞働時間を一日一時間延長することを組合是として申合せて居る。又温床苗代は、植付時の相違、従つて除草時期の相違により勞力の調整を圖れるので、勞力問題解決の一方法としても奨勵されて居る。尙軍馬の徵發は今事變以來七頭あつた。

農機具の共同利用は事變前（昭和八年）より實施されてゐるので、事變後になつて格別變つたことはない。

(2) 配給に關して

統制品の配給は窮屈になつて居る。肥料、飼料、農藥等は農事實行組合毎に割當られたものを、農事實行組合長が更に各戸に割當てる。金肥消費量は減少して居り、飼料は最近殆ど渡らない。何れも使ひ方を工夫研究すると共に自給部分の増産に懸命である。

今肥飼料の購入數量を事變前の昭和十一年より各年別に比較すれば左表の如くである。

肥飼料購入數量累年比較（組合員合計）

種類	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年
硫酸安	八四〇疋	一、一六〇疋	一、〇四〇疋	七六〇疋	六四〇疋
過燐酸石灰	七、九二〇	八、八四〇	八、二四〇	七、五二〇	七、一二〇
石灰窒素	三四五	三三二	一三八	一一五	一一五
硫酸加里	一、五〇〇	一、七〇〇	一、四六〇	一、七四〇	八〇〇
大豆粕	二〇〇	二六〇	一四〇	二二〇	一五〇
魚肥	一、八〇〇	二、四〇〇	二、二〇〇	二、三二〇	一、五二〇
配合肥料	六、二八〇	六、五二〇	六、六四〇	六、七二〇	七、一二〇
其他	六四〇	五七〇	五五〇	六一〇	六八〇
飼料	三六俵	一六五俵	一〇二俵	八九俵	二二俵

米は自家用保有米のない組合員七戸に對し農事實行組合で通帳制により配給して居る。元配給は産業組合である。通帳は家族と年令等に應じ配給表の附いたもので、村長の發行に掛る。一ヶ月配給量五俵である。綿製品の配給は時々あるが、之又實行組合に於て割當する。木炭は役場で經營し、産業組合に請負はしめ、農事實行組合を通じて各戸に配給して居る。家の大小により多少の手加減はあるが、一戸一ヶ月平均五貫匁宛配給して居る。砂糖及マッチは家族人員に應じて一定規準による割當を爲し、切符制に依つて實行組合から配給して居る。

一方販賣に關しては、生産物は總て産業組合に一元集荷すること、蔬菜の中馬鈴薯、大根、白菜、赤蕪菁、甘藍等は産業組合に集荷することに固く申合せて居り、拔賣等があると實行組合内部の隣近所でやかましく、除名問題が持上る程である。これは皆が産業組合を理解するに至つたこと、その事變下に於ける國家的使命を充分認識するに至つたことによるものである。又供出作物は割當られた反別だけは必ず栽培することに申合せ、割當數量を確保することに努めて居る。昭和十五年度に於ては管理米一八〇俵三斗の割當に對し一八四俵供出し、小麥は六一俵、燕麥は六〇俵割當に對して六四俵、玉蜀黍は六五俵割當に對し割當通り夫々供出した。尙之等は總て産業組合を通じて供出して居る。

(3) 金融に就て

貯金は事變後特に積極的に奨勵して居る。由來生産物販賣代金は清算後現金で渡さず、各人の貯金口座に入れて居り、又同時に天引の備荒貯蓄を爲さしめて居るのであるが、尙事變後には、産業組合の發行する愛國貯金通帳によつて強制的に毎日家族に十錢宛を積立させて居る。之は係員が各家を廻つて集金し、又は集會の時等に集める。公債の消化は實行組合で自發的に行ふものではないが、事變後三回に互つて購入した。

公債消化の割當は、村長↓部落聯合會↓實行組合↓組合員と上から下に来る。第一回の公債消化は事變後間もなく昭和十三年で、負擔は戸數割を基準とし生産金より天引して八〇〇圓程消化した。第二回は昭和十四年で、教員俸給國庫助成に伴ひ戸數割が減額された時に、それを納めたものとして割引債券一、一〇〇圓程購つた。第三回は本年一月で、一、六〇〇圓の割當を受け一、七九〇圓消化した。公債は各家庭で所持して居る。

農家負債は減少して居る。密かに探知する處によれば現在負債額は二、三百圓位のものだといふ。四人特融資金を借りて居るのみである。以前は銀行より借りて居た者もあつたが、今は全く無し。

(4) 社會生活に就て

元來百姓らしく質實を旨として來たのだが、事變後は特に生活刷新、消費規正が強調されて居る。先づ冠婚葬祭に於ける生活改善としては、——尤も之は農事實行組合だけのものではなく、部落聯合會(農事實行組合、部落會の聯合會)の申合であるが——婚禮の時には今迄使つて居た祝餅や引物を廢止すること、葬式の參列者には中食を出さぬこと、忌中引(法會)には食事を廢止すること、等を實行して居る。農事實行組合に於ては、節米運動に力を入れて居る。冬期間は割當てられた飯米も消費量以内に於て節約することを申合せ、一方馬鈴薯、蕎麥粉、南瓜等による郷土食の普及を圖つて居る。これが爲には郡農會主催の代用食講習會(月一日乃至二日宛一ヶ年間)に四人の婦人を派遣受講せしめた。尙本年はこの實行組合で代用食講習會を開く豫定だとのことである。右の外綿製品始め各種の方面に節約が強調され實施されて居ること勿論である。

次に軍事援護事業は部落會の銃後奉公部で行ふものであるが、勞力援護に關しては前に述べた。その他農事實行組合の共同利用の農機具は出征遺家族に對し之を優先的に使用せしめ農具係も日當を取らず奉仕して居る。

六 經 費

農事實行組合の經營上必要な經費の財源は、會費、利用料、手数料及獎勵金補助金等に依つて居る。會費は一月十錢宛即ち年一圓二十錢宛、馬鈴薯販賣代金清算の時に徴收する。之は農事實行組合と部落會とは經濟及行動を

同一にするといふ立前より農事實行組合に加入して居ない部落會員からも徴收することになつて居る。(昭和十五年度會費收入四十人分四十八圓) 利用料は組合の精穀用具(發動機、剝穀機、及脱穀機)を利用せしむる場合の損料であつて、一日一圓程度である。手数料として馬鈴薯共同出荷の際一俵に付一錢宛の歩合金を徴收して居る。補助獎勵金としては農會の増産獎勵金(昨年度三十五圓)や、郡農會、道農會、道廳の賞金等である。(昭和十五年には合計一三四圓三〇) この他販賣物の共同計算に於ける端數の残りが産業組合より戻つて來ることあり、之も實行組合の經費として居る。基本財産は今の處四〇〇圓に過ぎないが、之が増加したらその利息により會費を無くする考へだとのことである。而して經費は事業費、事務費、會議費及財産造成費等に仕向けられつゝある。以前には豫算に依つて經理したこともあるが、豫算通りに行かぬので最近豫算を組まなくなつた。参考迄に昭和十五年度の收支決算を次に掲げる。尙會計年度は曆年制に依つて居る。

昭和十五年度收支決算書 (一般會計)	
收入之部	支出之部
獎勵及補助金	旅費
一三四・三〇	三四・五〇
救済及互助金	基本財産組入
一六八・〇〇	四〇〇・〇〇
利 用 料	救済及互助金
四九・〇〇	一六八・〇〇
會 費	其 他
四八・〇〇	一一二・二〇
其 他	
一三五・三六	
繰 越 金	
三四八・七九	
合 計	合 計
八八三・四五	七一四・七〇
	差引殘金
	一六八・七五

七、他團體との關係

(1) 産業組合、農會及村との關係

桔梗中央農事實行組合は桔梗信購販利組合に加入し、その細胞組織として産業組合總意の決定に參與し組合員に取引の便を與へて居る。桔梗産業組合は桔梗、西桔梗、港、昭和、本町、石川の六字を區域とする部落單位の産業組合であり、龜田村には他に龜田信販購組合がある。而してこの兩者に合併の氣運進み、目下合併の認可申請中であり、近日中には合併總會が開かれる手筈だといふ。龜田村全村には三十三個の農事實行組合が在るが、その内桔梗産業組合の傘下に在るもの十七組合である。桔梗産業組合では農事實行組合の加入口數は六口（出資一口の金額二十五圓）即ち出資額百五十圓を原則として居る。但し今の處法人の出資口數合計三十三口である。

桔梗中央農事實行組合は産業組合出資口數五口有し、農事實行組合員にして産業組合未加入者無く、又産業組合員にして農事實行組合に加入しない者は無い。

産業組合との事業取引に付ては、貯金、貸付、資材配給、その代金回収、及生産物出荷、共同計算等信購販の各事業部門に於て、個人取引は成るべく之を差控へ、農事實行組合に依る團體取引が立前となつてゐる。唯利用事業（蹄鐵工場、精穀工場及家具職）に於てのみ個人利用である。従つて産業組合の經營は農事實行組合の聯合會の如き形態が強く、實際の事業の中心は寧ろ農事實行組合に置かれ、産業組合は帳簿の最終の締括りを爲すに過ぎない。従つて職員の数も多數を要しない。（常務役員五名）、産業組合では必要に應じ隨時農事實行組合長會議を開催して事業上の指導聯絡統制に當つて居るが、産業組合は寧ろ實行組合に指導される位だといふ。産業組合より農事實行

組合に對し補助金獎勵金等は別になく、唯實行組合長に對し一ケ年十圓程度——但しそれは擴充委員謝禮として——出る程度である。兎に角農事實行組合は一致協力して産業組合業務を分擔活用して居り、殊に役員は自己の家業を或程度犠牲にして迄献身して居ることに對し、産業組合に於ても何らか可然考慮して呉れてもよささうだ、といふのが偽はらざる要求であつた。

農會は農事實行組合に對し農事に關する指導方面を擔當して居る。産業組合主催の農事實行組合長會議とは別に農會開催の農事實行組合長會議あり生産方面に關する事業の聯絡に當つて居る。農會より農事實行組合に對し補助金の交付は無いが、共同事業とか堆肥増産等に關する獎勵金が交付される。（昨年度は増産獎勵金三十五圓）農事實行組合に對する關係の深さに於て産業組合と農會と孰れが深いかといふに、兩者に甲乙はつけられぬが、産業組合は經濟部面に關係するだけに産業組合に對する仕事の方がはるかに多いといふ。村役場よりは農事實行組合に對し、農業藥品に對する村費補助とか共同事業に對する助成等がある。

(2) 部落會との關係

内務省訓令に基く部落會は昭和十六年一月に結成された。その區域は農事實行組合と同じである。唯その成員に於て農事實行組合は農業者三十三戸より成るに反し、部落會は農業者以外の七戸をも加へ區域内の全住民四十戸を構成分子として居る。農事實行組合長と部落會々長とは同一人である。事業部門として部落會に教化社會部、警防部、衛生部、經理部、銃後奉公部、納稅部の六部があり、農事實行組合の事業と一應の分野が設けられてゐる。教化社會部は農事實行組合の社會部とは別個のものである。但しその經理部のみは農事實行組合の會計係と一所であ

年月日	表彰を受けたる事項	表彰者
昭和十年四月	馬鈴薯増産	同 右
昭和十年四月	堆肥増産	同 右
昭和十一年五月	馬鈴薯増産	同 右
昭和十二年三月	堆肥増産	同 右
昭和十二年三月	自給肥料増産	北海道長官 池田清
昭和十二年三月	自給肥料増産事業成績	龜田郡農會長 廣部太郎
昭和十二年四月	事業成績	北海道長官 池田清
昭和十三年四月	堆肥増産	北海道長官 坪山照次
昭和十三年四月	事業成績	同 右
昭和十四年三月	自給肥料増産	北海道長官 石黒英彦
昭和十四年三月	經濟部成績	北海道長官 半井清
昭和十四年三月	事業成績	北海道農事協會總裁 半井清
昭和十四年三月	經濟部成績	産業組合中央會 小林篤一
昭和十四年三月	經濟部成績	北海道支會長 山田敏
昭和十五年二月	自給肥改良増産運動	帝國農會長 村上元吉
昭和十五年二月	自給肥料増産	北海道農會長 村上元吉
昭和十五年二月	自給肥料増産	龜田郡農會長 森本正雄
昭和十五年二月	自給肥料増産	北海道農會長 村上元吉

年月日	表彰を受けたる事項	表彰者
昭和七年三月	事業成績	龜田村農會長 中島有郷
昭和八年三月	馬鈴薯増産	同 右
昭和九年四月	堆肥増産	同 右

る。會費は農事實行組合員と組合員外の部落會員との區別無く一戸月十錢宛である。部落常會と農事實行組合例會とは殆ど共通である。区域内全戸集つた時には部落常會と稱し、その場合農事實行組合に關する問題を協議する時は部落會の産業部門の會と稱する。その内容は農事實行組合の例會である。農事實行組合のみの例會は月一回程度別個に開催される。

八 結 言

以上桔梗中央農事實行組合に關し各方面より概観したが、本組合は農事實行組合として非常に優良な組合であることは充分看取出来ると思ふ。而して單なる上からの獎勵や育成によつて生れ今日を築いたものではなく、下からの盛上る力と外に對する反撥力によつて生れ、數多くの苦闘を経て今日の成果を得たものである。これは終始一貫組合長を勤める上田松太郎氏と共に組合員の一致協力の賜に外ならない。此の組合は絶えず部落内の他の農事實行組合の中心となり模範となり、夫等の先頭に立つて進み來つたもので、他の組合は皆之に倣つて創られ又運営されてゐる。

最後に本組合が表彰を受けた年次表を掲げて結びとする。

二、水田 三一町歩
果樹園 九町歩

(果樹は葡萄を主とし櫻桃若干を殖えてゐる)

三、部落共有林が四ヶ所に八段位あり、林木を植えてある。

四、家畜としては、牛馬耕が奨励され、馬四頭、役牛三頭があり、乳牛は十二頭で日本煉乳會社に提供して居る。

他に豚一頭、山羊二頭、鶏一三八羽が飼養されてゐる。

五、從來、肥料は米糠、木灰(果樹園)及び配合肥料を使用してゐた。事變後十四年度までは肥料不足を別に感じなかつたが、十五年度になつて、配合肥料は全然配給されず、米糠も不足し、本年度に至つて見透しもつかずに居る。

六、水田において、十五年度の肥料不足は、三割程度であつた。

七、勞力の關係では、異状ないやうである。

(3) 区域内總戸數 二四戸

(4) 農業者數 二四戸 (全部專業)

(5) 組合加入戸數 二四戸 (全戸加入)

(このうち一六戸は産組個人加入)

三 組合員の構成

(1) 職業別構成(全部專業農家)

(2) 地主、自作、自小作、小作別構成

地主	1
自作	一二戸
自小作	五戸
小作	七戸

なほ、土地(田畑)の所有關係をみると次の如くなつてゐる。

五町歩以上	三戸
三町歩以上	五戸
一町歩以上	五戸
五段歩以上	二戸
五段 未滿	四戸
土地所有無き者	五戸

(3) 組合員の耕地反別概況

水田を最も多く耕作する者	三町
水田を最も少く耕作する者	三段

畑を最も多く耕作する者
畑を最も少く耕作する者

八段
二段

四 沿革

(1) 設立年月日 昭和十二年二月十日

(2) 設立の動機

この部落では既に、明治三十四年一月、部落單位の産業組合として有限責任金澤信用購買販賣生産組合を設立、當時二〇戸の組合員を有し、相當の活動をなしてゐた。昭和十二年二月赤湯産業組合と合併、法人組織の農事實行組合に改組設立したもので、他の農事實行組合の設立とはその趣を異にしてゐるが、かくも早く組合組織の必要が痛感された理由、即ち組合設立の動機ともいふべきものは、この部落が前記の如く山間部にして水田に恵まれず、原野を開墾して、集約農業を営まねばならぬ事情にあり、この地としては、夙に享保年間より甲州葡萄が移植されて居り、葡萄栽培に適してゐるので、この開墾及び葡萄栽培に必要な資金の融通並に肥料の共同購入、生産品の共同販賣等共同的事業の推進が迫られてゐたからである。

(3) 設立當時の組合の構成

全戸加入

(1) 設立當時の事業

設立の事情が既述の如くであり、従つて設立當初より、現在と同様の事業を行つてゐた。

五 目的及び事業活動の概況

(1) 目的

生産及び生活必需資材の購入、生産品の販賣、資金の融通等による農業經營の合理化であり、この事業目的は農業實行組合になつてからも同様である。

(2) 現在の事業並に其の業績

イ、肥料の共同購入

ロ、日用品の共同購入

ハ、出荷必需品の共同購入

ニ、共同作業場の設置（糶摺機、精米機）

ホ、葡萄、櫻桃の共同出荷

なほ、参考のために本組合の昭和十四年度決算報告並に昭和十五年度豫算報告の數字を示せば左の如くである。

収入

種

昭和十四年度決算額

昭和十五年度豫算額

(一) 組合員負擔額

二〇・〇〇円

二〇・〇〇円

合 計

四九四・二五
 (差引金一六六圓四五錢 次年度繰越)

六〇六・四五

購買事業昭和十五年度買入(豫算)

肥料	三、二〇一・八三
農用藥品	七〇九・五二
清酒	九〇六・二四
魚類	九一〇・九四
醬油	六二・五五
其他	七四三・〇〇
合計	六、五三四・〇八

販賣 高 (昭和十五年度販賣豫算)

玄米	二五俵	三一〇・四六
葡萄	四、三三貫	二、三三四・一四

右の購買、販賣の事業の十五年度実績は現在高集計が出来てゐなかつたので、餘儀なくその豫算を示して置いたが、これによつても、この實行組合の事業の状況を見ることが出来る。

六 事變後の動向

(1) 資材の配給状況

果實を入れる籠が粗製となり脆くなつたため、箱が歡迎されるが、これ亦釘がないために困つてゐる。このために縣外移出が不可能となり、餘儀なく商人への柵賣りが多くなつた。

(果樹園の収入は良く、十五年度の如きは葡萄三萬圓、櫻桃一、八〇〇圓を擧げることが出来た。)

(2) 勞力不足並に共同施設利用状況

應召家族の勤勞奉仕は遠慮される傾向があり、別に勞力の不足も差當り困るほどはなく、集團作業は實施して居らぬが、一町二反歩の苗代を共同化して居り、十五年度には十五坪の共同作業場を建設し、糶摺機と精米機を据えた。その利用料は糶摺一俵二〇錢、精米一俵二五錢である。

(3) 土地利用状況

部落共有林野八段歩は、部落民の牧草及び薪を得るところであり、他に開墾の餘地少く、水田も傾斜であるため耕地整理の餘地もない。

(4) 農業生産に對する事變の影響と之が對策

勞力不足に對しては、牛馬耕の奨励をなし、肥料の不足に對しては重點主義配給を實施し、水田作にその重點を置いて居る。

(5) 米麥の供出の方途

本部落では麥作はない。供出米は實行組合がこれを全部まとめて産業組合へ渡す。但し地主の場合は小作米を直接産業組合へ供出するものもある。昨年の割當は僅か二六俵で、部落内三軒の農家が引き受けた。

(6) 生活刷新、消費規正並に其他生活協同化進展狀況

自發的に決定された部落常會實踐要綱に基いて生活刷新は實行されて居る。一例を示せば冠婚葬祭における虚禮廢止から、入除隊の如きは五、六年前より左の如く改善されて居る。

イ、入除隊の場合は祝酒として酒一升を部落より據出

ロ、葬式の祭は酒類を用ひず

ハ、婚禮を單純化し、披露を止めた

(7) 農事實行組合と産業組合及農會との關係

産業組合は純然たる農業者の立場に立つて居るが、赤湯町が半農、半商工の町であり、農會の主腦部には町の商人、地主からなつて居る關係上、密接なる連携がとれずにある。例へば肥料の配給の産組一元化も出來ず、産業組合六對商人四となつて居り、切符は農會で出すため不圓滑である。こゝでは農會の技術指導は不足して居る。

(8) 町村及び其他部落農業團體との關係

町の行政全般が商人色が濃厚であり、農業者と商業者との摩擦する部面においては農業者は不利の地位にある。部落農業團體として養鶏組合、畜産組合等があるが、これらの組合長は農事實行組合長が兼任し、事業上の摩擦、重複をなからしめて居る。

(9) 部落常會との關係

町内會合において、部落常會と農事實行組合の「表裏一體」の實を擧げるために一、部落常會長は農事實行組合

長たるべきこと二、部落常會副會長は農事實行組合長たるべきことを決定した。そこで問題となるのは、常會長の任期が一ケ年であり、農事實行組合長の任期が二ケ年であることが支障となりはしないかと考へられる。

七 事變後における土地關係の變遷と之が對策

地價は水田六〇〇圓乃至二五〇圓、畑は二五〇圓であり、小作料は六斗乃至一石二斗（收穫は反當三、四俵から六、七俵である）となつてゐるが、今のところ變動はない。開墾は事變後においても五、六段の林野を果樹園（主として小作地）をつくつたが、今後は資材不足の關係で開墾事業不可能に近い有様である。

八 機關の種類及び其の活動狀況

これまでは組合長と理事二人によつて一切の事務を處理して來たが、現在では

理事 三人（一人は組合長）

監事 二人

事務は常任書記及び會計を一名置き、事業別に、總務部、生産部、經濟部、社會部、婦人部、青年部の六部に分けて居る。

役職員の報酬としては、年給として

理事 六圓

監事 五〇錢

會計 九圓
 九圓
 常任書記 九圓
 を支給し、この他に、販賣關係では葡萄の販賣主任三人に對し各一〇圓宛、なほ理事の出張その他に日當として一日一圓二〇錢を支給し、これが約十五日間見積られてゐる。

九 經 費

- 收入之部 會費 一ヶ年 一圓 (前後期二回に五〇錢宛徴收)
- 購買手数料 一圓に付一錢
- 販賣手数料 一圓に付三錢
- 租摺利用料 一俵に付二〇錢 (前記)
- 精米利用料 一俵に付二五錢 (前記)

を徴收し、この他に産組からの購買割戻金、出資配當金を繰入れ、また寄附金を雜收入として収入に充てゝゐる。
 一〇、其の他
 政府に對する要望としてはハンテン用 (作業服) の綿布を供給されたいこと、肥料配給機構を一本建とすること、子供用ゴム靴の供給等がある。

陣場新田農事實行組合

〔所在地〕

山形縣東村山郡金井村

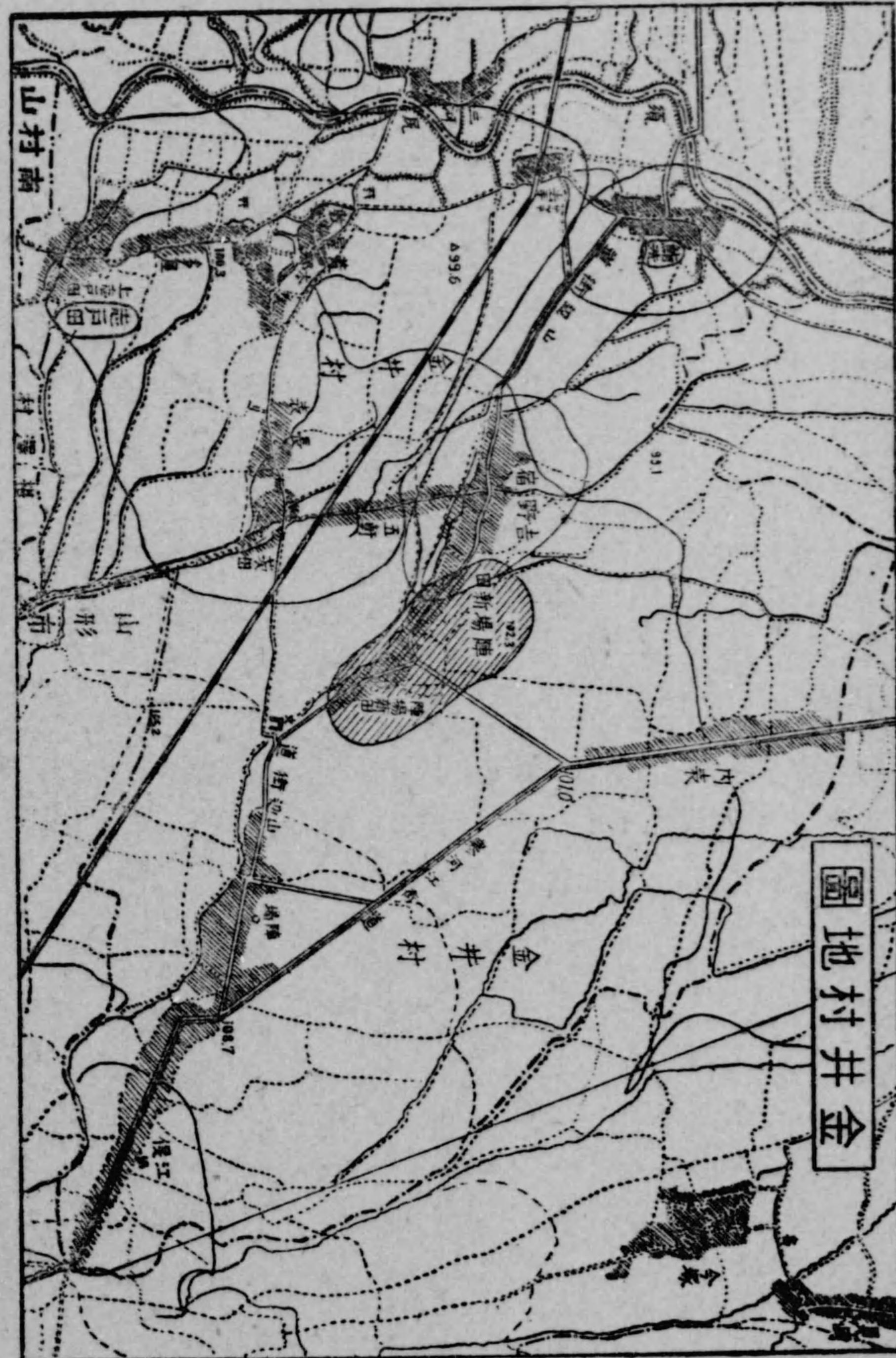
一 名稱並に所在地

名稱 陣場新田農事實行組合
 所在地 山形縣東村山郡金井村大字陣場新田
 (山形市より山邊町行きバスにて約三十分。所謂米産地として知られてゐる村山平野の中央である。)

二 區域及組織

(1) 區域、金井村大字陣場新田 (地圖参照)。
 金井村は陣場、江俣、内表、陣場新田、吉野宿、志戸田、鮎洗の七部落よりなつて居り、明治の初年は夫々獨立村であつた。陣場新田は明治十一年郡區改正の際に南村山郡に、他の六部落は東村山郡に編入されたが、明治二十二年町村制が實施されるとき、陣場新田を東村山郡に編入し右の七ヶ村を合して一村を組織し現在の金井村となつた。

(2) 該區域の農業生産に對する自然的並社會經濟的條件の概括
 位置は東村山郡の南部にあり、平坦地にして所謂村山米を産する米産地である。村の西部には最上川の上流須川



が流れてゐるが水運の便はない、部落の中央を山形市と山邊町をつなぐバス通路が貫通してゐる。土質は粘質の濕地であるから、暗渠排水溝を施行し、また灌漑水不足のため水田専用鑿井を施行してゐる。

耕地は水田六五町歩、畑地九町二反歩——畑地の内桑園四町歩、收蒔四九二貫目、三、九三〇圓、桑葉の賣上一、八二〇圓、蔬菜、大小麥、青菜種子合計五千圓——水稻は反當四石の收穫があつて、小作料は一石二斗から一石五斗にして、暗渠排水溝工費は反當り五十圓を五年年賦として小作人が負擔償却することになつてゐる。事變後特に變化せる條件はない」と農會や産業組合關係者は言つたが、肥料配給において昨年は反當施肥量窒素三貫目に對し、二貫四百匁の配給で六百匁の不足を來して居る、(本年より産業組合一本建の配給となつた)等は事變の影響とみられるし、また「勞力の不足はない」やうであるが、農道の改修を強く要望してゐる等は、勞力合理化のためであること勿論である。(數字は昭和十四年)

- (3) 区域内總戸數 六〇戸
 - (4) 区域内農業者數 四七戸
 - (5) 組合加入戸數 四〇戸
- 三 組合員の構成
- (1) 職業別構成

(イ) 農業者及農業者以外別
農業者 四七戸

工業者	六戸
交通業者	二戸
商業者	二戸
其他自由業者	二戸
無職	一戸

(口) 農業者專業兼業別

專業農家	三九戸
兼業農家	八戸

(2) 地主、自作、自小作、小作別構成

地主	—
自作	四戸
自小作	二七戸
小作	一六戸

(3) 組合員の耕地反別概況

一戸當り平均耕地反別は水田一町四反、畑二反となつて居る。水田を主としてゐる關係で小作地の多い割合に、農家の經營状態は比較的「樂」であると農會の人は云つてゐた。

四 沿革

(1) 設立年月日

大正十二年任意組合として部落實行組合を設立、昭和九年に法人組織に改組して東金井産業組合に加入。

(2) 設立の動機

今より二十五年前の大正五年頃、當時この村山地方では庄内地方はじめ、稻作の先進地を視察見學をする風が旺んに行はれ、大正七年には陣場新田部落内七、八人の青壯年同志により、修養をかねた農事研究團體として興心會が生れ、これが實行運動に入り、同十二年部落實行組合を設立したものである。

(3) 設立者當時の組合の構成

大正十二年設立當初の組合員は有志二十四名にして、その經費は稻作品評會の坪刈の初を以て之に充當して居つた。

(4) 設立當時の主なる事業

- 一、農家に日記帳記入の奨励
- 二、精神の修養（青年團と連携して）
- 三、品種試験及び肥料試験
- 四、苗代の改善（芽出の一齊指導と坪三―四合播の奨励）
- 五、稻作立毛品評會
- 六、暗渠排水溝の共同施設（二〇町歩について施行）

五 目的及び事業活動の概要

(1) 目的

當初は農事改良及び精神修養を目的としてゐたが、漸く流通方面にも努力することになつた。即ち法人組織化は産業組合加入とその利用目的であつた。

(2) 現在の事業並に其の實績

昭和十一年には全組合員各戸別の増産實行計畫を樹立した。その内容は米穀増産、自給肥料増産はじめ、家畜、蔬菜、桑園、繭、果樹等の全般に亘るもので、これが部落農業の多角化、計畫化を與へたことは事實であるが現在としては、

- 一、米増産に主力を注ぎ、反當三石五斗、計約二、〇〇〇石以上に達して居り、管理米九八六石を供出した。
- 二、自給肥料の増産獎勵においては、水稻反當三〇〇貫目、畑四〇〇貫目の堆肥を施用してゐる。
- 三、自給肥料堆肥製造のため有畜農業を獎勵し、現在馬二〇頭、牛九頭を飼養してゐる。
- 四、肥料配給の圓滑を期するため本農事實行組合が主體となり、各戸の耕地實面積を調査し、なほ上、中、下の三階級に耕地を分類し、これに應じて合理的にして公平なる割當配給を行つてゐる。

六 事變後の動向

(1) 資材配給状況

肥料の配給では從來窒素反當三貫目使用のところ、昨年度は二貫四〇〇匁の配給にして六〇〇匁の不足となつて居り、本年度は更に不足量は増大し、大體三分の一の不足が豫想されて居るが、農具その他の生産資材においては生産に支障となる如き不足は見られぬ様である。然し、ゴム靴、作業服用綿布の配給は殆んどない状態である。

(2) 勞働力不足對策並に共同施設利用状況

- 一、碎土機と梨の共同利用をなし、十四年度及び十五年度において各一組宛を施設した。(水田用碎土機七臺——一臺の價格四八圓のものを十四年年度に縣より半額助成で購入、現在利用料は一日三〇錢である。)

二、ゴムロール摺機一臺

三、電動機三臺、石油發動機四臺

なほ、大正年間既に拔根機を組合で購入して居り、農具の共同利用については、以前より研究されて居つたしとくにこの地方は「ユヒ」の慣行が古くより行はれ、田植の勞力は主としてこの「ユヒ」によつて調節されて居る。「ユヒ」は中食自辨である。脱穀、調整等は電動機は發動機によつてゐるが、これには組合が六組に分れ、一組に一人の機械技術者が配置されて居る。

(3) 土地の利用状況

- 一、耕地は六四町歩あるが、全體が濕地であるため、組合において共同による暗渠排水溝を施設、既に大部分の四〇町歩に及んでゐる。(反當五〇圓、五ヶ年々賦で醸出)
- 二、灌漑用鑿井施設し共同利用して居る。

三、出征家族の耕地は勤勞奉仕により耕作して居る。

(4) 農業生産に對する事變の影響と之が對策

農業生産に對する事變の影響としては前項(1)(2)において記述した如くであるが、之が對策としては、

一、勞力不足を補ふ方法として牛馬耕を奨励し、なほ挿秧の時期を早めて日數の延長を計り、自給勞力を以てなし得る様にし、應召家族に對しては中、小學生並に家族組合員の勞力を提供して、挿秧、收穫、堆肥運搬等の作業に對し、適期に奉仕して居る。

二、肥料の配給については、「五」の(2)項において記した如く、土壤に應じて割當配給をなし、肥料不足による收穫減を最少限度に喰ひ止める方策をとつて居る。

(5) 米麥の供出方途

産業組合をして管理米(自家用米を除く全部)供出をなし、殊に政府早出米に對しては九五俵を供出した。

(6) 生活刷新、消費規正並に其他生活協同化の進展狀況

臺所の改善を施行した農家二〇戸に達し、生活刷新に關しては、金井村生活改善實行要目を勵行して居る。

(7) 農事實行組合と産業組合及農會との關係

法人として産業組合に加入し、農業用資材購入の場合は、産組より一時借入れをなし、組合員に配給して居り、其他米麥の供出等産組との關係は密接であるが、農會との關係もとくに緊密にして、農事の改善、生産指導上、農會の手足として活動して居る。

(8) 町村及び其他の部落農業團體との關係

一、村の勸業方面は主として農事實行組合に當らしめ、各部落とも相提携して農道の改修等をなして居る。

二、農事實行組合長は大政翼賛會村支部の部落經濟班長として、翼賛運動においても表裏一體の實を擧げ得るやうにして居る。

三、他の部落農業團體として、緬羊組合、有畜農業組合、養鶏組合、養豚組合、採種組合、果樹組合等があるが、之等全部の組合長は農事實行組合長が兼任して、各組合の事業の重複、摩擦をなからしめて居る。

(9) 部落常會との關係

農事實行組合は形式的には經濟班の中に包含され從來通り事業活動をなして居る。

七 事變後における土地關係の變遷と之が對策

事變後において、耕地、地價、小作料、荒廢開墾等土地の變化についてはこゝに擧げるほどのものはみられない、

八 機關の種類及び活動狀況

一、組合長(經濟班長) 一人

二、理事 四人

三、監事 二人

四、組合員を六組に分ち、各組長をば前記の理事と監事がなつて居る。この組に各一人宛の機械農具の技術者

(青年)が配置されて居ることは前記の通りである。

五、また事業別に分け二重組織として居るが、事業別の機構は左の五係を置いてゐる。

配給係	五人 (肥料其他資材の配給を擔當)
稲作係	二人
園藝係	一人
畜産係	一人 (堆肥を含む)
供出係	三人

六、役員報酬もなく、役員常務供給に對する組合員の勤勞奉仕的活動もない。

九 經 費

一、收 入	九〇、〇〇
助 成 金	二〇、〇〇
會 費	一一〇、〇〇
計	二二〇、〇〇
二、支 出	三〇、〇〇
苗代擴張其他	一〇、〇〇
稻作品評會	五〇、〇〇
増産事業獎勵金	五〇、〇〇

總 會 費 用

計	一一〇、〇〇
---	--------

(總會費用二〇圓については、組合員の慰勞も兼ねて居る)

三、會費は一戸當り平等の五〇錢としてゐる。

一〇、其 の 他

本部落では、増産確保の條件として左の如き二點を政府に要望して居る。

- 1 農道の改修、暗渠排水、鑿井工事等に助成されたきこと。
- 2 肥料の不足は、戦時下に止むを得ぬこととしても、その配給の時期を失しない様に迅速にして貰ひたいこと。

分郷八崎農事實行組合

〔所在地〕 群馬縣勢多郡北橋村

第一 分郷八崎農事實行組合の自然的社會經濟的環境

一 北橋村一般

位置・地勢

北橋村は勢多郡に屬し、赤城山麓、利根川の上流を底邊とする三角形の地形を區域とし、地勢は相當な傾斜をなし、従つて又、水利の便は良好ならず、水田面積は耕地の約五分ノ一を占むるにすぎず、陸稻作付の多いのが目立つ、併し一方、古來より水害、霜害等の天災に見舞はれし事なく「農業保險の如き、村民より一顧だにされぬ」と云ふ程に、その點に於ては、恵まれた土地である。

交通は前橋市より、東武鐵道により約三十分にて連絡し得、近時、工場多く建設せられ發展しつゝある澁川町に隣接してゐる、周邊都邑の影響をかなり受け易い位置にある。

村内はトラツクを通じ得る幹線三、住家は概して疏散し村内一般の道路狀況は良好とは云ひ難い。自然部落たる九の大字を有する。

戸口、村内總戸數一、二〇〇戸、人口六五一六人、農家戸數九三六戸

農事實行組合數二三、全農家及非農業者八四、計一〇二〇戸が實行組合に加入してゐる。別に養蠶實行組合二二

土地

耕地種別

田	一七六二・八 ^反
畑	四二三六・六
桑園	二三七六・四
その他	三一・九
一戸當	九・〇
外に利用山林	一三三九・四

土地の所有配分關係を見るに、

○所有別農家戸數

二町以上	二町一町	一町一六反	五反以下
三九戸	一一一戸	一七二戸	三四二戸

○耕地廣狭別農家戸數

三町以上	二町以上	二町一町六反	一町五反一町	一町一六反	五反以下
一戸	二三戸	六五戸	一七三戸	三七九戸	二七三戸

産業と經濟

かくの如き土地の上に營まれる産業及經濟の狀況如何といふに、昭和十四年度に於て

作物	作付反別	總收穫量	販賣量
水 稻	一七六二・八	五〇一〇・四	二七六〇・二
陸 稻	二二六五・〇	五七六二・二	八二七・〇
大 麥	一七七七・二	五九二九・五	二七五五・六
小 麥	三二三九・五	七七六二・〇	五一五一・二

別に甘藷作は四五町

畜種	掃立數量	收滿量	價 額
養 蠶	八七九〇八瓦	四六九三八貫	三八五〇二一圓
家畜飼育狀況は	馬 二七一 牛 三六五 豚 二二四 鶏 一二六九 山羊 二〇七 羊 一四七 兔 一四七三		

これが北橋村の主要産業である、概言すれば、畑作地帯として商業化的農業の色彩が相當濃い、こゝに購買販賣協同化發達の一の條件がある。全村農業の總收入一、二九二、八〇六圓 純收入八四七、九九六圓、一戸當、八三一圓、壯者一人當二四六圓、人口一人當一三〇圓。

因みに、本村の發展史上特筆すべきは、昭和八年經濟更生指定村となりこれを契機として、全村舉げての更生運動に發足した事である。

經濟更生計畫書は更生計畫樹立の動機を次の如く述べてある。

「本村ハ一年ノ自家食糧購入高、全村ニ於テ四萬五千圓以上ニ上ルタメ之ガ自給ヲ計ラントシテ一般農家ノ普通外ノ經濟的多收ヲ計ル爲尙、農家收入ノ四五%養蠶、三八%ガ耕種一三%ガ雜收入五%ガ養畜ナルヲ以テ、桑園面

積ヲ減少シ、農家組織ヲ有畜化スルコトヲ當面ノ急務トシ云々」

而して、二三の農事實行組合による全村農家の一齊組織化と産業組合の再建とは更生運動の第一の、而して中心的事業であつた、爾來村運逐年向上、村民の氣風と生活を一新し近縣に模範村としての聞えが高い。

二 大字分郷八崎

分郷八崎は、北橋村の九つの部落の中村の西北方に位置し、利根川に沿ふて、村の地形と相似形をなし、地勢その他の自然的條件はもとより村のそれに等しい、

区域内總戸數、七三、農家戸數五四、

本部落は、もと、宿場であつた關係から、密集的部落をなし、人口に對し、耕地の狭少なるが、他部落に比しての特色であるが、その産業經濟の様相は村經濟の場合とさしたる差はない。耕地種別は、

田	七五反一(約一町は一毛作田)	農家一戸當	一・四 ^反
畑	二二九・三		四・二
桑園	一四六・八		二・七
利用山林	四五・七		〇・八
共同收益地	二三・〇		〇・四
計	五一九・九		九・六

以て、本部落の農業立地の概要を視て知ることができ、土地利用者は、田畑面積三三七、四に對し、耕種は小麥の二〇〇、一を首位として五四六、三、昭和十四年度に於ける、農業生産の狀況を見るに、

耕種	作付面積	收穫量
水 稻	七五反一	二四〇・石三二
陸 稻	一一八・五	二二五・一五
大 麥	一一〇・一	四九六・八
小 麥	二〇〇・一	六四〇・三
食用甘藷	二三・六	一四一六〇貫
アルコール原料甘藷	一〇・五	六三〇〇貫
馬 鈴 薯	八・四	四二〇〇貫
蕎 麥	稀立數量	牧 藪 量
春 藪	二八五〇瓦	二〇八〇貫
初 秋 藪	一四〇〇	八九六
晚 秋 藪	二一九七	一四七二
計	六四四七	四四四八

家畜、飼育狀況

馬 一七 牛 一一 豚 一四 鶏 九八 山羊 五 兎 九二

副業的に、俵、蒔、繩等の製造が行はれてゐるが大いに足りず、蔬菜園藝等も自給外に出ない、要するに、村に於けると同様、養蠶と、大小麥の畑作農業が支配的である。

この部落經濟を収入源より見ると次の如くなる。

種類	金額	百分比
耕種收入	四八四九四・九	三一・三%
養蠶收入	四二六四〇・〇	三二・四
畜産收入	二一三七〇	四・八
加工及勞賃收入	一九四〇七・〇	一六・九

勞賃收入の内譯は、林業 五〇〇、勤勞俸給、八、六七二、残りが加工である。

養蠶收入の第一位と勞賃收入が相當の額に上つてゐるのが注目される、主として澁川町の諸工場への通勤によるものである、因みに、十四年度總支出の百分比を十一年度のそれと比較して見ると、

項目	十一年度	十四年度
小 作 料	五九・〇%	四七・八五%
肥 料 代	二二・〇	三一・七五
そ の 他	一九・〇	二〇・四〇

三 北橋村産業組合

以上、實行組合の環境としての村及部落の産業經濟の概況を一瞥したが、次に、實行組合の活動母胎としての産業組合の事業狀況を實行組合との關聯に於て概観せねばならぬ。蓋し單に部落實行組合のそれ自體孤立的な活動は、如何に活潑であらうとも、——從來の優良農事組合に於て屢々見る如く——他の實行組合及産業組合との有機的な

連繋がなく、或は産業組合の衰微せる場合、その活動効果は限局せられざるを得ず、又村經濟全體の協同化、計畫化の促進に役立たぬであらう。産業組合の細胞組織としての有機的活動こそ現在の要請であるからである。この意味に於ける産業組合、實行組合の組織及事業の有機的連繋は、北橋村に於て、略々模範的に達成せられてゐる、それはこの組合の沿革の當然に齎らした所である。

(1) 沿革

大正四年、本村大字入崎に有限責任、販賣利用組合、交水社橋組が創立され、婦女子の農閑期労働によつて操業し、成績相當見るべきものがあつたが、組合員の組合觀徹底を欠き、大戰後の恐慌の打撃を受けて、大正十四年清算組合となつたが、その後北橋信用組合として組織變更、僅かに百名の組合員を擁して名目的な存在を維持し來つた。

昭和八年、經濟更生助成村に指定せられるや更生運動の第一着手として、これを四種兼營として村全體に利用せしめ村經濟更生の原動力たらしむる目的を以て、先づ組合の更生の努力が注望された、即ち、その際從來、各部落に農會の下部組織としてあつた農事組合(分郷八崎農事組合も其一)を農事實行組合として法人化し、産業組合に加入せしめると共に、一方村民の産業組合加入を勸奨したのであつた、かくの如く、この村の場合、組織は下から堅められたのであつて産業組合としては一舉に二三の實行組合を、その下部組織として、獲得した譯である、唯、一方に於て實行組合員たる部落民の産組への二重加入は、遅々として進まなかつたが、勸誘に努め近來その加入率は著しく増加してゐる。

(2) 組織狀況

昭和十五年度末に於ける組織狀況を前年度との對比に於て見るに

職業別	十四年度末現在		十五年度末現在	
	組合員數	出資口數	組合員數	出資口數
農業	八〇四人	一、〇四八口	一、〇三六人	二、〇五六口
商業	一四	一八	二一	二九
その他	六	六	五一	六二
小計	八二四	一、〇七二	一、一〇八	二、一五三
法人(實行組合)	二三	二四	二三	三七

總戸數 一二〇〇戸中、九三六戸の農家と八四の非農業者計一〇二〇戸が農事實行組合員であり、その中九九九戸が、産業組合に二重加入してゐる。農事實行組合への加入率及産組加入率は物資強制的強化と共に更に向上しつゝある。かくの如くして、産業組合の組織化と細胞組織としての實行組合網も略々完成の域に達してゐると云へる。

(3) 事業概況

北橋村信購販利組合の事業を主として實行組合との連絡情況の見地より概観する。

1 信用事業

貯金は十四年度末現在に於て、總計三、二六〇、四二七圓六八錢、内八、七七四圓は更生貯金、統計貯金、肥料歩合貯金、備荒貯金等の名稱による實行組合扱ひの團體貯金である。

貸付は、十四年度末現在に於て、無擔保一五〇件四二二三三圓三六錢、有擔保七件二二七〇圓二四錢、計一五七件五四、五〇三圓六〇錢、内法人（實行組合）の分が一〇二件、四一〇八七圓八二錢に達する事を特筆せねばならぬ。これらは、主として肥料資金、改良和牛購入資金等の用途に向けられる。こゝに金融協同化の優れた事例がある。尙現在、改良臺の脱穀機が、各實行組合所有の形態で入つてゐるが、これは組合で購入の上、賦割拂で譲渡したものである。

ロ 購買事業

農家購買品の大宗たる肥料については、産業組合による村内一元配給完成し、縣購聯より八割、商組より二割横流しの全部が産組によつて、農會の指導統制下に實行組合を通じて作物別作付面積別に生産計畫に照應して配合配給される。十四年度賣却額一三一三〇二圓、その他飼料綿製品蠶具地下足袋、釘鋼等の産業用品、經濟用品の統制物資の總ては産組——實行組合のルートを通じて公正に配分される。直接組合員に對する賣却は雜貨の而も極少額に限られて居る。その他、毎年雛鶏を購入、適當な時期まで飼育した上分配してゐる。十四年度は二〇〇羽、昨年度は三〇〇羽、それにより、卵は村内自給可能となつてゐる。

ハ 販賣事業

資材統制の高度化は當然に、販賣統制の高度化を約束する、本組合の取扱品目は大麥、小麥、玄米のみであるが年度始めに、實行組合毎、各農家毎に出荷割當量が定められる。農家販賣量の殆んど總ては、實行組合に集荷され更にその全部が産組を通ずるといふ集荷機構は、既に以前から原則的には確立されてゐた。十四年末に於て大麥は

二四五一俵を割當一〇〇%供出、小麥は販賣量一三五〇四俵中九八八三俵（七三%）を統制してゐる。

米については從來積極的に取扱はなかつた。區域外移出は云ふに足りないからである。

何れにしても現在に於ては組合の取扱品目が米麥に限られてゐるのであるから、販賣統制については問題がない集荷は實行組合から産組へ、村内配給は商人を指定配給所として産組より流してゐる。

ニ 利用事業

利用設備は製粉機、精麥機、押麥機トラツク等、利用料一、四三四圓

尙、昨年度より木炭の生産を開始し七五〇〇俵を焼き、村内自給に近い成績を擧げてゐる。この木炭配給を商組にするべしとの縣の指示あり、之に對して頑強に陳情、産組による配給を認められたが、これらに關聯して、農村配給の一元的機構の確立が要望されてゐる。

第二 分郷八崎農事實行組合の内容及沿革

一 區域及組織

區域は北橋村西北方に位する自然部落であり、行政區と一致する大字分郷八崎一圓を包含する。區域内總戸數七二戸、區域内農業者數五四戸、實行組合加入戸數七二戸全戸加入、

二 組合員の構成

(1) 職業別

農家戸數 五四戸

商業戸數 (雜貨商にして俸給收入等をも有する營業的商業者) 四戸
 俸給生活者 (主として、關東水電に勤務するもの外來者である) 十四戸

(2) 農業者專業兼業別

農業者は概ね專業農家と云へるであらうが、家族中より、出稼者十人工場通勤者十八人を出して前述の如く、區域内總收入の十六・九%を勞賃收入としてゐる限りに於て、兼業化してゐる、國際情勢と事變の影響は一方に於て養蠶經營を縮少せしめつゝこの傾向を促進する形勢にあることは注目せねばならぬ。

(3) 階級別

農家戸數五四を自小作別、耕作面積別に分類すれば次の如し。

	二町以上	一町以上	八反以上	五反以上	五反未満	計
自作	1	9	1	3	3	16
自作小	1	7	7	10	3	28
小作	1	1	1	3	6	10
計	1	16	9	16	13	54

不在地主及不耕作地主は一人もない。土地の賃貸主といふ意味での地主は自作一六戸中に五戸ある。右の階級分布は茲十年程、餘り變動はないらしい。

かくの如き部落の階級構成は、實行組合の社會的條件として、多くのことを物語るものであるが、我々は地主の不在は自小作の優位と零細經營としての略々等質性を協同化の要因として注意する。

三 沿革

本農事實行組合はもと申合組合たる農事組合として、大戰後の恐慌後、全国的に政府並農會の指導下に所謂、農家小組合が普及した時代、農會の下部組織として、設立せられたるもので、それは、大正十三年十月のことである。當時の分郷八崎農事組合の規約を見るに、實行すべき事項として、左の如き事業が擧げられてゐる。

- 一、組合員ノ融和親善ヲ計ル事業
 - 親睦、講演、觀察、旌表、共濟事業、小作農ニ土地ヲ所有セシメ、自作農ニ土地喪失ヲ防止スル方法
 - 小作料ソノ他ニ關シ、紛議ヲ生ジタルトキハ圓滿解決ニ努ムルコト
 - 勞銀標準ヲ決定スルコト
- 二、農事改良上重要事項 (略)
- 三、民心作興自治向上ソノ他公益ニ必要ナル事項

右三項の事業に關し、夫々(一)に關して協調委員九名(地主三名、自作三名、小作三名)(二)に關して技術員一名、(三)に關して實行委員七名が擧げられてゐる。

尙 (一)の事業に關し、小作料標準が決定せられ、當時より現在まで概ねそれに依つてゐる。次の通りである。

等級	田	畑
一	二石二斗	二十圓
二	二、〇	十六圓
三	一、六	十二圓
四	〇、八	七圓五十錢

然し乍ら、この農事組合の主要事業は、農會の斡旋の下に肥料の共同購入に當る「肥料組合」たる性格を有するものであつた。

かくの如くして、大正十三年以降、農會の下部組織として、肥料組合として、存続して來たが、昭和八年經濟更生助成村に指定せられ、經濟更生計畫を樹立するに當り、從來僅かにその名目を保持したる睡眠せる産業組合に活を與へ、經濟更生の中心機關として活動せしむる爲、農會の肥料斡旋事業も之を産業組合に移管すると共に、全村の部落農事組合を法人化し、産業組合に加入せしむる方針が樹てられ、本農事組合も亦昭和八年五月六日農事實行組合として、法人登記を了した。農事實行組合規約はその目的として次の如き事業を行ふ事を謳つてある。

- 一、必需品ノ共同購入
- 二、共同販賣
- 三、共同利用設備
- 四、共同貯金
- 五、農事指導獎勵
- 六、共同作業
- 七、品評會、講習會、講演會ノ開催
- 八、共濟及共濟基金ノ積立
- 九、備荒貯蓄
- 十、其他組合員ノ福利増進ニ關スル施設
- 十一、前各號ノ外組合ノ目的ヲ達セルニ必要ナル事業

(八)の共濟事業としては醫師會と特約し、組合員に醫療の機會を與へた。

以上、全て單なる空文でなく、現實に行はれ來つた事業である。

第三 事變後に於ける部落經濟の動向と實行組合の活動狀況

一 生産部面

(1) 配給過程に於ける實行組合の活動

本村に於ては、主要物資及農産物について、産組——實行組合——各戸の配給機構が確立されてゐる事は前述した、事情は、本部落に於ても全く同様であり、産組の細胞組織としての實行組合の配給部門に於ける活動は完璧に近いと云ふべきであらう。經營計畫書が農會の指導の下に、實行組合により各戸別に作成され、これに基き、肥料其他主要資材は作付反別に比例して配分されると同時に、收穫期に於ける、出荷量の割當がなされる。生産資材以外の統制物資の配分も實行組合により抽籤その他の方法により公平に不満なく行はれる。

十四年度に於ける肥料共同購入額は

春 肥	六三四	二、九二二圓
稻 肥	四六九	一、七九二
桑 肥	四八七	一、六九八
其他	八四	三四九

この購買代金は收穫期に出荷額から清算される。配給が出荷と密接に關聯づけられてゐる結果、蒐荷統制も一〇

○%に近い、實行組合を通せず、自由販賣を敢て行へば、資材の配給を拒否せられるからであり、生活自體を不能にするからである。十四年度に於ける共同販賣額は、

大 麥	四一三貫	三二八八圓
小 麥	五四五	六六九二
馬 鈴 薯	一六	四四
甘 藷	二五三	六四八

右の外、繭の四四三八貫、三九二六六圓は、養蠶實行組合を通じて、交水社に出荷される。米に就ては生産量も乏しく、販賣量も百石に満たず、一五〇俵を移入してゐる程度で、本年度の管理米も一〇〇俵にすぎず、今後と雖もより以上になる見込はない。

右の如くして、經營計畫、肥料分配、生産物出荷につき實行組合に於て各戸別に臺帳が作成され、購買、販賣の收支決算が實行組合によつて行はれる。つまり農業經營の主要なる部分は、各農業者によつてはなく、實行組合によつてなされる。この意味に於て組合は一個の農業經營者であり、この點よりして、實行組合は配給過程を通じて各農家經營に深く入り込んでゐると云へる。それは一村民によつて、餘りにも實行組合が世話をやきすぎて、農家の經營能力が低下しはしないかと杞憂される程に。

かくの如くして、注目すべきことは、かゝる、流通過程の統制を通じて、生産過程の統制、計畫化の方向へ或る程度進行しつつあることである。

(2) 勞働力狀況と不足對策

区域内人口四七五人一戸當六・五九人、勞働從事可能な壯者(十六歳—六五歳)二四九人、一戸當三・一人、現在離村出稼者一〇名、澁川町工場通勤者男一六名、女二名、附近に格好な出稼地ある關係か本部落よりは滿洲移民は出てゐない。農繁期(最盛期十日内外)に於ける勞働力需結狀況を見るに

春 置 期	所要勞働量 (延人員)		自給勞働收		過 不 足		雇 傭 出 稼	
	男	女	男	女	男	女	男	女
麥收穫、田植期	八〇七〇	三三一二	四七五八	(一)三〇	(十)三〇	三〇	三〇	
麥收穫、麥播期	五五六二	二二四二	三三二〇	(一)三二	(十)三二	三二	三二	
稻收穫、麥播期	一一九〇四	四七三八	七一六六	(一)六〇	(十)六〇	六〇	六〇	

勞働力は略々自給自足、雇傭勞働によることは少い。嘗ては年雇も極少數あつたが、現在一名もない。役畜の飼育狀況を昭和十二年一月現在と、十五年二月現在を比較するに、馬は二三頭より一七頭に減少、牛は一頭より一頭に増加してゐる。現在までの所事變の影響による勞働力不足のため小作地返還、耕地潰廢、作は減反といつた現象は現はれてゐない。出稼工場通勤も、区域内の不消化勞働の拠口である譯であり、未だ「副業農家」の發生等を見るには至つてゐないが、將來養蠶收入に重點をおく經營の變化と共に、勞賃收入への依存度は増加するであらうと見られてゐる。

併し乍ら、事變勃發直後、中堅層の應召が相當數に上り、相當苦境に陥つた農家もあつたがこれに對しては、隣保相助の勤勞奉仕によりて、之を切抜け、小作地の減少返還に及ぼんとした數戸の如きもそこに至らしめずして現

狀を維持し得た。應召農家に對する實行組合の勤勞奉仕は近隣關係、耕地廣狹、畜力有無等により適宜の班を結成して、一年間を通じ生産全行程に亘つて之を行ひ、奉仕作業に對しては報酬は無論のこと、茶菓の饗應も受けない事を建前としてゐる。

十四年度に於て共同田植參加戸數二〇戸、八班、作業面積三五反である。

共同調製は機械の共同利用により全農家五四戸が七班を以て之に参加した。

共同炊事、共同託兒所等は未だその必要を感じてゐない。尙、本村は養蠶を首位とする關係から、老幼婦女子の勞働が相當動員されてゐると思はれる。特に事變後、婦女子の時局認識高まり農作業への積極的な参加が顯著であると云ふ。

共同施設としては、

共同作業場、一棟二二坪、平屋建のもの、繭の出荷の際、又、部落集合場として利用される。

農具	計九臺
噴霧器	二
カッター	二
畜力原動機	一
馬場式原動機	一
小菅式脱穀機	一
磁虎式稻摺機	一

輪頭式土入機

何れも、十二年以後の購入である。

(3) 土地利用狀況

本實行組合の土地利用に關する活動としては田植期の水利に關し、一定地區毎に、一定期日を割當て、この期間に終了せざる場合は最後に廻すといふ定めがある。出征遺家族田畑に對する勤勞奉仕は前述の通りである。

こゝで最も注目すべきは共同收益地の所有である。共同收益地は、本部落より約三里離れた赤城山麓にあり面積約二町三反、もと區の所有に係る松山を實行組合に譲り受け、昭和十三年組合員を七班に分ち、土地も七分し夫々奉仕的に之を開墾した。現在では距離の關係上、約七戸を以て、一年間日當一圓五〇錢により、耕作を擔當せしめてゐる。

十四年度に於ては左の如くして總賣上高、一〇二〇圓であつた。これは全く實行組合の經費を賄ふ。

陸	稻	二町	四〇畝	二〇、〇圓	六〇俵
大	豆	三反	三	一、八圓	六俵
小	麥	一町五反	三〇	一九、八圓	
作付	肥料	種子代	收穫		

(4) 農業生産に對する事變の影響と對策

事變はこゝにも種々な部門に於て影響を與へてゐるが、最も手酷く感ぜられたのは應召による勞力不足と、資材即

ち肥料の減少及價格騰貴である。然し乍ら、現在までの所それによつて減反、減産、耕地潰瘍、乃至は、構造的な變革等を惹起するまでには至つてゐない。むしろ生産量は事變後も増加し、農家の収入も向上してゐる。

とはいへ、肥料の新種に於て二割減、桑園に於ては八割減の減少は、集約農業であるだけに打撃が甚だしく、殊に多肥を必要とする桑園の如きに於てはこの状態が三年つゞけば殆んど荒廢するであらうと慮へられてゐる。勿論自給肥料増産の努力もなされてゐるが、飼料不足による家畜飼育の減少と、人手不足はそれを阻害し、又自給肥料はその効果に於て、金肥に劣るとされてゐる。

又一方に於て、國際情勢の變動はこゝにも波及し養蠶収入を第一位とする農業經營は今後に於て大きな轉換が行はねばならない譯であり、蠶糸業國策の樹立と繭價補償が要望されてゐたが、幸ひ本村に於ては、昭和八年の更生運動以來、食糧自給の建前から桑園の減少方針で進んで來たので、現在の惡條件が農民に大きな不安、動搖を與へる事はないやうである。

尙昨年以來、食糧増産の建前から、陸稻及甘藷の増産を企圖し、約三町（内八割は桑畑）の耕地整理を實施してゐる。

かくの如くして、本部落の農業經營組織も轉換せんとしつゝあるが、老幼婦女子の勞働を利用し得られ、又現金収入の點で有利な養蠶を縮少した場合、如何なる作物をとるべきか、又、如何にして農家収入の低下を防ぐかの悩みがある。

尙、全村的に、小學校卒業兒童は、本年度の如き殆んど全部軍需工場への就職決定し村に止る者は皆無に等しい

と、以上の如くして本部落に於ては、事變の影響は未だ顯には出てゐないと云へるが問題はむしろ本年以後にあると云ふべきである。

二 金融部面

實行組合の經費は前述の共同收益地よりの収入によりて賄ひ、他に組合員より徴收せず、又他よりの借入金もないが、組合員の肥料資金、改良和牛購入資金等の生産資金につき信用組合よりの貸付を受ける。實行組合は連帯無限責任によつて確實な人的擔保を與へる譯であり、こゝでは信用評定員は不要となつてゐる。一方、貯金吸集の活動も目覺しい。統計貯金一五八、八〇圓、更生貯金、六六圓、國民貯金一五〇〇圓、養蠶貯金六五〇圓に達する。

三 社會、生活部面

以上の如く、實行組合は農家經濟に深く入り込んでゐる事によつて、又部落民の部落民としての生活にとり密接不可離の關係にあり、實行組合の外に於ては、日常生活が不可能である。こゝでは實行組合は單に農事に關するのみでなく、総合的な生活團體である。この部面に於ける行事としては、早起獎勵から、敬老會、主婦會、出征兵士慰問等に又、平均月一回以上の講演會も催し、一般知識の向上、及農事に關する知識の涵養に努めてゐる。尙生活改善申合規約によつて、冠婚葬祭、入營、出征等の儀禮の簡易化、例へば酒一人一合、一膳主義、型式の制定例へば姻禮の儀式順序の制定等を實行してゐる。

申合規約はこの規約に違反する場合は生活必需物資の配給を拒絶する旨定めてゐる。

第四 他團體との關係

一、農事實行組合、産業組合及農會の關係

本實行組合は前述せる如く、大正中期農會の下部組織として發足、昭和八年以來法人化して産業組合に加入してゐる沿革を有する事によつて、形式的に農會及産組の兩者の下部組織として指導、統制下にあると共に、具體的にも、生産部面に於て、農會の技術的指導を受けることは勿論、肥料その他資材の配給、米麥、甘藷等農産物の供出、出荷量の割當等の生産計畫の樹立もその指導によつてなされる、一方、産業組合とは産業、經濟の事業部面に於て、緊密に聯絡し、産業組合の信用、販賣、購買、事業は何れも各農家に、直接的にではなく實行組合を介して結びつきこの點に於ける實行組合、産業組合關係の有機性は理想的である。産業組合は又必要に応じて、隨時、實行組合長會議を召集して、協議乃至傳達、連絡し、組合の理事の選任等も事實上は實行組合によつて定められる。農會産業組合の關係も、沿革に示す如く親密な關係にあり、現在人的にも相互に囑託として相補補助關係にあると共に、指導は農會、事業は産組と、機能の分化、統一にも遺憾がない。

尙本實行組合と近隣部落の實行組合との連絡は隨時會合、文書によつてなされる。本村に於ては、何れの部落に於ても、實行組合が並行的に發達して居り、單に、本實行組合のみが孤立的に、優秀であるといふ譯ではなく、そこに、産組、農會、實行組合の有機機構が成立してゐるのである。

二、村及その他の部落團體との關係

本村に於ては全村的に農事實行組合網完成し、農會、産組の下部組織として村經濟に於て占むる地位頗る高く従つて、又村行政の實行的下部組織ともなつてゐる。村民生活の重要事項は實行組合長會議に於て決定され、村會議員の選舉等も事實上、實行組合の推舉如何に係つてゐる。

以上の如く、實行組合は村、産組、農會三者の指令乃至指導の集中的な實行機關であり、むしろ過重な負擔を荷つてゐる觀がある。尙、本部落に於ても、嘗ては養鶏、養豚、養蠶等の各部落組合が存在してゐたが、事變後資材、飼料購入の窮屈化によつて活動を停止せしめられ、産組との有機的聯絡ある實行組合の中に吸集され自然消滅の状態にあり、その事業は實行組合の手に移つてゐる。かくて部落に於ける團體亂綜が矯正され、實行組合は綜合的生活團體としての機能を發揮しつゝある。

但、養蠶實行組合のみは、形式的に存在するが、實際の事業としては交水社の特約組合として繭の共同出荷をなすに止り、蠶具の共同購入等も實行組合の手に移つてゐる。役員等も名目的に有志の名を列ねるのみで部落民の關心も薄い。

三、部落常會との關係

本村には大字九あり實行組合は二三あるが、部落常會は大字毎にあり、常會長は概ね行政區長が之に當つてゐる本部落では自然部落、行政區實行組合の區域一致し區長と常會長は同一人であつて、實行組合の顧問となつて居り、常會の實質的な活動は月一回村よりの行政的な指示事項を部落民に傳達するか、實行組合長會議の決定事項を常會で指示するといふ状態である。

第五、内部組織及經理

一 機關の種類と其の活動狀況

實行組合の内部組織は部及班制になつて居り、生産部、購買部、販賣部、調査部、教化部、貯金部、防除部、會計部に分れ部長、係長を置き、下部組織として五人組的な五六戸の班を有する。

組合長は二年毎に改選、一應組合員を一巡することになつて居る、組合長は實行組合の活動の積極化と共に組合事務労働一ヶ年一五〇日乃至二百日にさへ達すると云はれ、殆んど自家經營を顧みる暇はないが、如何なる所の報酬も受けない。奉仕活動である會合は總會の外、毎月數回随時行はれる。役員間の連絡も常時行はれ、一般組合員には日常の事項は班長を通じてなし重要問題については臨時集合することゝなつてゐる。

こゝで注意を惹くのは實行組合役員が三十歳前後より四十歳の實行力ある中堅層農民によつて占められ、飾り物的な老人のゐない事である。

理由は實行組合が本村に於ける如く積極的、實質的な事業を行はしめられる場合、老人では肉體的にその任に堪へぬと共に、正確精密な記帳の如きも到底なし能はぬからであり、これは自然的に招來された現象であるといふ。

事實、組合員名簿、規程綴、日誌、出納帳、貯金臺帳、耕地臺帳、耕地生産臺帳、割當書綴、協議事項綴、販賣臺帳、購買臺帳、備品臺帳、市況通報、その他十七種の帳簿が整備されて居り以てその活動狀況が覗ひ知られる。

實行組合を活潑にするには、事業を興へる事でありそれは亦、人事の若返りを齎し更に組合活動を盛んにする所以であるといふ話を興味深く聞いた。

二 經理

本實行組合の活動内容を經理の點より見るに、昭和十四年度に於ける實行組合の収入及支出は次く如くなつてゐる。

收入	獎勵金、補助金(農會ヨリ)	五七四一・一錢
	賞與金、品評會賣上	一〇〇・〇一
	共同收益地陸稻玄米、豆賣上	一〇二〇・〇〇
雑 收 入		五三・五〇
前年度繰越		五〇・七二
計		一二八一・三四

即ち共同收益地よりの収入によつて、本組合の經費を賄つてゐる譯であり、組合員よりの徴收は行はない。

支出

總會、敬老會、主婦會	三二・三〇
講演、講習	六五・八〇
農藥、藥品	六・八〇
納税、諸掛	四二・五八
肥料、種子代	一八一・三三
機械、機具、設備費	三三・三〇
光熱費	八・六〇

品評會賞與金	六五・六〇
慰問費	一五・八〇
雜	八八・六九
計	五四〇・七〇

尙本組合の資産状態の概要を見るに、

土地	二三四畝〇六歩	七〇八圓〇〇
建物	平屋一棟(二二坪)	九八〇・〇〇
機械器具	九	五六五・四〇
備品	一一九	三七・五〇
現金其他各種貯金	四九七九・二四(組合員個人通帳)	
其他獎勵金の貯金	八八〇・〇〇	
計	八一五〇・一四	

蕪和田農事實行組合

〔所在地〕千葉縣印旛郡六合村吉高

一 六合村の概況

本村は西を同郡宗像、本埜村に接し北、東南は印旛沼に圍まれたる馬の背型の半島形態をせる東西約三里、南北約一里、面積約二〇方軒の純然たる農村である。地勢は前述の通り馬の背型を爲し村の中央部面を畑地、山林が占め印旛沼に接する三面に田地を有せり、明治末期より大正初期に亘り旱害を連続的に受け尙一部落(蕪和田部落)は大火に見舞はれる等の事件起り村は相當の打撃を受けたり、其の後一般社會經濟状態稍々立直したる爲、多少の旱、水害はあつたが順調なる進展を來した、昭和十二年本村は縣の經濟更生指定村に選ばれ經濟更生運動を中心に村全體は活潑なる活動を始め今日に至つて居る。

本村總戸數は七三六戸にして内農家戸數六四七戸其他(半水産、商、工業、教員等)八九戸なり。現住人口は大約四、一〇〇人にして二、三百人は近くの街に或は他村に出稼に出て居る現状である。交通は成田より自動車(二日二往復)の便あるのみにして他は渡舟を利用する外なし。

本村行政區域による部落は六部落にして實行組合は三十二を算する状態なり(別表参照)即ち昭和十五年農村協同體制確立運動展開による結果二〇戸——三〇戸位に整理、統合をなしたるものにして他部落にまたがる實行組合は

現存せず専ら農業生産力擴充に即應出來得る一集團地域を區域として構成せられて居る。耕地面積の大様は

水田	五九二・四町	山林	六二四・九町
畑	四二〇・〇町	原野	二四八・〇町

にして之等耕地よりの年生産總額の概数は次の通りである

農業生産	八二〇、四二〇圓	畜産	一九、六〇二圓
養蠶	二〇一、六一一圓	水産	一四、五一〇圓
山林(木材、木炭)	一〇九、六九二圓	工業(棉織物、野カジ)	三六、六五七圓
合計	一、二〇三、四九二圓	一人當生産額	三〇五圓
一戸當生産額	一、六三四圓		

農業生産の主たるものは米、麥、大豆、甘藷、里芋等にして甘藷、里芋の他蔬菜園藝類にして他町村に移出を見て居るものは交通關係によりなし、尙本村の特例として水稻栽培上に於て旱水害を村内地域に於て同時に受ける現狀にして耕作者の苦慮して居る自然的障害の一つである。

即ち昭和十年よりの數字的被害狀況は、

年次	水害に依る無收穫地	旱害に依る植付不能地
昭和十年	一三六・八町	一五・一町
同十一年	六三・三町	〇・二町
同十二年	六・五町	八・八町
同十三年	二五八・二町	

同十四年 〇・二町
同十五年 一五・一町

次に本村經濟更生運動の中樞的役割を遂行しつゝある六合村信用販賣購買利用組合の概略を述べん。本組合設立は昭和十年にして設立後日尙淺きにも不拘、役場、村農會方面とも密接なる聯絡のもとに着々活動を擴大し本來の目的に向つて邁進して居る。

加入組合員數	七〇三戸	販賣高	二九四、二四七・〇六圓
出資口數	一、〇一七口	利用料	三、七九三・四〇圓
運轉資金	七五七、五七五・四五圓	利益金	九一〇、五九圓
購買品賣却高	一六一、七一五・三九圓		

尙本村六部落中の三部落即ち平賀(四〇戸)山田(二〇戸)瀬戸(一八戸)に負債整理組合の設立 (昭和九年設立申請し同十一年資金借入事業開始) を見、債權債務者一丸となり之が整理に非常なる熱意を表はし好成績の中に目下事業を繼續中である。

其の他本村には六合村塾なる農民精神を作興し併せて質實剛健なる次代農村青年を養成する目的を以て青年學校を兼ね備へた道場を經營して居る。即ち昭和十二年より開場し入塾資格として高等小學校卒業生——を卒業と同時に一ケ年間農事作業、軍事訓練、其の他學科、訓育等修養を收めて修了後は各家庭に歸り夫々の家風に準じた生活を行ひ六ヶ月を経過して又入塾して家庭に於ける生活を反省併せて再教育、再訓練を受け六ヶ月後に修了して將來の

		(2) 土地の所有關係						(1) 六合村農家戸數							
		部落名						部落名							
		合	松	萩	吉	平	山	瀬	合	松	萩	吉	平	山	瀬
		計	虫	原	高	賀	田	戸	計	虫	原	高	賀	田	戸
	自作農家	一六一	一一	二五	二六	三四	四一	二四	七五	二五	一一	一二	一五	一七	一六
	小作農家	二四三	一〇	四八	四一	五二	四三	四九	六〇	二四	一〇	一〇	一三	一三	一一
	自作兼小作農家	二五四	四	三七	四三	五五	六二	五三	四九	一	八	六	八	一一	一五
	計	六五八	二五	一〇〇	一〇〇	一四一	一四六	一二六	六五八	二五	一一〇	一二〇	一四一	一四六	一二六

農村中堅人物の養成に努力して居る。
六合村内に於ける農事實行組合一覽表

田 山 戸 瀬																																																																																										
川	鶴	木	新	郷	東	畑	仲	西	岩	新	江	郷	雁	一																																																																												
端	巻	内	都	臺	組	ケ	仲	井	井	立	川	又	松	本																																																																												
15	13	26	16	11	17	13	16	13	12	18	21	14	20	20																																																																												
2	2	3	1	4				5	1	10	2	4	1	4																																																																												
一七	一五	二九	一七	一五	一七	一三	一六	一五	一三	二八	二三	一八	二〇	二一																																																																												
<table border="0" style="width: 100%; text-align: center;"> <tr> <td colspan="5">原</td><td colspan="5">萩</td><td colspan="5">高</td><td colspan="5">吉</td><td colspan="5">賀</td><td colspan="5">平</td> </tr> <tr> <td>松</td><td>和</td><td>邊</td><td>城</td><td>株</td><td>船</td><td>船</td><td>仲</td><td>仲</td><td>燕</td><td>角</td><td>古</td><td>臺</td><td>臺</td><td>臺</td><td>北</td> </tr> <tr> <td>田</td><td>田</td><td>ノ</td><td>ノ</td><td>ノ</td><td>戸</td><td>戸</td><td>村</td><td>村</td><td>和</td><td>井</td><td>第</td><td>第</td><td>第</td><td>口</td> </tr> <tr> <td>虫</td><td>谷</td><td>谷</td><td>内</td><td>木</td><td>西</td><td>東</td><td>二</td><td>村</td><td>田</td><td>崎</td><td>戸</td><td>二</td><td>一</td><td>一</td> </tr> </table>															原					萩					高					吉					賀					平					松	和	邊	城	株	船	船	仲	仲	燕	角	古	臺	臺	臺	北	田	田	ノ	ノ	ノ	戸	戸	村	村	和	井	第	第	第	口	虫	谷	谷	内	木	西	東	二	村	田	崎	戸	二	一	一
原					萩					高					吉					賀					平																																																																	
松	和	邊	城	株	船	船	仲	仲	燕	角	古	臺	臺	臺	北																																																																											
田	田	ノ	ノ	ノ	戸	戸	村	村	和	井	第	第	第	口																																																																												
虫	谷	谷	内	木	西	東	二	村	田	崎	戸	二	一	一																																																																												
647	25	23	29	23	28	21	23	58	13	26	39	30	15	11	9																																																																											
64	1	1	1	1	1	4	6	5		2	1				51																																																																											
七一	二六	二四	三〇	二四	二九	二五	二九	三三	一三	二八	四〇	三〇	一五	一一	一四																																																																											

(3) 自作田畑の各反別

部	瀬	山	平	吉	萩	松	合
落	田	賀	高	原	虫	計	
自	三三七	六二八	四七六	四一四	四四七	九八	二四〇〇
作	三五七	二〇三	三五二	二八〇	三一四	八一	一五八七
小	五〇七	六九四	七一五	五九五	六八二	一四九	三三四二
作	五三六	三〇五	五五五	四二五	四七一	一二二	二四一四
田	八四四	一、三二二	一、一九一	一、〇〇九	一、一二九	二四七	五七四二
計	八九三	五〇八	九〇七	七〇五	七八五	二〇三	四〇〇一

(4) 耕地所有の廣狭に依り區別したる農家戸數

部	瀬	山	平	吉	萩	松	合
落	田	賀	高	原	虫	計	
五反未満	四一	二二	三六	二五	二六	七	一五八
五反以上	四七	六六	六九	六一	五一	五	二九九
一町以上	二六	三八	二五	二〇	二二	六	一三七
三町以上	六	一一	五	二	六	四	三四
五町以上	四	五	三	一	三	一	一二
十町以上	二	三	一	一	一	一	一二
計	一二六	一四六	一四一	一一〇	一一〇	二五	六五八

(5) 耕作する耕地の廣狭に依り區別したる農家戸數

部	瀬	山	平	吉	萩	松	合
落	田	賀	高	原	虫	計	
五反未満	一五	七	四	五	六	一	三八
五反以上	五七	三四	二一	三〇	一一	三	一五六
一町以上	三八	六九	七二	五一	六一	一五	三〇六
二町以上	一一	三四	四一	二〇	二五	四	一三六
三町以上	四	二	三	三	七	二	二一
五町以上	一	一	一	一	一	一	一
計	一二六	一四六	一四一	一一〇	一一〇	二五	六五八

二 蕪和岡農事實行組合

一 名稱並所在地

蕪和岡農事實行組合

千葉縣印旛郡六合村吉高

二 區域及組織

本組合の區域は六合村吉高蕪和田一圓にして組合員の耕作反別は田畑、山林稍平均して居り一戸當一町七反五畝步なり。耕地は大略部落の前面（印旛沼に接する面）に存在し耕作に便利なるも畑地の一部は丘陵の上に散在し、多少の不便あり、人家は比較的密集し各戸の財産も大體平均し居り經營主の年齢等も殆んど大差なく實行組合運営上

利便多し。

道路は部落中央に村道貫通し居りトラックの通ずる便あり、尙印旛沼に渡舟の便ありて傳馬船を利用することを得、本部落の人情風俗は極めて淳朴にして困苦缺乏によく堪へ共同の精神力に富み、共同耕作、農繁期共同炊事等に共存同榮の實を擧げつゝあり。

区域内總戸數、農業者數、組合加入戸數は次表の通りである。

總戸數	農業者 戸數	組合加 入戸數	人口	男	女	別	就勞人員	男	女
二八戸	二六戸	二八戸	一六〇人	七一人	八九人		四〇人	四二人	

三 組合員の構成

組合員の職業は二六戸農業、二戸は學校教員一、日傭業を主として漁業、青年學校指導員等を兼ね行ひ居るもの一、である。

組合員自小作別

總戸數	農家戸數	農業以 外の戸數	地 主	自 小	別 作	自小作	小 作
二八戸	二六戸	二戸	一	七戸	一一戸	八戸	

組合員の耕地反別は合計田畑四九町歩にして内水田三二町六反、畑一五町四反、山林原野一五町歩なり部落内に於ける農産物の主なるものは

種 類	耕作面積	反當目標	種 類	耕作面積	收穫目標
米	三三・六町	三・〇石	甘 藷	一・一町	八〇〇貫

四 沿 革

明治四十五年三月二十一日本部落は大火災を蒙り部落殆んど全部烏有に歸せり、尙火災以前より印旛沼の洪水の爲年々被害を受け、飯米の自給さへ困難の状態であつた。出水反別累年増加し年貢米參百俵を四隣の部落へ搬出する有様であつた。然しながら印旛沼の閘門の完成に依り水害の憂を除きたる頃より農村の一般的不況時代となり部落民の窮乏其極に達せり、加之一般經濟界も亦不況なりしに眞に農村の疲弊困憊せる實狀を打開するには農業機構組織と經營の改善に俟たざるべからざるを痛感せり、且系統農會の勸奨により其の指導の下に自力更生、各戸經濟の立直しを目標に昭和十年一月農家組合を設置し組合是三箇條(別紙参照)を定め目標に邁進せり、而して昭和十年村産業組合の組織せらるゝに當り本組合並組合員全員加入せり。更に經營改善の要を認め昭和十二年五月農事實行組合に改組し農産物の集荷販賣に、生産並生活必需品の共同購入に、尙又農業生産、農業經營の各方面の改善をなし成績愈々見るべきものあり、尙昭和八年の大旱魃に遭遇し村當局及隣接部落の有識者を喚起し揚水事業を起し翌九年之が完成を見、現在に於ては村内唯一の米産地となりたり。組合員は組合に對する理解深く益々進みて内容の充實を圖り、出征兵士遺家族の勤勞奉仕に、事變下最重要事たる食糧産物の増産確保に適切なる計畫、統制の下に一致團結、共存同榮の趣旨に則り、日夜農村更生に眞摯なる努力を爲しつゝある現況である。

部落是

經濟更生の大眼目精神

- 一、忠君愛國の精神に基き國體觀念の涵養に努むること
- 一、合理的農家經營の改善發達を計ること
- 一、相互扶助に立脚し共存同榮の實を擧ぐることに

生産

- イ、米反當目標 三石〇斗
- ロ、小麥反當目標 一石八斗
- ハ、大麥反當目標 二石六斗
- ニ、甘藷 八〇〇貫
- ホ、蒔 二五貫
- ヘ、畝一戸當目標 一、〇〇〇枚

經濟

- イ、金肥節約し目給肥料増産
- ロ、共同炊事、託兒所並共同作業の實施

生活

- イ、榮養食の配給
- ロ、冠婚葬祭の費用輕減其他冗費節約貯金勵行

社會教化

イ、納稅組合設置

ロ、部落常會(毎月十五日)

ハ、入替並出動兵士の遺家族慰問及勤勞奉仕

ニ、早起勵行(寺院の鐘の合圖による)

五月一日より九月三十日迄 三時半

十月一日より四月三十日迄 四時半

(但し一日十五日は三十分早いこと)

組合設立の動機としては既に沿革の章に於て述べた如く不況時に於ける農業組織の再編成と相前後して千葉縣の設置獎勵により設立を見たものにして官廳の育成があづかつて力があつた。農家組合設立以前に簡單なる共同施設は既に開始せられて居たので官廳の勸奨と相俟つて茲に組織化せられた組合の設立を見たのである。設立當時の組合の機構は現在と同様であるが只當時の小作者二名は更生計畫實施の賜として現在は自小作に昇進して居る。

當時の主なる事業としては農業生産の改良發達と不況對策(旱水害其他)等に主眼を置き漸次生活方面に進展を見た様な狀況である。

五 目的及事業活動の概要

現状に於ける目的は確たるものあれど前述の通りの官廳獎勵と不況の對策として設立を見た様な結果相當に眞剣に之が運営に意を配して居る。即ち經濟更生計畫を中心とせる村全體の更生計畫と相俟つて部落に於ける集團的農業經營による總ゆる農産物の生産増加に、就中食糧増産の確保に主要目的が置かれ組合員の計畫的有機的統制の下

に運営せられて居る、事業の概要並其の實績等についても既に部落是に依り大眼目精神が確立して居り、之が目的達成に萬全の努力を傾注せられ、昨十五年度米増産の如き縣よりの割當數量を遙に突破(天候順調なりしにもよる)して居る状態なり。

六 事變後の動向

(1) 資材配給状況

本問題は現時全農村に於て最も困難を痛感して居る事項にして本組合に於ても之が獲得には農會、産業組合と連絡を一層密にして萬全の策を講じつゝあり。

然れども肥料配給状況は事變前に比すれば三―四割減にして之に加へ好まぬ肥料等まで割當配給を受け之が處置に苦心を重ねて居る、尙適期配給が全く行はれて居らず従つて各農家は配合肥料よりも單肥としての配給を受け度き希望を有して居る。即ち配合肥料としての適期配給が行はれざる關係上次の作物に廻すを餘儀なくされる關係上單肥を希望するものにして當然の事と思はれる。尙又配合肥料の配合技術の粗雑による成分の不均衡等も施肥上大なる事項にして配給の減少と併せて農家の困難を思はせる事態なり。

次に飼料は事缺かぬ程度の配給を受けつゝあり有畜經營の本部落には好都合の状況なり。農機具については肥料同様不圓滑の最たるものにして今にして之が配給の圓滑化を講ぜずんば農業生産力に一大支障を生ずべく極力配給系統其の他農業政策の改革を要望して居る。石油は燈火用は不足を感じざるも農業生産に直接關係ある動力用は相當なる不足を感じ配給量僅少にしてその上運搬の不合理による労力の冗費甚だ大なり、殊に本部落の如く年々旱害

に見舞はれて居る地方に於ては之が必要時期に配給せられざれば農民の生死にも影響を及ぼすべき一大事にして施設の改善と相俟つて必要時の最低量の確保を要望して居る次第なり。

其の他作業服、地下足袋等の耕作農家必需品についても同様配給の僅少なること甚だしく木棉の如き一農家當り一ヶ年平均三尺位にして地下足袋一農家一足位なり、殊にゴム質悪き昨今相當の苦痛を受けつゝあり、木棉の配給意の如くならぬ今日本部落農家に於ては棉を栽培之を紡ぎ自家製造をなして居るものも見受けられ農業生産の増大に伴ふ一方には、農業者の努力が總ゆる生産資材に迄も意を配せられ眞剣なるものがある。

以上資材の配給状況について記述したが之が各農家分配或は代金決済の方法については、一切村農會の指示により總て重點主義―米麥中心食糧生産を第一義となし―配給を行つて居る。即ち本村に於ける肥料について見るに産業組合配給九三%、商業者配給七%の現状であつて、商業者配給分を一旦産業組合に移し而して村配給の全肥料について米、麥を第一とし桑、甘藷、必需蔬菜(縣の指定十八品目)の順序により作付反別に應じ配給を行つて居る。代金の決済は總て實行組合を單位として處理し實行組合長責任のもとに即時、或は近日開催の集會の際集金して産業組合へ支拂つて居る。尙運用資金を一時利用決済を行ふ場合もある。

(2) 勞力不足對策並共同施設利用状況

本部落は地理的關係と元來淳朴なる農業地帯なる關係に依り事變後に於ける勞力不足は殆んど見られぬが、増産計畫に基く之が對策として極力畜力の利用を圖り、これ等に對處して居る。尙小學兒童等の勤勞奉仕等實施せられて居るが本奉仕の精神的意圖は諒とするも、實際作業に當りては或は耕地を荒される慮ありて餘り歡迎され

て居ない状態であつて、學校當局の考慮を煩し度い。最も奉仕事業の種類によつては—開墾の如きものは—比較的
好成绩を収めて居る。

共同施設の主なるものは次の通りであり、之が利用は一〇〇%利用をなし以て共同作業の合理化を行つて居る。

共同利用設備

- 1、事務所
- 木造 壹 坪 平家建 十八坪一棟
- 2、作業場
- 木造トタン葺 平家建 十八坪一棟
- 3、動力
- 久保田式石油發動機 二馬力半一臺
- 4、モーター
- 日立式 二分ノ一馬力一臺
- 5、作業機
- 精米麥機 二臺 土入器 五丁
- 籾摺機 四臺 ホーク 五丁
- 噴霧器 二臺 苗代用雀知ラズ五丁

- 脱穀機 二臺
- 米撰機 二臺
- 萬石 二臺
- 製粉機 一臺
- 6、運搬車 リヤカー一臺
- 7、娯樂 ラジオ、蓄音機
- 8、其ノ他 養漁兼溜池三步

協業關係については本部落を四班に分ち、即ち六—七戸宛の班を一活動單位となし共同耕耘、田植、除草、收穫、
調製、受檢等を行つて作業の合理化に努めて居る、之が實施順序等については班内にて相談して早生種等の點も考
慮して圓滿裡に行つて居る。作業勞働力の不均衡、耕作反別の差異より生ずる差額は耕作反別に必要勞働人夫を除
し反當人夫を算出して概ね收穫時(秋季)に於て現金で決済處理を行つて居る。

(3) 土地利用狀況

本部落は前に記述した通り旱水害を同時に受けつゝある地理的關係を有するを以て、昭和十三年度より旱害に對
する一方途として貯水池を設置して數部落に於て之が共同利用を爲して居れり。

出征家族耕作地の對策として部落内に於いて一戸一人宛は義務的に奉仕する事としてあり、先づ第一に之等遺家
族の耕地を耕し或は收穫等を行つて萬全の策を講じて居る。尙此等の外班内(六戸單位隣組)に於ては之以上の手助け

をなし近親縁者に於てもよく奉仕的作業を行ひ出征前と何等變らざる耕作を行ひ、前線の勇士に後顧の憂なき様精神の物質的な總ゆる援助をなし居れり。

本部落に於ける共同收益地としては水田、一反五畝歩一之が事業収入は全部農事實行組合經費に充當して居る。畑五畝二〇歩一水田同様組合經費に充當、原野三町歩一部落農家の屋根換への原料に供して居る。

共同收益地水田は官有地の拂下げを受けた關係上沼地を改良したもので水害を非常に受けやすい地勢に存して居る。

(4) 其他金融關係、生活協同化の進展狀況

金融關係については本部落に於ては不況時代(明治末—大正時代)農家の經營は最も困難なる状態に在りたるを以て經營の合理化に努め、副業(叭製造)の獎勵をなす等して、又は耕作田畑を手放して負債の整理をなした。従つて現在に於ては負債關係は殆んど無い。不況時代手放した耕地も其後の經營合理化等により現在では又夫々元の農家に買ひ戻つて居り、その上逆に貯金部落となつて居る。

米麥の供出については全部産業組合を利用して供出して居り昨十五年度に於ては縣割當の供出數量を遙かに突破して居る。甘藷、叭等の供出も亦全部組合を通じて行つて居る。

生活刷新其他生活の協同化については、本部落に於ては最近農繁期(田植時)に於ける託兒所、共同炊事を實施生活の季節的協同化に努めて居る。託兒所の保母は部落内に在る寺院の夫人が専任に當つて好評を博して居る。共同炊事は各作業班(四班より成る)當番を定め婦人が出て献立表に基き現物(米、蔬菜其他副食物)持參で實施しつゝある。閉鎖に際して之が清算をなし不足額に對して或は現物で又は現金で支拂ひを濟ませて居る。

戰時生活の刷新については六合村戰時生活實踐要項(別紙参照)に基き部落に於ては努めて實施して居る。これによる節約は貯金に振向けて居る現状である。

(6) 農事實行組合と産業組合及農會其他團體との關係

實行組合と産業組合、農會、其他村内各種團體の關係については本村は村長が産業組合長、農會長を兼務して居り之が統卒の下に生産方面と經濟方面との密接なる聯携の下に總ゆる農村生産物の増産に邁進して居る。即ち農會に於ては生産、技術指導を行ひ一方物資の販賣、購入は一切産業組合を通じて行つて居り、實行組合は組合員となりて下部組織體として支援して居る。實行組合長並部落より選出せられた部落委員がたへず組合、農會と接觸して運營の圓滑を期して居る。

養蠶實行組合は存在して居るが數部落を單位として構成して居る關係と養蠶農家が少數の爲記述する事項なし。

其他團體はなく部落活動の中心は擧げて實行組合が單位となりて行つて居る。

部落會も實行組合が之を行つて居り表裏一體の有機的活動をなし村政の圓滑なる運行を行つて居る。本部落には二宮翁の報徳會なるものが昭和十一年頃より設置せられあるも事業として貯金を行つて居るのみにして、實行組合の定例会開催前に會合を持つて居る。

(7) 機關の種類及其の活動狀況

實行組合の機關の主なるものは次の通りである。

總務部——庶務、會計、企畫事務、

生産部——耕作、家畜、副業關係
 受檢部——受檢
 經濟部——購買、利用、金融
 社會公民部——自治行政、公民教育、社會
 婦人青年部——婦人、青年
 各部には夫々部長を置き統制事務を司つて居り其の上に實行組合長が總制して居る。
 實行組合幹部に對する報酬はなく、組合員の奉仕事例も亦ない、即ち部落の爲に日夜献身的に身心を捧げて部落更生の爲に働いて居る。

八 經 費

次表昭和十五年度豫算に於ける會費は、組合員各戸に月五錢宛を據出して居るのみにして會費として他に徴收するものなし。

尙補助金については本十五年度に於ては尙増額せられる豫定であるがその額は不明である。

昭和十五年度豫算

科目種目	収入之部		増減	摘要
	本年度豫算	前年度豫算		
一、組合費	三四	三四	—	—

科目種目	支出之部		増減	摘要
	本年度豫算	前年度豫算		
一、組合費	三四	三四	—	—
二、事業収入	三一〇	二四〇	七〇	—
一、幹旋手數料	四〇	四〇	—	—
二、共同耕作收入	一二〇	一二〇	—	—
三、養鯉收入	一四〇	七〇	七〇	—
四、雜收入	一〇	一〇	—	—
三、補助金	一二四	六四	六〇	—
一、縣補助金	一五	一五	—	—
二、綠肥指導地補助金	三五	二五	一〇	—
三、村農會補助	二〇	一〇	一〇	—
四、採種圃補助	二四	一四	一〇	—
五、共同作業補助	三〇	—	三〇	—
四、前年度繰越金	三〇	二七	三	—
一、繰越金	三〇	二七	三	—
計	四九八	三六五	一三三	—
一、事務費	二〇	二五	△五	—
一、消耗品費	五	五	—	—

二、備品費	五	一五	△一〇	
三、雜費	一〇	五	五	
二、會議費	四六	三五	一一	
一、總會費	三〇	二二	八	
二、月例會費	一六	一三	三	
三、事業費	三六五	二八二	八三	
一、產組拂込	一五	一一	四	
二、共同耕作費	一五	一五		
三、品評會費	一六		一六	
四、觀祭費	一五		一五	
五、講習講演會費	九	五	四	
六、養魚費	一五	一五		
七、採種圃經營費	一五	一五		
八、共同作業費	四〇	三〇	一〇	
九、共同利用農具費	七五		七五	
一〇、受檢費	二〇	二五	△五	
一一、基本金積立金	一三〇	一六六	△三六	
四、豫備費	六七	二三	四四	
一、豫備費	六七	二三	四四	

計

四九八

三六五

一三三

九 其 他

本部落活動の參考となるべきもの次の通りなり。

(1) 基本財産(共有財産)

イ、現況	
1、土地	一反五畝步
畑	五畝二十步
原野	三町步
2、貯金	二六八、〇〇錢
産業組合貯金	一、八二五、〇〇
郵便貯金	二、一九三、〇〇
計	一、八五〇、〇〇
3、運用資金	作業場一棟 木造トタン葺十八坪
4、建物	(別紙共同利用設備参照)
5、器具機械	
ロ、年次計畫	
種目	昭和十五年 年
土地	三、町反 三、〇二〇步
	同 十六年 三、町反 三、〇二〇步
	同 十七年 三、町反 三、〇二〇步
	同 十八年 三、町反 三、〇二〇步
	同 十九年 三、町反 三、〇二〇步

(2)

組合の規約及諸規程

1、經濟更生委員會々則、同督勵規程、省略

2、各種貯金規程

各月一人一圓を積立組合總計二十八圓也を毎月確實に實行す

3、貯金貸付規程

貸付せざるにより規程なし

4、婦人會規程

農事實行組合婦人部により毎月十五日定例會を開催す

5、臺所改善規程

婦人部の活動に依り臺所改善をなしつゝあり左記を目標として實施しつゝあり

(イ)明るく (ロ)清潔に (ハ)簡易化 (ニ)取灰設備

貯金	二、一九三	四	二、七四三	四	三、二九三	四	三、八四三	四	四、三九三	四
報德貯金	六五八		七三〇		八〇二		八七四		九四六	
運用資金	一、八五〇		一、九〇〇		一、九五〇		二、〇〇〇		二、〇五〇	
債権	一五〇		二〇〇		二五〇		三〇〇		三五〇	
建物	作業場一棟		倉庫一棟		叭倉庫一棟					
什器	冠婚葬祭用具一式									

備考

外に組合に於て溜池を利用し養鯉をなす、土地は共同作業に依り収益は積立運用資金に入るゝものとす

(3)

六合村戰時生活實踐要綱

(昭和十五年九月五日村常會ニ於テ決定)即日實施

趣旨

今や曠古の大事業たる東亞新秩序の建設蕭々其の歩を進めつゝありと雖も國際情勢は愈々複雑にして帝國の前途寔に容易ならざるものあり此の秋に當り眞に時難を克服し陸國の大理想を顯現せんには須く一億一心凡ての自我功利を廢して國策に協力し舉村一致不拔の決意を以て其の必行に努め聖業完遂に奉公の誠を效さんことを期す

6、共同作業場規程

イ、精米、麥、精粉は毎月一日とし三回

ロ、右料金は精米麥一俵につき二十錢とし収入は總て組合收入とす

ハ、當番を設け毎回三名づゝ出役すること

ニ、扱摺、脱穀は異動とし期節別に行ふものとす

ホ、扱摺、脱穀等の料金は動力組合に於ける協定價格とす

ヘ、共同作業に於ける収入は總て組合に於て行ふ

7、勞力奉仕班規程 省略

8、共同販賣購買規程

販賣物、購買品は全て組合に於て統制し村産業組合を通じて行ふ、斡旋手数料等は細別しあるも省略す

9、部會常會規程

二宮式報德會を毎月十五日開催す

常會規程 省略

實踐要綱

- 一、前線の勞苦を偲び一切の生活を擧げて國策に協力し苟も贅澤を廢し質實簡素を尊ぶこと
- 二、毎朝必ず一家擧つて宮城を遙拜し、神棚、佛壇に拜禮して奉公感謝の生活を爲すと共に心身の修練體位の向上に努むること

實施に關する心得

第一項 一、結婚の心得

- 一、結婚は人生の一大典禮で一生の幸不幸に大なる關係を持つものなれば當事者は勿論關係者一同充分考慮し一生を誤るが如き悔の無き様注意すべきである
 - 二、結婚は男子は滿十七歳以上女子は滿十五歳以上に達したるものは父母の同意の上で之を行ふ事を得尙男子滿三十歳女子滿二十五歳以上に達すれば父母の同意を待たずに結婚する事を得と民法に定めてはあるが道德上年齡の如何を問はず父母の同意を得るが肝要である
 - 三、結婚するには配偶者の人物、健康、遺傳、血統、學識、經歷、趣味、嗜好、職業、家風、信仰等を十分取調べ後日に悔の無い様慎重にしなければならぬ
 - 四、結婚は其の約束を取り極める前に本人を直觀するため見合を行ふ立會人は媒酌人夫婦と男子の父女子の母とする
- 第二項 一、出産に關する心得
- 出産に對する親戚及組合よりの祝賀は物品を廢し現金を以てすること親元よりの初着は虚飾内のものを廢し實用向のものとする
- 三ツ目産立は之れを内祝程度とすること
- 二、端午雜祭に關する心得
- 端午雜祭は古來よりの形式を尙ぶも其の精神を重んじ虚禮を廢すること

親戚組合よりの贈物は物品を廢し現金を以てすること
親元よりの贈物も右に準ず

雜小旗等の飾物は自宅にて調度したるもの一組に限ること

披露は内祝程度とし料理は婚禮に準ずること

三、紐解に關する心得

淺間詣りは儀式のみとし披露宴は廢止すること

紐解の際に於ける従來よりの配り飾を廢し親戚よりの祝儀は現金とすること(神官への籠餅も現金とすること)
祝ひ着は實用向の通學服とすること

披露宴は内祝程度とし婚禮の披露を準ずること

第三項 一、葬儀に關する心得

葬儀に當りては其の主人は一切を刷新委員の指導に一任し自己の希望及意見を差入れざること

一、葬儀参加は親戚及組合とし内役野役は従前通りとす

二、酒は當日翌日も絶體使用せざること

三、本膳は出椅前とし一汁二菜とし土産物は廢止すること

四、香奠は現金とし他人よりの砂子は廢止し親戚及組内よりの叭は現金又は現物とすること

五、香奠返しは廢止すること

六、念物業への謝禮は現金とし一人當り金二十錢以内とすること

七、寺への四十九餅傘下駄野叭等は現金とすること

八、念物業及働業は親戚よりの心付けを一切受けざること

第四項 一般に關する心得

- 一、新盆年忌等の法事は簡素にし之に付て念佛は葬式念物に準ずること
- 二、新盆見舞及年忌見舞等は現金とすること
- 三、出征、入營、歸還除隊の際に於ける響應土産物は一切廢止し入征入營に際しては區より國旗一本を贈り親戚知人の儀は受けざること
- 四、年頭年末中元等の贈答品は之を廢し病氣見舞は簡素を旨とし返禮は廢止すること

第五項 日常生活に關する心得

- 一、部落の年中行事及諸會合も簡素を旨とし敬神崇祖の念を基とし良風美俗を損せざる様行ふこと
 - 二、服裝調度に關しては特に次の事を嚴守すること
 - 兒童生徒の通學並に運動の服裝其の他作業用として必要なる服装用具を除きては此の際一切新調を見合すこと
 - 三、米食の偏重を避け栄養量の適正配合に注意し極力混食を常用代用食慣用の徹底を期すること
 - 四、食事の場合は常に良く咀嚼するの習慣を養ひ、一粒の米麥も粗末にせざるやうすること
 - 五、家具什器此の際已むを得ざる實用品を除き新調を爲さざること
 - 六、農繁期等の場合に於ける雇傭人に對しては規定以外の賃金響應心付け等をなすが如きことは此の際全廢すること
- 冠婚葬祭に於て節約したる金額の八割を國債購入又は貯蓄を爲し二割以上を公共團體に寄附すること

根前農事實行組合

〔所在地〕 千葉縣香取郡森山村下飯田

一 森山村の概況

本村は香取郡の東部に位し東北部及東部は笹川町、神代町に界し南部は良文村、西部は小見川町、八都村に連り北部は利根川を隔て、茨城縣鹿島郡と界す。

地勢は北東部及東南部に亘り丘陵連るのみ他は概して平坦なり、北部は大利根の流れ洋々として四時眺望に富む、曲川(一名玉川)は流域僅少にして灌溉に利するところ尠きも川口より利根川開門に至る間舟楫の便ありて運輸を助く、村内を通して田畑共に地味肥沃にして、米、麥、甘藷等の主要農産物は素より食用園藝、特用農産物等も亦共に自給用として栽培に適す。村の總面積は九・一五方秆なり。

耕作面積

田	二九〇・七町	雜地	〇・二町		
畑	一二二・七町	(宅地)	二七・二町		
山林	一〇一・二町	計	六五二・〇町		
戸數	人口	内農家戸數	商業	商業兼公務自由業	其ノ他
三六五戸	二、三九三人	二八〇戸	二八戸	一〇戸	四七戸
	男一、一二四				
	女一、二六九				

農業者別
農業生産額

農業者別	自作兼小作		小作		計
	自作兼小作	小作	自作兼小作	小作	
六七戸	一二八戸	七九戸	二七四戸		
作付反別					
水稻 陸稻	二九三、四反	五、四四四石	二二〇、六六四圓		
麥	一〇七、六	二、一八八	五一、〇七八		
大豆其ノ他蔬菜	一四〇、五		七四、〇〇八		
特用農産物 (茶種、ゴマ、甘藷苗)			二、六二五		
果實	一、四七三本		一、一七六		
養蠶 (飼育戸數九戸)	五二〇瓦	二九一貫	二、五六六		
計			三五二、一一七		
家畜					
牛	一一八頭	一一八頭	一八、一二二		
豚	一五〇頭	二五二頭	六、八〇四		
山羊	五	六	二、五六八圓		
家禽	二二二		八四、八〇〇		
林産物總額					
水産物					
工業 (燒酎、醬油、甘藷澱粉、金屬製品、其ノ他)					
製造戸數					
生産總價格					

農産物	三三二、〇三四圓
畜産物	二〇、三二八
林野産物	六、八〇四
水産物	二、五六八
工業産物	八四、八二〇
合計	四四六、五五四
現住一戸當	一、一九〇、八一
現住一人當	一八六、六〇

本村に於ける教育機關としては日新尋常高等小學校一、森山青年學校一、日新圖書館一の設備あり。
 村内各種團體として村教育會、村農會、産業組合、在郷軍人分會、男子、女子青年團、國防婦人會、畜産組合、
 農事實行組合(一六組合)煙草組合、電化組合等ありて夫々の分野に於て活潑なる活動を爲しつゝあり。
 行政區域は大字六、小字一七に分たれ農事實行組合は小字單位を以て全區域に組織せられて居る。尙村内の經濟
 事業を一手に掌握して全面的活動を爲しつゝある産業組合の概要を記せん。

森山信用販賣買利用組合概況

設立年月日	大正十四年二月
組合員數	三三八人
出資口數	一、一五一口(一口十圓)
運轉資金	三〇四、九五三圓

購買品買却金	一〇、〇〇〇圓
販賣代金	五三、三七二圓
剩餘金	一、七九〇圓

二 根前農事實行組合

一 名稱並に所在地

根前農事實行組合
千葉縣香取郡森山村下飯田

二 區域及び組織

本部落は森山村の東部に位し土地(水田)は平坦にして里道良く發達し、縣道約五丁にして乗合自動車の便あり、佐松線小見川驛へ三十丁、笹川驛へ二十五丁村内至るところトラックの出入自由にして利便多し。

本組合の區域は森山村下飯田小字根前一圓を以て組織せられ、區域内總戸數一五戸、總人口九四人にして組合員耕作面積について見れば、

水田	一八・六町	山林	六・〇町
畑	一一・八町		

にして水田は組合員各戸の前面に拓け、畑地は裏側丘陵上を開墾して耕作地とせるものにして水田耕作は非常に便利なるも畑地は肥料、收穫物の運搬に稍不便を感じつゝあり。

元來畑地は僅少なりしも共同作業に依り山林地帯を開墾し現在に於ては既に餘地なき程の状態なり、尙水田は昭和十一年度より耕地整理事業を起し昭和十四年に於て完成本村内唯一の二毛作地なり。

區域内農家戸數

總戸數	農業者戸數	組合加入戸數	人口
一五戸	一四戸	一四戸	九四人

本部落内に寺院一あり、本部落は古くより、共同精神を充分發揮し部落一體となり農業作業に従事し之が業績大いに見るべきものあり。

三 組合員の構成

組合員は前述の通り全部農家にして階級別構成は

總戸數	農家戸數	地主	自作	自小作	小作
一五戸	一四戸	一戸	五戸	四戸	四戸

本部落に於ける主要農産物は米産額を第一として畑地に於ては麥(大、小麥)及甘藷の産額が大部分を占めて居る。殊に甘藷の栽培については本部落に於ては多數栽培せられ昨年の如きは五千俵を産出せり。

區域内組合員耕作面積(田畑合計)

五反歩未満	二町未満	二町五反未満	三町歩未満	三町歩以上	計
一戸	二戸	四戸	三戸	四戸	一四戸

四 沿革

昭和八年に森山村が農家組合の指導町村になるに及びて名稱を根前農家組合と改めて設立を見た。明治末期より大正の初期頃に亘り本部落内には農談會—一種の部落内農事研究及懇親機關—がありて部落内の融和を圖る唯一の機關として存在して居りたり。本部落は數十年來の貧困部落でありながら容易に復興更生の意氣舉らず沈滞して居りたるを十數年前現在の壯年層—當時の青年層—により始めて長きねむりより覺め發奮興起したるものにして爾來専ら部落内の精神的融和を圖り總ゆる農家の經營改善或は又部落の經濟更生を念願として、其の間組合是等を定め之に向つて邁進し所期の目的達成に全部落一丸となり努力を傾注して來た。以上の如く農家組合として部落内全農家の經營全般に亘りて改善の活動を續けて來たれども昭和十四年七月二十日を以て現在の根前農事實行組合に改め從來に増し經濟更生事業を中心に活動を繼續して居る。

組合是(森山村全體のもの)

- 一、産業組合精神の擴充徹底を圖り共存共榮の實を擧げ以て理想郷森山村を建設せんとす。
- 一、本村内の土地にして他町村の所有に屬しありて本村民が回收するか又は本村民が他町村に於て買入れ之と平衡せしむ。

組合是(根前農事實行組合)

- 一、全戸自作農創設
 - 一、全部落一戸の如き融和をなす眞の理想部落實現
- 誓(根前農事實行組合)
- 一、心平かに丹精を怠らざること
 - 一、共同一致の精神に生くこと
 - 一、自給計畫達成に努むること

- 一、時間と約束を守ること
- 一、老人を尊むこと

本實行組合設立當時前(昭和十一年)に於ける概況を述べん。

部落總戸數十五戸、組合加入戸數十一戸

耕地面積による農家戸數

五反歩未満

五反—一町歩

一町—二町歩

二町歩以上

田

一戸

一〇戸

畑

一—二戸

自作小作別戸數

自作	自作兼小作	小作	地主兼自作	地主
一戸	六戸	三戸	一戸	—

設立當時の主なる事業—現在に於ても繼續せられて居る。

水稻種子共同鹽水選、共同苗代、共同耕起、共同田植、共同除草、水稻採種園、病蟲害防除、調製、販賣、裏作
 二毛作(紫雲英一寸蠶豆)共同栽培、大小麥々奴豫防、大小麥採種園、蔬菜共同苗圃、畑作物共同販賣、鶏卵共同販賣、
 養鶏飼料共同購入、肥料共同購入及共同配合、堆肥共同積込、種苗、農具、農業用品の共同購入、組合資金の共同
 利用、水田共同經營地六反歩の經營、貯金の徹底化等である。

五 目的及事業活動の概要

前節に於いて組合是等記述し併せて沿革に於て既に組合の目的にも亙る事項を記したが之を即ち要約すれば本部落全戸一丸となつて明る、生活のしよい、理想郷根前部落を建設せんとする目的のもとに農家組合——農事實行組合を通じ一致團結目的に向つて邁進して居る。

次に事業に於ても前項に於て記述の通り水田に於ける各種共同事業を行つて居り、畑地開墾事業の如きも共同により十町歩以上の開墾をなして居る。

六 事變後の動向

(1) 資材配給状況

本部落に於ても亦農業生産資材の配給量不足は相當率に及んで居り肥料について見るに事變前の半量に減少して居る。これ等は堆肥の共同積込或は鶏糞等の利用により又は自給肥料等により補給して居る。僅少の肥料の配給も亦經營耕地面積と作付物により即ち米麥を重點として区域内組合員に配給して居る。農機具、動力用石油、木綿、地下足袋等他農村と同様配給僅少のため困難を感じては居るもの或は代用品で又は動力利用で食糧の増産確保に向つて邁進して居る。

(2) 勞力不足對策並共同施設利用状況

本部落に於ては全戸共同作業を行つて居る關係と各戸の就勞力の移動なき爲不足を感じては居ないが増産計畫達成方面より見る時或は此の恨なきにあらず、然れども徹底的な協同作業によつて之等を克服して居る。

共同施設の主なるものは發動機一、脱穀機一、精米麥機一、噴霧器一、製糶機一、リヤカー一、葬儀具一、米探機

一、秤一、切干用切斷器一等に於て比較的部落が密集して居る事と規模が小なる爲共同施設の規模も亦小である。尙肥料配合關係の小器具等の施設もあつたが産業組合に於ける肥料配合事業開始せられるや進んで組合に之等の器具を移管した。之等の利用は組合長統卒の下に希望により利用せられて居りその圓滿なる事一集團大家族の感を受ける状態である。

(3) 土地利用状況及共同作業の概況

本部落に於いては共同收益地二反歩を經營し之より擧がる収益は總て組合經費に充當して居る。

既に記述せし本部落に於ける共同作業中水田の共同耕耘、田植、除草及裏作共同栽培につき詳述せん。

本 田 耕 耘

(イ) 戸 數 十四戸

(ロ) 段 別 十六町歩

(ハ) 作 業 内 容

部落内畜力利用の合理化を圖らんがために耕牛の全能力を之に向け不足勞力を人力により補はんとするものにしてこれが餘剩勞力は堆肥及裏作に利用せんとして居る。可成男子を用ひ女子は畑及自給肥料造成方面に努めしむるものとして居る。期日は年により多少の變更はあり。

第一回耕耘 四月一日より開始二十日に終る

第二回耕耘 四月廿五日より五月十日迄に終る

第三回耕耘 五月十六日より五月廿五日迄に終る

水田裏作地 五月廿日頃より六月一日迄に終る

(ニ) 勞賃の計算 男子女子共に協定賃銀に對し勞働能力及就勞時間に應じて適宜増減するものとす。
午前八時開始正午一時間休憩午後五時終了。尙耕牛に對しては一日男子一人の手間の外規定の飼料代を支拂ふ、耕牛の能力査定に依り増減することあるべし。

(ホ) 經費の分擔、本田經營反別割とす、但し耕牛に對する飼料代に就ては組合よりも補助をなす

共同田植

(イ) 戸數 十四戸

(ロ) 段別 十六町八反歩

(ハ) 作業の内容 部落内經營水田全部の共同田植をなすものとす

作業の實施は之を二班に分ち班長助手を置き指揮を爲すものとす、就勞者は老若を問はず全戸總出動にて之に當ること。

農林一號より順次植付くるものとす、田植三日毎に一―二日の休日を置く、この休日は畑作物の收穫、甘藷の植付及休養に充つるものである。

作業時間は午前七時開始午後七時に終る途中正午の休憩一時間は各自宅に於てなし午後四時頃より二十分の小憩をなす、六月四、五日頃植を始め約十日間にて終了する、毎日二戸一組當番を置き午後的小憩時に自家製の茶葉を持寄る事、茶葉は漬物及イモシ一升(生にて)を限度とす。

(ニ) 比較對照 從來他部落に支出したる勞賃は毎年百二十圓を數へたり之を部落内にて自給自足し得るに至る利益あり、尙他部落より毎年雇入れたる者は低廉なる手間にて各自雇入れの繁雜なる響應のことなく利益多く彼我共に得る所大なり、勞力に於て一割約六十人手間四十圓の節約を爲し得る見込みなり、尙各家庭に於ける雜費の支出は半減されたと見て一戸三圓宛の節減は四十圓の金額となる。

(ホ) 勞賃の計算 男子女子共に協定勞賃による、勞働能力及就勞時間に應じて適宜減額するものとす。
朝苗取りに對しては獎勵の爲め一把につき三厘宛を支拂ふ

午前七時に作業開始午後七時に終る(十一時間勞働) 耕牛に對しては男一人手間の外規定の飼料代を支拂ふ、耕牛の能力も査定により増減す。

(ハ) 經費の分擔 各經營反別割とす、勞働量に應じて徵收及交付あるべし、雜費支出に對しては組合より補助をなす。

共同除草

(イ) 戸數 十四戸

(ロ) 段別 十町

(ハ) 作業の内容 共同田植に引續き共同除草をなす、作業開始は午前七時より午後六時まで田植順序に二―三回行ひ一回目は除草器により行ひ二回目は手取りにて行ふ。午前午後約二十分の小憩を行ふ、正午一時間の中食時間を置く。

第一回 七月一日より十日迄除草器にて行ふ、各戸一人以上出役のこと

第二回 七月十五日より廿五日迄の内に手取を行ふ、各戸二人以上出役のこと

第三回 七月卅一日より八月十日迄に手取を行ふ、各戸二人以上出役のこと

(ニ) 比較對照 從來の個人經營に比し約一割の勞力節減を爲す見込みなり。

(ホ) 經費の分擔 本田經營段別割とす勞賃の算定は本田耕耘に同じ。

水田裏作共同栽培

(イ) 戸數 十四戸

(ロ) 種類及栽培面積 紫雲英二町二反歩 一寸蠶豆六反歩

(ハ) 作業内容 二毛作の徹底化を共同力に依り行はんとするものにして各戸より平均に、二毛作用土地を提供せしめて紫雲英、一寸蠶豆の栽培をなし總て共同作業を爲し、播種より收穫販賣まで平均に出役するものとす紫雲英は現物一寸蠶豆

は現金にて配分をなす、之に要する經費は平均割となし、勞働賃銀の算定なし。

水田共同經營

- (イ) 戸數 十四戸
- (ロ) 經費面積 六段歩
- (ハ) 品種別面積

品種各	農林一號	中銀	獻穀田(糶)	計
面積	二反〇〇〇	三反七〇〇	〇反三〇〇	六反〇〇〇

(ニ) 肥料(本田)

種類	堆肥	厩肥	硫安	過磷酸石灰	硫加	計
數量	三〇〇貫	四貫	五貫	一〇貫	二貫	—
金額	六圓〇〇	一圓三八	一圓九〇	一圓六〇	一圓〇〇	一一圓八八

(ホ) 事業の内容

經營水田の内二段歩は組合有財産(收益地)にして他は耕地整理組合よりの借用地なり。作業は定休日を利用し出役員數は各戸平均とす、收益中より基本財産の蓄積をなし、尙殘餘を生ずるときは組合員の慰安會及慰勞品の分配をなす

其他本部落に於ける共同作業としては共同苗代の經營、蔬菜共同苗圃の經營、田畑採種圃の經營等あれど之等については前述共同作業と同様にして省略す。

(4) 其他

本部落に於ける負債は現今にては殆んど其の額僅かにして禍を残す様なものなきは共同作業、經營の成果にして喜ぶべき現況なり、出征遺家族耕地については村の方針に準據して勤勞奉仕を爲して居る。

尙本部落に於ける特例として葬式を農事實行組合葬を行つて居る。日常の生活は村に於て決定せる戰時生活實踐要綱(別紙参照)に基き嚴格に實行して居り之が實行によつて節約し得た金額は葬儀資金として部落に於て積立て、置くことになつて居る。

本村に於ける天引貯金の發生地—先進地區たる本部落の天引貯金は經濟更生により現在部落に於て共同に貯金しであるものだけでも一萬圓以上に及びそれに各戸に於ける貯金額を加へたら相當の數字に上る状態にして、現組合長の指導宜敷しきを得尙又組合員よく理解して現今に至つて居る。

以上によりて既に明かな如く本部落は徹底的に實行組合を中心に部落一丸となつて働いて居るのであつて産業組合及農會關係の聯絡等非常に密接なるものがある、即ち部落には産業組合と直接聯繫して居る世話係が置かれ農會に對しては部落幹事がこの連絡に當り、此の間を實行組合長の指導の下に一體的活動を展開し上述の成果を得て居る。

其他團體は部落にはなく、常會の如きも組合長が會長を兼ね總て實行組合中心で兼ね行つて居る。

七 機關の種類及活動狀況

本實行組合に於ては他組合の如き部制等は行はれず總て家庭的に之等が圓滿裡に運行せられて居る、他機關との關聯としては組合長が産業組合理事を兼ね、組合監事が村農會監事を兼ね、村農會總代員として組合員を送つて有機的連絡の任に當つて居る。

役員の金的物的報酬は皆無にして犠牲を拂ひ献身的に理想郷根前の建設に向つて先頭に立ち進んで居る。

八 經 費

本組合に於ては豫算は作成せず總て積立金で充當し置き年一回開催の決算總會に於て次表の如き收支決算を行つて居る。

昭和十五年度根前農事實行組合收支決算書

收 入	支 出
一金參百六拾貳圓四拾參錢也	總 收 入 金
一金百五拾參圓參拾錢也	總 支 拂 金
差引金貳百九圓拾參錢也翌年度、繰越	

内 譯		種 目	
收 入	金 額	支 出	金 額
農 產 物 賣 却 代 金	一三三、〇四	祭 典 費	二九、二〇
甘 藷 切 斷 機 購 入 補 助 金	三、〇〇	肥 料 代 費	四四、二五
實 行 組 合 活 動 促 進 補 助 金	一〇、〇〇	共 同 作 業 費	九、三三
米 穀 増 産 施 設 補 助 金	二四、三六	病 虫 害 防 除 費	二八、四三
甘 藷 苗 床 病 虫 害 防 除 補 助 金	八〇、〇〇	總 會 費	二、〇〇
諸 公 課			
甘 藷 苗 床 病 虫 害 防 除 講 習 會 補 助 金	九、〇〇	配 給 諸 費	九、四〇
國 勢 調 査 常 會 補 助 金	二、〇〇	澱 粉 甘 藷 取 扱 手 數 料	五、五〇
澱 粉 甘 藷 取 扱 手 數 料	五、五〇	事 變 費	三、七〇
產 業 組 合 配 當 金	九〇	備 品 費	一、六〇
郡 農 會 品 評 會 賞 金	二、〇〇	常 會 費	二、〇〇
整 理 組 合 差 額 交 付 金	一、五四	產 業 組 合 出 資 金	三、〇〇
空 吹 賣 却 代 金	二八、五〇		
配 給 品 精 算 殘 金	二、九二		
預 金 利 息	四五		
繰 越 金	五九、二二		
合 計	三六二、四三	合 計	一五三、三〇

九 其 他

根前農事實行組合財産表

昭和十五年十二月三十一日現在

地 目	土 地	地 積	時 價	備 考
田	下飯田字沼六八四	一、三二六	九二〇	共同作業用地
計	六八七	二〇一	一五〇	
		一、五二七	一、〇五〇	

名稱	棟數	坪	時價	備考
建築物				
金圓其の他	一	坪	四五圓	共有器具置場
種別	金額	備考		
產業組合出資金	三三、〇〇	出資口數 三〇、一口二十四(未拂金二七圓)		
現金	一〇三、四〇	產業組合定期預入		
	一〇三、四〇			
	五一、七〇			
	五一、七〇			
計	三四三、二〇			
葬儀費積立金			七九、一七	
備品			六五〇圓	
			石油發動機外十八點時價	

(参考)

森山村戰時生活實踐要項

一、婚禮に關する事項

- (一) 婚禮は嚴肅簡素各人其の分に應じ舉式すること
- (二) 式服は男子は國民服又は團服等を用ふること、女子は華美なる服裝を廢し極力將來平常着用し得べき清淨なる服裝とし男女共儀禮章を附して禮服に代ふること 參列者亦之に準ず

- (三) 衣服、調度品の支度は質素を旨とし新調を見合せ將來實用に適せざるものは絶対に調達せざること
 - (四) 祝儀は現金とし物品を以てする場合も虚禮に涉るものは絶対に之を廢止すること
 - (五) 祝品引出物等は一切廢止し式後紅白の餅各一個を配る程度に止むること
 - (六) 披露は隣家近親等最少の範圍に止め料理は一汁三菜以内酒一人二合に止むること
 - (七) 婚儀は當日限りとする
- 二、葬儀に關する事項
- (一) 個人葬の花輪造花弔旗は之を廢し公葬に於ても村より一基各種團體より一基計二基の花輪と遺族以外の弔旗は一切廢止すること
 - (二) 香奠新盆見舞等は成る可く現金とし物品を以てする場合も虚禮に涉るものは廢止すること従來の慣例たる荷米を贈ることも廢止するものとす
 - (三) 通夜は午後十時限りとし饗應をなさざること
 - (四) 葬儀終了後淨めの行事を廢止すること
 - (五) 葬儀の際に於ける撒錢香奠揭示等の弊習は此の際絶対に廢止すること
 - (六) 葬家の親戚より働き人年寄に對し一切金錢物品等を贈らざること
 - (七) 葬儀の際の酒は一切之を廢止するも洗頭の淨として一升を限り使用することは差支なきこと
 - (八) 葬儀の際村内弔問者には食事を供せざること
 - (九) 一般弔問者に對する酒代配り物等は廢止すること
 - (十) 盆法事年忌其の他佛事の際の酒類は之を全廢し配り物等も之を廢止すること
- 三、其の他の儀禮習俗に關する事項
- (一) 七五三出產端午雜祭りに關しては次の事項を嚴守すること

- イ、祝宴は隣家近親等極少數の内祝とすること
- ロ、祝儀は物品を廢し現金を以てすること
- ハ、引出物を行ふ場合と雖も紅白の餅各一個を配る程度とすること
- ニ、紐解祝は成る可く神前に於て部落合同して嚴肅に行ふこと
- (一) 祭禮神事は教神の本義に則り浮華に涉らざること各戸に於ける客の招待は爲さざること
- (二) 出征入營に際し見送人に對する饗應並に除隊歸還の場合に於ける土産物は一切廢止すること
- (三) 寄り合又は講其の他之に類する各種の會合は其の數を整理し回數を減少すること
- (四) 病氣見舞等各種の儀禮は虚禮を廢し簡素を旨とし返還品等は廢止すること
- (五) 年末年始並に中元の贈答は一切之を廢止すること書狀に依るものも廢止すること
- (六) 其の他日常生活に關する事項
- (一) 服裝調度に關しては特に次の事を嚴守すること
 - イ、兒童生徒の通學並に運動の服裝其の他作業用として必要なる服裝用具を除きては此の際一切新調を見合せこと
 - ロ、諸會合其の他訪問の際に於ける服裝は制服團服國民服等簡易なる服裝を用ひ特に常會の出席には平常の作業服を獎勵すること
- (二) 米食の遍重を避け極力混食の常用代用食慣用の徹底を期すること
- (三) 食事の場合には常に咀嚼するの習慣を養ひ一粒の米麥も粗末にせざること
- (四) 家具什器等は此の際已むを得ざる實用品を除きては新調せざること
- (五) 時間尊重の觀念を新にすること
- (六) 農繁期等の場合に於ける雇人に對しては規定以外の饗應心付等をなすことを廢止すること
- (七) 物見遊山享樂的の旅行等は見合せこと 以上

長表農事實行組合

〔所在地〕 新潟縣南魚沼郡上田村三郎丸

一 上田村の概況

上田村は明治三十九年元旭村(早川、三郎丸、枝吉)吉元長崎村、元南旭村(瀧谷、姥澤新田、一ノ澤蟹澤新田、清水)元三和村の内雲洞の十ヶ大字の合併せるものなり。

南魚沼郡の東南端に位し東は同郡五十澤村及群馬縣利根郡水上村、西は同郡中之島村、土樽村、南は群馬縣水上村、北は同郡六日町鹽澤町に接す、東西一里餘、南北三里十八町に及び面積六方里の細長き農山村なり。

現住戸數七七五戸にして人口四、八一六人なり。

長表農事實行組合 161

職業別	種別		戸數	割合	人口
	自作	自作兼小作			
農業	自作	自作兼小作	一〇五戸	一三・六%	六五五人
林業	計		四〇六	五二・九	二、五五一
商業	小作		一二七	一六・二	七七九
工業	計		六三九	八二・七	三、九八五
その他			一二	一・六	七四
			一〇七	一三・八	六六四
			一五	一・九	九三

村内に於ける耕作土地面積		計	七七五	一〇〇	四、八一六
田	四三〇・八町	原野	六三・四町		
畑	一七一・九町	雜種地	〇・一町		
池	〇・二町	(宅地)	九四・五六〇坪		
山林	一、八〇九・二町				
耕地(田畑)所有の廣狹別戸數					
五反未満	五反以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上
三一八戸	九二戸	八九戸	一八戸	七戸	三戸
計					五二七戸
耕作地積別農家戸數					
五反未満	五反以上	一町以上	二町以上	三町以上	計
三二戸	一七七戸	二二二戸	一八八戸	二〇戸	六三九戸
村内に於ける主なる産物及價格					
米	七、八三七石	價	二一五・七七〇圓		
蕎麥	七、七〇〇貫		三四、〇八七		
生絲	五、〇五〇		二二三、七五六		
木炭	一六八、〇〇〇		二一、二三五		
藥品			二、一二八		
土工品			一、三五〇		

紫 二、六〇〇 八、六四〇

本村に於ける行政部落數(大字)は十一にして其の内に農事實行組合一七、部落農區一ありて經濟更生を中心に生産社會方面の事業を行つて居る。村内に於ける各種團體としては村農會、産業組合、村教育會、軍人分會、青年會、婦人會、國防婦人會、軍友會、女子青年團、木炭改良組合、農事實行組合、水利組合等ありて夫々の分野に於て農村に於ける眞面目なる活動を爲しつゝあり。

上田信用販賣購買利用組合は組合員六二三、出資金二五、一六〇圓、貯金七八四八六圓貸付金七七六一二四圓にして事業分量に於いて尙僅少の點あれど農村組合としては堅實なる經營をなしつゝあり。
 教育機關としては本村は地理的關係により尋常高等小學校一、尋常小學校(分校)二、青年學校一ありて次代農村人の育成に努めて居る。人情風俗は従前に於ては稍々もすれば一部に思想的惡化の傾向ありたるも現在に於ては此等惡氣分はなく淳朴にして眞面目に農業に従事して居る。

二 長表農事實行組合

一 名稱並に所在地

長表農事實行組合

新潟縣南魚沼郡上田村三郎丸

二 區域及組織

本組合の區域は上田村三郎丸長表一圓にして村の北端に位し魚野川を堺に鹽澤町に接して居る。部落内耕地は殆

んど水田を以て占められ従つて本組合の活動も亦水田耕作に要する各種共同作業によつて運営せられて居る。これが活動單位は部落を六班(五戸宛)に分ち各班に班長を置き班長は班内農家の總ゆる事情をカードに記入して經營全般に亘つての指揮を爲して居り班長の任命は各班内に於て選任する組織になつて居る。

區域内戸數

總戸數	農業	商業	其他	加入戸數
三一戸	二九戸	一戸	一戸	三一戸

三 組合員の構成並部落生産關係

本部落に於ける組合加入戸數は全戸三十一戸にして戸數の中には商業其他二戸あれど半農經營を營み居る状態で組合員と協力するに差支へない状態である。

部落に於ける耕地面積及生産關係を數字に見れば次の如し

耕地面積

種目	田	畑	計	山林其他
部落内所有地	一八・七町	五・六町	二四・三町	八・二町
借入地	一三・二町	三・七町	一六・九町	
計	三一・九町	九・三町	四一・二町	八・二町
耕地廣狹別戸數				
種目	五反未満	五反以上	七反以上	一町以上
戸數	二戸	三戸	一町五反迄	二町迄
			一八戸	二戸
				二町以上
				一戸

主要作物作付反別

種目	水稻	小麦	大豆(畦畔を含む)	馬鈴薯甘藷	蔬菜
作付反別	三一・九町	〇・五町	二・四町	一・四町	二・一町

養蠶養畜

種目	春蠶	夏秋蠶	牛	馬	豚	鶏	兔
飼育數又は掃立數	四〇〇瓦	一、六〇〇瓦	一三頭	一頭	二頭	三〇〇羽	六〇羽

農産加工其他

種目	依	繩	苳苳	肥料叭	草鞋草履	堆肥
生産量	一、四五〇枚	一、二〇〇貫	二〇〇枚	三、〇〇〇枚	三、〇〇〇足	九〇、〇〇〇貫

米の反當收量 二石四升

主なる生産物

種目	金額	數量
米	二七、〇〇〇圓	一、六二七俵
如作物	一三、〇〇〇	
養蠶	一〇、〇〇〇	一、〇〇〇貫
養畜	一、〇〇〇	
工業	一、二五〇	
機業	三、〇〇〇	

以上により大略部落に於ける生産關係を述べたが本部落に於ける生産額は殆んど全部が農産物にして此の外各戸

の副業として賃機織による収入相當額に上れり。此の賃機織は大正十年—十一年頃より業者と連携して婦人の副業として農會等の斡旋のもとに開始せられたもので現在に於ては部落に於ける賣上賃三千圓位に上れり。然し事變前に於ける好況時代は尙相當な収入となつて居た。即ち麻織等の上等品の工賃はその當時一反に對し二百圓—二百五十圓位にして一年を通じ三—四反位を仕上げる事が出來た狀況であつたが現在に於ては之等の上等品等は殆んど事變の影響でなく安價なる品物が主である。従つて現在に於ける工賃はせいゝ反百圓—百五十圓であつて以前に比すると多額の収入は望めない現状であるが三十戸足らずの部落に於ける婦人の副業として年額三千圓と云ふ額は部落經濟を相當餘裕あるものに與つて力あるものがある。

尙賃機織の購入については村農會の補助等ありて殆んど全戸に購入せられてある。

四 沿革

本部落は前にも述べた通り魚野川の沿岸にありて沿岸にある水田の地勢は川底より低い關係上屢々水害を被り其の上思想的にも甚だ面白からざる傾向にあつた。即ち階級的に見て殆んど小作者が大部分を占め或は酒を好む等によつて小作料の減免等を行つて居た。偶々大正十五年本村が經濟更生計畫樹立し實施せられると共に前組合長等の盡力並部落民の自覺により部落農區設立せられ、部落計畫を樹立し村農會の指導により着々と軌道に乗つて來た。昭和八年に至り縣の特別補助により作業場を設置之を中心に汎ゆる部落活動を行つて來た。而して村經濟更生計畫進行と共に本部落に於ても色々共同的事業の開始をなし昭和十一年三月に至り現在の農事實行組合に改組した。設立當時に於ける組合の構成については戸數は現在通りなるも階級的組合員に於て相當程度現在より悪かつた、

即ち小作者が殆んどであつて現在の狀態にまで進展せしは農事實行組合設立による共同經營の結果である。設立當時の主なる事業としては水害地の灌溉排水工事であつて之に續いて水田の共同作業等着々と部落内の團結を圖りつゝ進展して來て居る。

五 目的事業活動概要

本組合の目的は經濟更生を其の主要目的として農業關係の總ゆる作業を共同作業場を中心に行つて部落内農家の生産を初め社會的經濟的向上を目指して居るにあり。現在に於ては此等の目的に加へ食糧の増産の大使命に向つて懸命な努力が組織的になされて居る。

事業活動の概要については生産關係については米を初め自給肥料、畜牛、養蠶、蔬菜其他薬工品、家庭工業(賃機織)等の増産計畫を樹立し實行組合として之が計畫達成に努めて居る。今其の計畫を記すれば次の如し。

種別	昭和十四年度	同 十五年度	説明
米	八八〇石	九一〇石	小耕地整理、客土、床締、排水路設置增收競技會開催
自給肥料	九、〇〇〇貫	一三、〇〇〇貫	其他紫雲英三町歩播種を一〇町歩に増加、草木灰蒐集
畜牛	一三頭	二〇頭	
養蠶	二、〇〇〇瓦	二、五〇〇瓦	桑園の改良稚蠶の共同飼育、品種統一
蔬菜	五、二〇〇貫	五、五〇〇貫	野菜類、甘藷、馬鈴薯
雜穀	三〇〇石	四〇〇石	大豆、小豆、ソベ其他
薬工品	一八、〇〇圓	二、〇〇〇圓	肥料、玉繩、蕨、履物
家庭工業	三、〇〇〇圓	四、〇〇〇圓	機業其他

次に經濟關係方面について見るに全戸農家日誌の記帳、經營改善農家の設定、生産物生産費調査による農家經營の改善肥料貯金一、〇〇〇圓青年部貯金八二〇圓、婦人部貯金六六〇圓、共有貯金四、〇〇〇圓、報國貯金二、九〇圓計一一、九七〇圓の貯金の取扱並之が獎勵、共同納税の實施、日用品、肥料、農機具、農用藥劑の共同購入肥料、米、雜穀、蔬菜其の他の共同販賣等總ゆる農家生活の全般に亘つて居る。

尙社會的關係の主なるものに、時間勵行、青年婦人部の設置、出征遺家族勤勞奉仕並慰問、農繁期託兒所の設置（春秋六〇日間）共同炊事場の開設（農繁期）衛生講話會等の開催、農業關係雜誌（家の光、蠶絲の光、石鳥、週報、有畜農業）等の共同購讀を行つて居る。

共同作業（後に詳述せん）の主なるもの機械畜力の共同利用、水田の共同作業、堆肥積込、稚蠶飼育、排水、薪切り等の共同作業、農用資材の共同配給、農産物の統制、社會的共同施設常會開催等である。

以上主なる事業特に共同作業によるその實績を見れば次の効果が云はれる。

畜力機關——競争心を増進し耕耘運搬作業力を増す生産技術

戦時下による農業統制を實行し生産力擴充に努む

栽培技術をなし耕耘の改善に資する所大なり

地力の維持増進上効果あり

主要作物の生産力を一部増し自家經營に好影響を及ぼす

資材不足に對し土地との研究をなし生産増加に努めんとす

經濟的効果

勞力を節約し之に依る餘剩勞力を他に轉稼利用出来る

従業者に數字的認識を強め勞力による經營改善の促進を図る

畜力（牛）の餘剩を他に轉じ現金収入を多からしむ農業生産物に對し經濟的販賣をなす

今後の勞力不足又は資材の不足に對し對策計畫の樹立をなす

社會的効果

社會的に各種團體に對し各自分擔の責任を主にするに至れり

隣保相助の觀念を一層密にし苦樂を惜まず

各種配給又は統制に對し團體的服従又は共同的效果舉がれり

精神的効果

家族全員に共同に對する精神力を涵養する、家業に精勵邁進することが出来る

婦女子に農業並勤勞精神を徹底せしむ

經營改善の研究に各自の責任を主にす

戦時下農家として採るべき統制によく服従す

六 事變後の動向

(1) 資材の配給狀況

先づ第一に肥料について見れば三割から五割程度の減配にして之が對策として魚野川の沈澱物を上げ施したり、或は共同堆肥積込等による自給肥料増産により補充して居る。

肥料に次いで本部落に於いて困却して居る資材は紺木綿即ち作業服地である。これは本部落の如き水田地帯に於ける農村では絶対に必要缺くべからざるものである。然しながら之が配給は僅少の爲或は古物を修繕して使用し古物のないものはスフ混入物を使用して居るが水田作業に於ては四日も使用すれば使用に堪へざる状態であり、之が配給改善は切實なる農民の希望である。

飼料等は或る程度間に合ふ様配給せられて居る、動力用石油も事變前に比すれば減少して居るが現在の所大した支障ない程度に配給せられて居る。

之等資材の部落に於ける分配は耕作面積五割生産量五割の割で組合長並各班長(六班)に於て割當分配する。代金の支拂は肥料の如き多額の現金の必要なものは積立金より全體額の七割まで支出他は各戸より支拂ひ處理して居る。

(2) 勞力不足對策並共同作業及共同施設利用狀況

勞力不足に對しては既に述べた通り極力畜力(牛)の利用を圖つて居る。部落内に飼養牛十三頭を算して居り、相當勞力の補充を爲して居り、尙近く之を二十頭に増加する豫定である。或は機械の利用、共同作業による勞力の合理化等又一方農繁期に於ける共同託兒所、共同炊事の實施による勞力の最高度の發揮等により之が對策として居る。

共同作業實施狀況

堆肥共同積込

部落を三班に分ち(一班八名宛)三月下旬より四月上旬の間に二日間行ふ、從來よりは利益として堆積量多くなり、肥質の改善をなすことが出來た。賃銀の計算法としては「ユヒ」の方法により金錢の算出なし。

稚蠶共同飼育

最寄り十二戸を以て班を組織し期間としては一週間二眠までとす、從來は三〇瓦について二眠まで六、七人の人手を要して居たものが二人位で仕上げられ非常に勞力の點が合理的である。勞賃は掃立瓦數を基礎に算定す。

共同 田 打

四、五人を一個班とし五月中二週間行ふ、一日の工程能率を上げ耕鋤其の他次の仕事にまで従事する事が出来る、勞賃は耕作面積と協定賃銀を以て算定する。

共同 田 植

最寄りの(全部落六ヶ班より成る作業單位)外青年婦人班を組織し六月上旬一週間實施する。此の場合各戸に於ては家族従業者全部出役する事になつて居る。勞働賃銀の算定方法は植付面積により協定賃銀を基礎に算出して、過不足を清算する。

病虫害共同防除(水稻)

この作業は全部落三〇戸を一團として實施する。施行時期は二回ありて苗代期に二週間、生育期に三週間夫々行つて居る。これが成績は全耕地部落各戸迄趣旨が普及し、氣持の持ち方が徹底する。賃銀の計算は行はず。

共同 排 水

二〇戸だけ参加一組五名宛の組織を持ち、五月下旬十日間、七月中旬一ヶ月間夫々施行する。從來毎日時間を費したものが五日毎に一回出役すればよいので努力の合理化に資する所大なり。賃銀は出役時間により計算する。

共同炊事
部落總戸數三戸参加して田植農繁時期即ち六月上旬一週間實施して居る、これに際しては本部落は全部農家なれば皆多忙を極めるので之が調理係は他部落(隣接)より商家、大工等の婦人を傭入れ(婦人二名男一名)一定の献立表により調理して居る。材料として各戸より家族數に應じ米一週間分、味噌一日十匁の割、蔬菜、薪を一週間分持ちよつて之等により行つて居る、これが成果は作業能率を高め農村榮養の向上のため大いに役立つ。經費は共同總計算にて行ひ家族構成人員により現物で或は金錢で支出して居る。

農繁託兒所

部落總戸數参加し託兒人員は十五年に於て二十六名なり。施行期間は六月中三十日間、九月十五日―十月十四日迄三十日間の二回、年二ヶ月間實施して居る、主婦は安心して農事に従事し能率を高むる事が出来る。託兒數と期間により經費を支出する。

共同作業實施に依る努力能率狀況

共同作業種目	努力の比較		備考
	従來	實施に依る努力	
堆肥共同積込	一〇〇%	八四%	婦女子の努力を省く
雜糞共同飼育	一〇〇	五六	

種目	棟數個數	坪數	價格	備考
共同田打	一〇〇	九五		
共同田植	一〇〇	八〇		家族従業者全員従事
病虫害共同防除	一〇〇	七五		耕地全般に徹底
共同排水	一〇〇	四七		
共同客土	一〇〇	七八		魚野川岸の肥沃なる土壤を共同により耕作田に客土する
共同防雪	一〇〇	八五		耕地全般に實施

共同施設の概要並之が利用狀況

種目	棟數個數	坪數	價格	備考
倉庫	一	四〇坪	二、〇〇〇圓	
庇	一	三	一〇〇	
(計)	三	四五	二、三〇〇	
機械	二八個		六四四	
細繩	一八		一九二	
發動機	二		五〇〇	
精米機	二		一〇〇	
調味機	一		二二〇	
味噌釜	一		四八	
理髮器	一		二〇	

種目	利用戸數	利用數量	單位當料	總額	備考
脱穀機	一六戸	三八〇石	六〇錢	二二八圓〇〇	六〇
馬耕器	三一	六六七	五〇	三三三、六〇	四五
碎土機	三一	七七	六二	四七、六四	二四
畜力利用車	三一	四五〇人	四	一八、〇〇	一二〇
醬油醸造器具	三一	四五〇人	四	一八、〇〇	一〇〇
計				六二七、二四	

共同作業場設立の動機及其の他概況について見れば、既に沿革の章等で記述せし通り本部落に於ては昭和五、六年の農村の深刻なる不況により益々農家は疲弊し困憊の極に達した。之が打開策として部落一致協力を以て作業の能率を高め併せて經營改善を圖る爲め共同作業場(昭和八年十二月縣の特別補助による設立)を始め各種機械器具の施設をなした、作業場に於ける事業實施方法は組合長、作業場係と共に庶務部に於て事業計畫をなし年度始め一般組合員に徹底せしめ脱穀、調製、精米等共同事業を主體に社會經濟部門に至る迄の事業を計畫し集荷、荷造、検査等の

事業を運営實施して居る。組合員は自己の所有建物の共同觀念を十分認識し共同利用の外に共同受檢、肥料の配合、各種配給品の分配、集會、吠織、製繩、藁打等各般に亘り利用して居る。尙國防婦人會、警防團、軍人分會、青年會等に於ても之が作業場を適宜利用して居り目的達成に邁進して居る狀況である。

出征遺家族耕作地は農事實行組合を通じて田植、除草等を主とし其の他各般の仕事について奉仕して居る。實行組合の外に青年團支部により勤勞奉仕團を組織し農繁期に於いて出征遺家族を始め手不足の農家に亘り行つて居る。實行組合が行ふ勤勞奉仕實施方法としては一定の奉仕日を定め耕作面積、就勞家族數に應じて奉仕人員を出役せしめて居る。

(3) 生活刷新其の他各種の概要

本部落に於ける金融關係は從來は相當の借財を有して居つたが經濟更生計畫實施後に於ては懸命なる努力の結果之等の借金は全部返還して現在に於ては農事實行組合に於ける共同的の貯金額は部落全體として二萬圓近くに達してゐる。部落内各農家は殆んど現金は所有せず専ら實行組合が必要なる時に或は副業資金なれば、副業講によつて貸付し、或は生産關係資金の必要なる時は夫々融通して居る。

生活刷新方面に於ける概況は昭和八年より冠婚葬祭の實踐事項を決定して極力刷新の方途に進んで居る、實踐事項の一例として從來正月用の各戸の酒は一升以上に及んで居つたが之が實施せられて一戸當二合に節約然も作業場に集合して新年の祝辭を述べあふと云ふ状態である。

納稅關係も部落居住者が各一年間宛交代に納稅係を務め納期の嚴守、支拂等の合理化を圖つて居り其の成績非常

に良好なるものがある。

次に婦人部等が主催で醫師を招聘して衛生講話等を行ひ保健衛生智識の普及徹底を圖ると共に今後の保健事業に萬全を期して居る。

尙婦人部に於ては從來富山の賣藥契約を爲して居たが、感情問題を發生し之と解約現在は婦人の手による全購聯家庭藥全戸配給を行つて居る。

(4) 他團體との關係

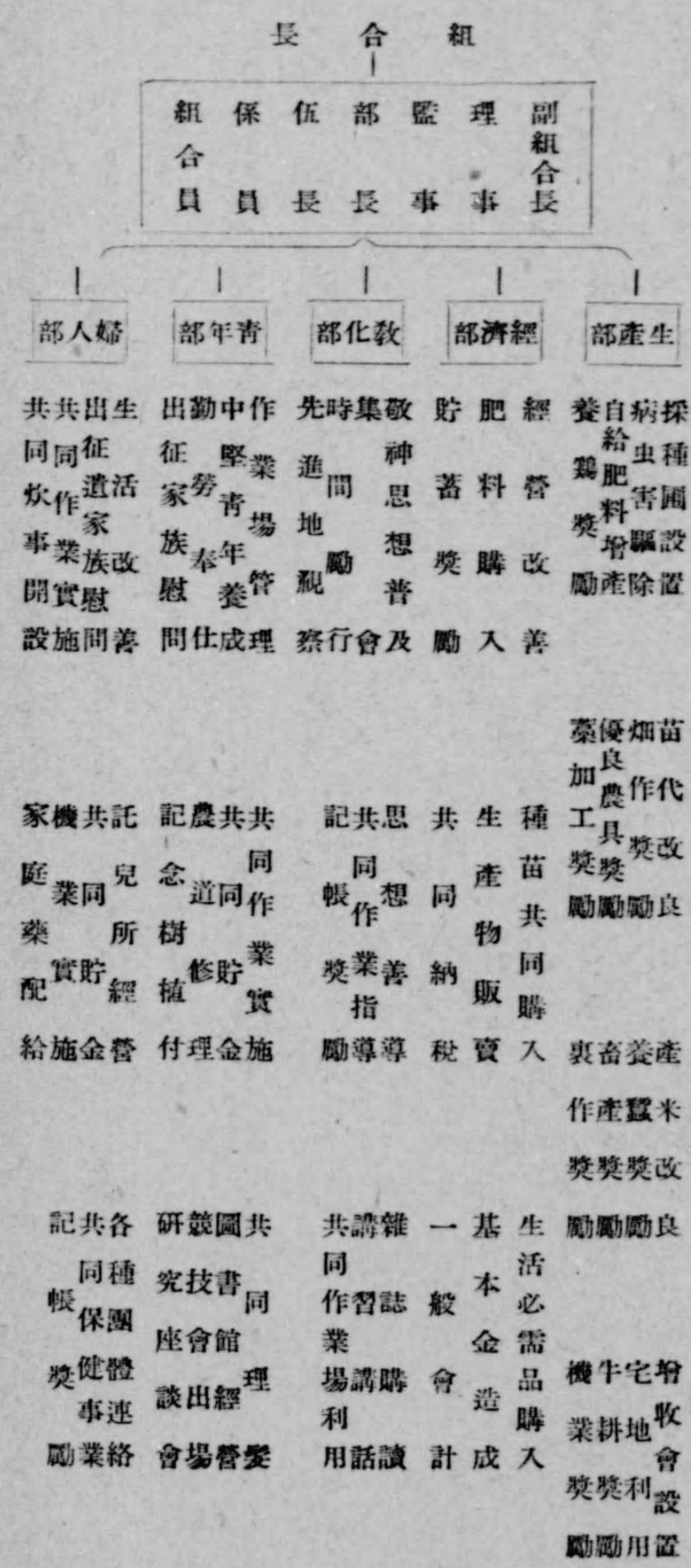
本村の方針として全部落に實行組合の組織を設け之による全村の經濟更生を圖つた關係上現在は各部落に設立を見夫々の活動を爲して居る。従前は農會、産業組合連絡不十分の點尠くなかつたが現在は農會長、組合長が兼務で農政に當つて居り實行組合は下部團體として資金及經濟方面は産業組合より指導、獎勵は農會よりと夫々密接なる連絡の下に今日に至つて居る。本部落に於いても村の方針に添ひ増産活動に職域奉公の誠を盡して居る。部落内に養蠶實行組合設立せられて居るが活動は實行組合が之に當つて居る、次に當會との關係は本部落は前に屢々述べた通り總て農事實行組合へ一元的に活動を集中して居る關係ありて當會長は組合長が兼ね毎月三回宛開催して居る。即ちこの會合が常會であり實行組合の集會であつて作業場が充てられてゐる。出席率は非常によく集合解散の統制は見事のものである。即ち集合の時間を厳守して若し遅刻した者ある場合は其の時の集會には發言權を停止せられる尙又缺席者は班長又は直接組合長に届出で無届け缺席者には總ゆる配給品を禁止する等の申合せを爲して居る。尙招集の手数を省く爲散會の際次の會合の日時を發表して手数を省略して成果を得て居る。

七 機關の種類及其の活動狀況

組織及役員

役員——組合長一名、副組合長一名、理事七名、監事三名、伍長三名、部長五名
役員報酬及任期
組合長手當年十一圓 役員任期各三ケ年

事業組織



以上の通りの事業組織より成つて居て實際作業を行ふのは五戸單位の班——六ヶ班の有機的活動により運営進展して居る。班長の仕事としては活動單位班(五戸)の總ゆる點を十分承知して最も能率的に、合理的な生産事業に従事出來得る様仕向けて行くことにある。即ち班内の納税から總ゆる經濟關係のこと及びカードを設けて各戸の勞働力、作付面積、作付種別、肥料の消費量、收穫量、其の他總ゆる生産關係を記入して事業組織と連携し以て部落一丸となつて理想郷建設に建身的な努力をなして居る。

八 經 費

收支豫算書

收入之部	項目	金額	附記
一、組合費	組合員割	七四、四〇	内譯 四〇圓は病虫害驅除實施反別割 三四圓四〇錢は一戸米三升宛徵收其の代金
	一、補助金	一一一、〇〇	
	縣補助	四〇、〇〇	
	縣農會補助	二〇、〇〇	
	村補助	一〇、〇〇	
	産業組合補助	一〇、〇〇	
	村農會補助	四一、〇〇	
	託兒所に補助		
	記帳指定部落として助成		
	納税組合に助成		
利用率に應じ助成			

一、事業費	六二〇、〇〇
製製部收入	六二〇、〇〇
一、繰越金	一四、六〇
前年度繰越	一四、六〇
計	八三〇、〇〇

支出之部

項目	金額
一、事務費	一四四〇〇錢
役員手當	一一、〇〇
會議費	二、〇〇
消耗品費	一、〇〇
一、事業費	五〇九、〇〇
記帳獎勵	六、〇〇
青年部助成	二〇、〇〇
婦人部助成	五〇、〇〇
品評會	三、〇〇
藥劑費	四〇、〇〇
採種圃	一〇、〇〇
一、負擔金	二〇、〇〇

米一俵に付二〇錢三、一〇〇依分

附記

組合長手當
總會茶葉代
筆墨代
帳簿購入助成
主として託兒所共同炊事に使用
苗代品評會、水稻增收會、堆肥品評會の賞品代
病虫害驅除藥劑代
共同採種圃管理費

作業場敷地料	二〇、〇〇
一、調製部費	三八〇、〇〇
米調製諸費	三八〇、〇〇
一、肥料資金	二〇〇、〇〇
肥料購入運用費	二〇〇、〇〇
一、豫備費	一八七、〇〇
計	八三〇、〇〇

共同作業場敷地料

技術員料一七〇、油、石油、その他二一〇圓

椿澤農事實行組合

〔所在地〕新潟縣古志郡北谷村

一 名稱並に所在地

椿澤農事實行組合

新潟縣古志郡北谷村字椿澤

二 區域及組織

本組合の區域は北谷村椿澤部落一圓を以て構成せられて居る。本部落は古志郡北谷村最南端にありて南は同郡山本村大字龜崎に接して、上流は椿龜川、下流は椿桂川を以て山本村桂澤と境し、東は山地を成して上北谷村大字松窪に接す。北は本村大字田井に接し、椿田川を境とし又西は緩傾斜をなして新組村大字百束に接し、概ね山北川を以て境す。耕地田は概して肥沃平坦にして東西に長方形をなし灌排水の設備良好にして耕作に至便なり。本部落内に於ける畑地は西北部に三反歩餘ありて宅地附近に若干、大部分は山畑にして耕作上不便なり。

本部落は機業地見附町に近接して居るため、區域内戸數一四〇戸の内農家戸數は兼業農を含めて九三戸なり。一戸當水田一町歩餘を耕作し、耕地整理事業の完成により農業經營——就中、水田耕作を中心とせる——には恵まれたる地なり。機業(負織)及び石油鑛業に従事する家族の収入は農業生産に益する所多し。負債整理組合の設立(昭

和十二年設立十三年より事業開始)は更に農家經營の好轉となり加ふるに本村に於ける産業組合(明治四十一年四月信用組合として設立現在には販購利事業兼營)の活動顯著なるため農業生産力の擴充は尙一層躍進の方途にある。

區域内戸數並農家戸數加入戸數

區域内總戸數	一四〇戸
區域内農業者戸數(兼業を含む)	九三戸
組合加入戸數	一四〇戸

三 組合員の構成

職業別構成

總戸數	農業者		商業者	工業者	其他
	専業者	兼業者			
一四〇戸	六八戸	二五戸	九三戸	六戸	二二戸
計	九三戸		六戸	二二戸	四五戸

階級別構成

自作	三九戸
自作兼小作	四三戸
小作	一一戸
計	九三戸

組合員の耕作反別概況

耕作面積に依る區別

耕作反別	耕作面積	農家戸數
耕地反別		
二反未滿	七反一二五	九戸
五反未滿	六五、六二九	一九
一町未滿	一四一、六二一	二〇
一町五反未滿	二五九、二一四	二一
二町未滿	三〇一、五一五	一八
二町五反未滿	六九、二二三	三
二町五反以上	八二、〇一四	三
計	九二六、六一一	九三

階級別耕作反別

階級別	耕作面積	農家戸數
自作	三一八反四一五	三九戸
自作兼小作	五三九、九一九	四三
小作	六八、二〇七	一一
計	九二六、六一一	九三

四 沿革

本部落地方は地勢關係により明治末年代に於て信濃川の大洪水等を蒙り、或は部落内に於いて石油湧出(明治二

十五年以來ある等により父祖傳來の農業を輕視する傾向にあつた。本村に於ける北谷村産業組合は當時敢然自力更生の一大決心の下に設立せられたが其の苦心努力は想像以上のものがあつた。其の後幾度か或は社會的、自然的な變遷、浮沈の經過を辿り大正年代も數年を過ぎた大正十二年頃に至つて本部落には當時の青年等が相集まり時守會なる會を作り時間の觀念を更めて認識して更生の第一歩はこれによる外なしとのもとに早朝(午前五時)寺院の鐘を打ち農家の起床、仕事に取りかゝる様に仕向けた。當時農會法が施行せられてから最早や三十餘年を経過其の間上級農會が農事の改良發達に貢献した處は尠くなかつたが、部落に確固たる農業團體の設置なきは折角之等系統農會産業組合等の指導もその實行に於て充分の効果が擧げられない事等を痛感し青年等を中心に部落内有志相集まり相謀りて大字總會によつて大正十四年三月椿澤農會(農會法によらざる申合せ農會)を創立した。然る後昭和三年に至り上級農會等の指示もあり農會法による椿澤農區と改稱する事になつた。越へて昭和十一年九月農事實行組合に改組して従來よりの生産關係事業の外耕田地の維持管理等を加へ活動を續けて來た。偶々本村(北谷村)が經濟更生特別助成村に指定せられるに至り耕地内各所施設を爲し今日に及んだものである。

五 目的及事業活動の概要

本組合の目的は農區として設立當時は單に農事の改良發達に向つて進んで來たが其の後農事實行組合に改組擴充せられに及び、これに加へて耕作田地の維持管理を行ひ最近に至つては進んで生活刷新、生活の協同化にまでその目的を進めて來た。

現在に於ける事業の概要を見れば次の通りである。

耕地維持管理

道路溝梁畔堤防の維持管理をなし用排水を容易ならしめ以て農業經營上其の福利を増進せしめて居る。尙特別工事として下町線(別紙略圖参照)七等以下十等田の間道路の擴張土盛等の工事をなす。

生産關係

水稻採種圃(三反歩)を經營し優良種子の配給と獎勵品種の統一を圖り、進んで種子粃の共同管理或は共同鹽水撰溜湯浸法等を施行して組合員に配布病虫害の驅除をなして居る。又一方採種日等を設定して各戸平均に歩調を揃へて生産力の擴充を企圖し、耕地の用排水の共同擔當、堆肥の増産獎勵方法、水稻作付狀況調査等を行つて居る。

畑作物に於ては優良種苗、農用藥劑の共同購入、特に麻及綿等を獎勵し種子の斡旋をなして居る。尙又自家用醬油の製造をなし、味噌糴の製造指導をなして居る。或は副業の獎勵をなし有畜農業による經營の合理化の爲の優良種家畜の補助指導をなして居る。又薬工品の増産獎勵を行つて居る。

經濟關係

肥料の共同購入、生産上必要と認められた場合には事業に對し借入或は貸付の便宜を圖りつゝある。即ち青田賣買防止の爲の資金の貸出、肥料資金の供出等をなすと同時に共同販賣、共同貯金、産業資金の蓄積、備考貯蓄共濟基金の積立、共同納税等を行つて居る。

社會關係

農業勞銀の協定を始め、地主、小作者間の調和委員會(地主二、小作人二より構成せられて居る)の運用、各種統計の

調査、農業休日及慰安日の設定、各種申合せ事項の徹底を図り、併せて應召家族に對し勞力奉仕をなし又は之が奉仕の斡旋をなして居る。

教育關係

講習講話會の開催、先進地の視察及研究會の開催、婦人の農業智識の啓發に努めて居る。其の他組合の目的を達成するに必要な事項については常時、臨時を問はず實施以て農業生産力の維持増大に努めて居る。

六 事變後の動向

(1) 資材配給狀況

肥料の配給狀況は相當に減少を見稍々もすれば生産力の低下を來す虞なしとしない現狀にして極力實行組合に於て自給肥料(堆肥、綠肥)を奨励して之を補給して居る。肥料の区域内配給については組合員より耕作反別を記入した申込書を取り産業組合、農會が協議の上決定する。

動力用石油については昨十五年度に於ては大した不足を來さず事業は圓滑に進捗した。次に農機具については区域内各戸については不足を來して居るが有無相通じて借貸して之が對策を爲して居る。其の他セメント、釘、針金等は極度に不足を來し、セメントによる堆肥舎、馬小屋製造に相當の不便困難を受けて居る。釘、針金に關しても亦配給量僅少にして不便多し。綿製品たる紺木綿及地下足袋は本部落の如き水田耕作地帯に於ては一番必要なるものであるが配給僅少の爲現在では抽籤に依り配給して居る。尙本部落に於ては之等綿織物の自給自足計畫を樹立昨十五年度に於て棉の栽培を奨励して相當の收量を見て愈々機械の購入設備に取りかゝらんと致せし處、如何にせん

一臺の機械も配給せられず遂に計畫は挫折し收穫せられた原綿は徒に各農家に持ち越されて居る状態なり。

其の他配給品については村長を主班とせる配給委員により配給せられて居る現狀にして日用品等については農業資材程の困難は受けて居ない。

(2) 勞力不足對策並共同施設利用狀況

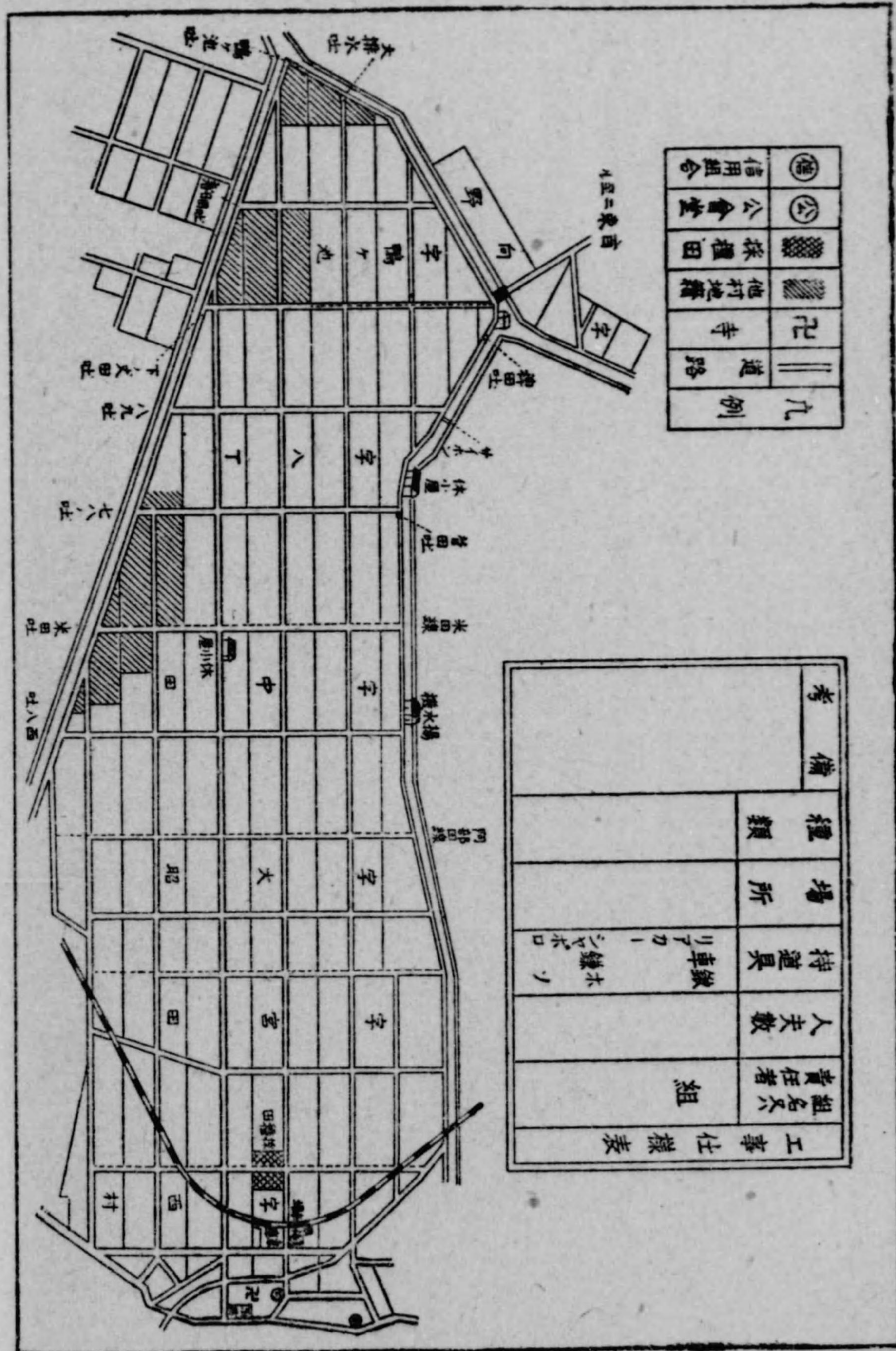
本組合に於ては勞働力不足對策として昨十五年度に於て村農會と共同出資により自動耕耘機二臺を購入し之が不足に備へたり。尙又田植季節に於ける勞力不足等は他村より日傭者を傭入れこれを補つて居る。

次に共同施設は總て産業組合に於ける設備を實行組合員が利用して居るのであつて作業場に於ける脱穀、糶摺は全部的に機械の利用を爲して居る。共同經營として採種圃を行つて居る事は既に述べたがこれは優良種子の配給品種の統一を圖る爲め、本組合生産部指導の下に好成绩の裡に行はれて居る。

(3) 土地利用狀況其の他耕地對策

水利及び耕地の施設は本組合に於ける最主要なる事業にして水田耕地の維持管理と稱せられて行はれて居る。

これには別紙の如き工事仕様表を組合に於て作成し置き必要を生じた場合組長(部落を六組に分つ)に連絡をして、工事に對する必要出役人員を求めて實施して居る。即ち別表の如く耕地田を十一區に區別してありて、組合員は組長よりの通知による場所、指導具、作業の種類を知り所定の場所に出役してゐるものなり。尙此の場合差支へありて出役出來得ざる場合には組長に申出て他日出役補填する仕組になつて居る。一ヶ年を通し詳細なる出役表を作成し義務日數の過不足に對しては別に定める協定勞賃の計算によつて金錢で支辨するものなり。



出征家族の耕地に對しては本組合會計に於て協定賃銀を支辨して人夫を傭入れ作業を行はせて居る。従つて之が耕地については少しの變化移動もなく増産に一路邁進して居る状態である。婦女子の副業として本部落は大正十一年頃より機業をなし之による賃銀の収入を圖つて居る、之が事業については一般經濟界と微妙なる關係にありて盛衰はあれど農家經濟に相當利益を齎した事は見のがせ得ない事實で現在は部落内に機業組合を設立して専念して居るものもある状態なり。

(4) 其他事變の影響、米麥供出方法、生活刷新並生活協同化の進展狀況

肥料不足に對應して堆肥を奨勵し生産増加を圖つたと雖も減收は免れざる狀況にあり、幸にして天候に恵まれ一兩年はさしたる減收は認めざりしも若し之を單肥配給を仰ぐことを得れば本村獨特の設計による共同組合により増産は安易の事と思はれる。

米麥の國家管理に依り供出は産業組合の指示に従ひ一元的に集荷し居るにつき特記すべき事項なし。

生活刷新等に關しては常に時間を尊重することに努め、實行組合の會合に際しては缺席者に對しては無届二十錢届出十錢、遅刻者に對しては無届十錢、届出五錢の罰金を徴收して時間の勵行を促進し居れり。冠婚葬祭については別紙生活改善實行事項を定め之を嚴守して居り近接村の範とせられて居る。

生活改善實行事項

- 一 時間勵行の件 監督 (各種團體の中より係員を設くること、本區は各組長を係員とす)

諸會合に於て缺席する者は金二十錢届出缺席者及遅刻者は金十錢届出遅刻者は金五錢とす(但冠婚祭葬公務疾病等萬止むを得ざる事情に依り係員の認むるものは此限りに非ず)前記の場合と雖も届出するものとす

二 婚禮に關する件 (監督 青年會椿澤支部)

(イ) 嫁取及婿取りの際は其家の屋敷内に晝夜共見に行かざる事

(ロ) 嫁婚の荷物は別室に納め祝儀物は床の間に置き飾付を爲さざる事

(ハ) 賄は質素を旨とし分相應にする事

(ニ) 金銀の水引は絶対に使用せざる事(但他町村の贈答の場合は此限りに非ず)

(ホ) 紋付の着替をせざる事

(ヘ) 嫁送の場合金は三十錢以内茶事の振舞は金五十錢以内友達振舞の際は金一圓以内とす

三 佛事に關する件 (監督 婦人會椿澤支部)

(イ) 葬式は總て質素にして大燵燭生造花等贈答をせざる事(但し團體は此の限りに非ず)

(ロ) 法事は酒肴五品以下とし盛込み引物は絶対に使用せざる事

四 兵士入除隊の件 (監督 軍人會第一班)

(イ) 入營の際は本區より錢別五圓小旗一本煙火參發を寄贈すること、假令他人より大旗小旗並に煙火の寄贈あると雖も絶対に用ひざる事

(ロ) 除隊の土産は配付せざる事

(ハ) 賄は五品以下とし折詰は使用せざる事

(ニ) 入除隊の際は區長總代及各團體長親類隣家の外廻らざる事(但し事變中は此限りに非ず)

★右事項に違反せるものは家族手當を支給せず

(ホ) 入除隊兵歡送迎の際は可成椿澤驛にて止むる事

(ハ) 入營の振舞は金一圓以内とし除隊振舞の時は金五十錢以内とす

五 近火見舞振舞酒の件 (監督 警防團防空班)

火災の際は絶対に酒を出さぬ事

六 種痘見舞をせざる事 (監督 婦人會椿澤支部)

七 諸會合の宴會は成るべく質素にする事

八 右決議事項を遵守せざる者は監督團體に於て大字に報告し一件につき金五十錢宛違約金として徴收する事

附記 以上實行事項は昭和十四年一月より昭和十八年十二月まで經濟更生第二期實行期間とす
昭和十五年四月五日

古志郡北谷村 椿澤區

(5) 農事實行組合と他團體との關係及部落常會との關係

本村に於ける農事實行組合は全く産業組合の下部細胞組織として存在し肥料資金の融通生産物、就中米穀の共同作業、供出等は全部産業組合へ一元的に集荷し居れり。尙一方農會との關係密接にして同一步調のもとに農業の發達に職域奉公の誠を盡して居る。

本村が經濟更生特別助成村に指定され村當局が農事實行組合をして經濟更生の中心活動機關として執り上げたることは勿論にして、部落常會即ち農事實行組合會なれば村の行政方針と實際活動とは相反するが如きは毫もなく、其の他農業關係團體は實行組合に包攝せられ居る状態なり。

農事實行組合を六組に分ち各々其の組長は部落常會の小組長(五人組)を兼務して居り表裏一體の關係にあり。